

岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第59集

# 江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書

—東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査—

(財)岩手県埋蔵文化財センター  
日 本 道 路 公 団

# 序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。

貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つことは大きな課題でもあります。

当センターは、昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について記録保存のための発掘調査を行いその記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は東北縦貫自動車道八戸線建設に関連し、昭和56年度に発掘調査した九戸村所在の江刺家Ⅳ遺跡と江刺家Ⅴ遺跡の成果についてまとめたものであります。

当遺跡は縄文時代中期末と後期初頭に発達した集落跡であり、県北部北上山地における歴史解明上貴重な資料を提示できるものと思っております。

この報告書が、研究者のみならず広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解が一段と深められる様願ってやみません。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜りました、県教育委員会日本道路公団仙台建設局をはじめ地元関係各位に感謝するとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈



# 例 言

遺跡名 江刺家Ⅳ遺跡  
調査記号 E SⅣ81  
所在地 二戸郡九戸村大字江刺家第13地割字鍋倉 8—2  
調査対象面積 4,950m<sup>2</sup>  
発掘面積 4,950m<sup>2</sup>  
調査期間（外業） 昭和56年4月13日～7月4日

遺跡名 江刺家Ⅴ遺跡  
調査記号 E SⅤ81  
所在地 二戸郡九戸村大字江刺家第13地割字鍋倉58—5  
調査対象面積 2,300m<sup>2</sup>  
発掘面積 2,300m<sup>2</sup>  
調査期間（外業） 昭和56年10月5日～11月6日

事業名 東北縦貫自動車道 八戸線  
事業主体者 日本道路公団仙台建設局

調整機関 岩手県教育委員会文化課  
調査主体者 (財)岩手県埋蔵文化財センター  
調査担当者 主任専門調査員 国生尚  
専門調査員 佐々木清文

協力機関 九戸村教育委員会

# 目 次

序

諸元

目次

I	調査に至る経過	1
II	位置・地形・基本土層	2
III	調査方法	4
IV	江刺家Ⅳ遺跡の調査成果	13
1.	遺構と遺物	13
(1)	C G13-1 住居跡	13
(2)	C J11-1 住居跡	13
(3)	C J13-1 住居跡	14
(4)	D A10-1 住居跡	14
(5)	D A11-1 住居跡	16
(6)	D C16-1 住居跡	16
(7)	D C22-1 住居跡	18
(8)	C G14-1 焼土遺構	19
(9)	C H15-1 焼土遺構	19
(10)	C I14-1 焼土遺構	19
(11)	C B11-1 ピット	19
(12)	C C08-1 ピット	20
(13)	C C12-1 ピット	20
(14)	C C12-2 ピット	20
(15)	C C18-1 ピット	21
(16)	C F14-1 ピット	21
(17)	C F19-1 ピット	21
(18)	C G13-2 ピット	22
(19)	C H11-1 ピット	22
(20)	C H13-1 ピット	22
(21)	C H13-2 ピット	22

(22)C H14—1 ピット	23
(23)C I 11—1 ピット	23
(24)C I 17—1 ピット	23
(25)C I 20—1 ピット	24
(26)D B11—1 ピット	24
(27)D B14—1 ピット	24
(28)D C13—1 ピット	25
(29)D C16—2 ピット	25
(30)D D10—1 ピット	26
2. 遺構外の遺物	26
3. まとめ	27
V 江刺家V遺跡の調査成果	76
1. 遺構と遺物	76
(1)Z I 01—1 住居跡	76
(2)A A05—1 住居跡	77
(3)A B06—1 住居跡	78
(4)A A06—1 焼土遺構	79
(5)A B05—3 焼土遺構	79
(6)A B05—1 ピット	80
(7)A B05—2 ピット	80
(8)A C09—1 ピット	80
(9)A D07—1 ピット	81
(10)A D08—1 ピット	81
2. 遺構外の遺物	81
3. まとめ	82
VI 放射性炭素による年代測定	112
VII 赤外吸収スペクトルによる琥珀の分析	113
VIII 竪穴住居の推定復元	115

## 図版目次

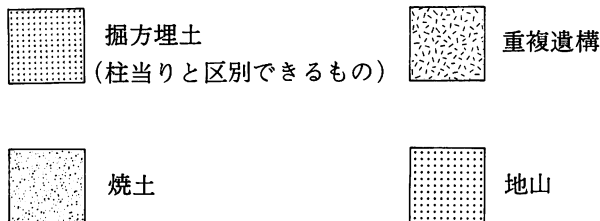
<p>第1図 位置図-----6</p> <p>2 地形図-----7</p> <p>3 調査範囲図-----8</p> <p>4 地区割図-----9</p> <p>5 遺跡遠景（空中写真）-----10</p> <p>6 江刺家Ⅳ遺跡全景-----11</p> <p>7 江刺家Ⅳ遺跡遺構配置図-----12</p> <p>8 C G13-1住居跡-----29</p> <p>9 C G13-1住居跡-----30</p> <p>10 C J11-1住居跡-----31</p> <p>11 C J13-1住居跡-----32</p> <p>12 D A10-1住居跡-----33</p> <p>13 D A10-1住居跡-----34</p> <p>14 D A11-1住居跡-----35</p> <p>15 D A11-1住居跡-----36</p> <p>16 D C16-1住居跡-----37</p> <p>17 D C16-1住居跡-----38</p> <p>18 D C16-1住居跡-----39</p> <p>19 D C22-1住居跡-----40</p> <p>20 C G14-1焼土遺構-----41</p> <p>21 C H15-1焼土遺構-----42</p> <p style="padding-left: 2em;">C I14-1焼土遺構-----42</p> <p>22 C B11-1ピット-----43</p> <p>23 C C08-1ピット-----44</p> <p>24 C C12-1ピット-----45</p> <p>25 C C12-2ピット-----46</p> <p>26 C C18-1ピット-----47</p> <p>27 C F14-1ピット-----48</p> <p>28 C F19-1ピット-----49</p> <p>29 C G13-2ピット-----50</p>	<p>第30図 C H11-1ピット-----51</p> <p>31 C H13-1ピット-----52</p> <p>32 C H13-2ピット-----53</p> <p>33 C H14-1ピット-----54</p> <p>34 C I11-1ピット-----55</p> <p>35 C I17-1ピット-----56</p> <p>36 C I20-1ピット-----57</p> <p>37 D B11-1ピット-----58</p> <p>38 D B14-1ピット-----59</p> <p>39 D C13-1ピット-----60</p> <p>40 D C16-2ピット-----61</p> <p>41 D D10-1ピット-----62</p> <p>42 土器実測図-----63</p> <p>43 土器実測図-----64</p> <p>44 土器実測図-----65</p> <p>45 石器実測図-----66</p> <p>46 石器等実測図-----67</p> <p>47 土器（写真）-----68</p> <p>48 土器（写真）-----69</p> <p>49 土器（写真）-----70</p> <p>50 土器（写真）-----71</p> <p>51 石器（写真）-----72</p> <p>52 石器・他（写真）-----73</p> <p>53 土器片（拓本）-----74</p> <p>54 江刺家Ⅴ遺跡遺構配置図-----83</p> <p>55 江刺家Ⅴ遺跡全景-----84</p> <p>56 Z I01-1住居跡-----85</p> <p>57 Z I01-1住居跡-----86</p> <p>58 A A05-1住居跡-----87</p> <p>59 A A05-1住居跡-----88</p>
---	---

第60図	A B06—1 住居跡	89	75	石器 (写真)	104
61	A B06—1 住居跡	90	76	石器 (写真)	105
62	A A06—1 焼土遺構	91	77	土器片 (拓本)	106
63	A B05—3 焼土遺構	92	78	土器片 (拓本)	107
64	A B05—1 ピット	93	79	土器片 (拓本)	108
65	A B05—2 ピット	94	80	土器片 (拓本)	109
66	A C09—1 ピット	95	81	土器片 (拓本)	110
67	A D07—1 ピット	96	82	スペクトル・グラフ	113
68	A D08—1 ピット	97	83	竪穴住居の復元 (写真)	121
69	土器実測図	98	84	竪穴住居の復元 (写真)	122
70	土器実測図	99	85	竪穴住居の復元 (写真)	123
71	石器実測図	100	86	竪穴住居の復元 (写真)	124
72	石器他実測図	101	87	竪穴住居の復元 (写真)	125
73	土器 (写真)	102	88	竪穴住居推定復元図	126
74	土器 (写真)	103			

## 凡 例

1. 石質は鑑定を佐藤二郎氏 (大船渡農業高等学校) に依頼した。
2. 遺構及び遺物の実測図は次の縮尺になっている。
 

(1) 遺構	$\frac{1}{40}$	(2) 土器	$\frac{1}{3}$
(3) 土器片	$\frac{1}{2}$	(4) 石器・その他	$\frac{1}{2}$
3. 遺構実測図に使用したスクリーン・トーンは次のものを識別している。



## I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を経由し青森県八戸市に至る約68kmの高速道路である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は延長距離27.6kmであり、二戸郡一戸町で国道4号線と接続する一戸インターチェンジを起点とし折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村、軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和48年10月に第7次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育委員会事務局文化課との協議が重ねられた。

文化課においては、昭和50年から51年度にわたり道路公団の協力を得て実施計画路線沿い400m巾を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行なった。その結果にもとづき遺跡保存とルート設定についても協議が行なわれた。

昭和52年9月に路線発表となり、中心杭、巾杭設置作業が開始され、昭和54年9月から用地買収へと進展していった。その間、発表された路線市内における遺跡確認調査も併行して文化課により実施されている。しかし山林地帯における分布調査や確認調査は思うにまかせず、改めて山林伐採後に行うことにした。この時点における全計画路線内における遺跡数は14遺跡約81,700㎡となっている。

昭和55年度から当埋文センターが第7次施行命令区間の発掘調査を文化課の調整と指導のもとに九戸村田代遺跡、軽米町吠屋敷Ⅰa遺跡、君成田Ⅳ遺跡の3遺跡について実施した。

同年9月には、工事用道路予定地の分布調査も行なわれ、一戸町沼山遺跡、滝野来田遺跡が追加となったが、滝野来田遺跡は文化課により立会調査した。

昭和56年度は、軽米町土弓Ⅰ遺跡、吠屋敷Ⅰb遺跡、吠屋敷Ⅱ、Ⅲ遺跡、馬場野Ⅰ、Ⅱ遺跡、九戸村道地Ⅱ、Ⅲ遺跡、嶽Ⅰ、Ⅱ遺跡、江刺家Ⅳ、Ⅴ遺跡、滝谷Ⅲ遺跡、江刺家遺跡、一戸町沼山遺跡、小井田Ⅳ遺跡の調査を行なった。この中で吠屋敷Ⅲ遺跡、馬場野Ⅱ遺跡、江刺家Ⅴ遺跡は、山林伐採後に遺跡確認なされ新たに追加となったものである。

なお、追加調査となった遺跡のうち江刺家Ⅴ遺跡の名称について一言おことわりをしておきたい。遺跡の所在が確認された段階で文化課との協議の結果、遺跡の名称を江刺家Ⅴとすることとなったが、その後遺跡台帳で確認したところ、すでに江刺家Ⅴは他の遺跡の名称となっていることが判明した。しかし、この段階での改称は困難であったので、調査する遺跡をそのまま江刺家Ⅴとし、先に確認されている遺跡を江刺家Ⅵと改称することとした。

## Ⅱ. 位置・地形・基本土層

位置（第1図） 二戸郡九戸村の中心地伊保内から国道34号線を約5.5 km北上すると江刺家の集落がある。集落のほぼ中心に円子方面分岐点があり、この分岐点より西北西方向に直線距離で約1 kmの地点に江刺家Ⅳと江刺家Ⅴの遺跡が所在する。又、この位置は折爪岳頂上からは南東方向に約2.7 kmの位置になる。

5万分の1の地形図においては「一戸」に、又、2万5千分の1の地形図においては「陸中軽米」の図上に位置している。

さらに、両遺跡の位置を詳細に示せば次のようになる。

江刺家Ⅳ遺跡 球面座標位置 北緯 40°15′13″ 東経 141°24′21″

平面直角座標位置 第10系 X+28.270~28.355 m

Y+48.687~48.768 m

標高位置 298~309 m

江刺家Ⅴ遺跡 球面座標位置 北緯 40°15′17″ 東経 141°24′25″

平面直角座標位置 第10系 X+28.410~28.460 m

Y+48.638~48.727 m

標高位置 303~310 m

地形（第2図、第3図） 馬淵川と瀬月内川にはさまれた山地は、前記二河川の方角と一致してほぼ南北方向に主分水嶺が伸びている。この地域での最高点は折爪岳で標高852 mである。また、この地域の分水嶺は極端に瀬月内川よりにあり、馬淵川が屈曲した流路を示すのに対して、瀬月内川は局部的には屈曲してはいるが、全体的にはほぼ直線的流路を示し流域での氾濫平野及び谷底平野は幅が狭いものとなっている。

瀬月内川側の山脚部は非常にはっきりした直線に近い形で、より高度の低い丘陵部に接している。そしてこの直線状の方角は瀬月内川の方角と一致し、しかも、地質走向方角ともほぼ一致している。山地に接した丘陵部は扇状地状の緩斜面である。細かい角礫、亜角礫が堆積しており、それをおおって火山灰が堆積している。扇状地状の地形ではあるが、背後の流域が狭いため、礫は崖錐堆積物に似ている。

扇状地状地形は東流する多くの小さな沢や湧水によって開析をうけて丘陵地状を呈している。遺跡はこうした扇状地状および丘陵地状地形面の東斜面や南斜面、尾根頂部などに多く分布している。このような遺跡の分布は、さらに沢や湧水の位置と深くかかわり合っていることが知

られている。

江刺家Ⅳ遺跡、江刺家Ⅴ遺跡の両遺跡とも、小さな尾根の標高305 m前後の南側緩斜面に立地しており、附近には沢と湧水がある。

**基本土層** 江刺家Ⅳ遺跡、江刺家Ⅴ遺跡共に基本土層は次のとおりである。

**第Ⅰ層** 黒褐色土層 層厚0.1～1.4m 表土、耕作土である。遺物を含む。

灰黄褐色土 層厚 十和田の降下火山灰と思われる。一部にしか認められず層にならない。

**第Ⅱ層** 黒～黒褐色土層 層厚0～0.5m 一部の地区に層となって認められる。遺物を含む。

**第Ⅲ層** 褐～暗褐色土層 層厚0.05～0.4m この層の上面が遺構検出面となる。

**第Ⅳ層** 橙色土層 層厚0.2～0.4m 南部浮石層である。

**第Ⅴ層** 褐色土層 層厚0～0.7m 八戸火山灰層である。

**第Ⅵ層** 褐～黄褐色土層 層厚不明 砂礫層で扇状地堆積物と思われる。

地形の項は次の文献によってまとめた。

北上山系開発調査室編 1972 北上山系開発地域土地分類基本調査「一戸」 岩手県

種市進 1982 折爪岳東麓の遺跡と湧水 紀要Ⅱ (財)岩手県埋蔵文化財センター



### Ⅲ. 調査方法

調査範囲（第3図、第4図）江刺家Ⅳ遺跡の調査対象範囲は県教委文化課、道路公団、埋蔵文化財センターの三者立会によって、尾根のほぼ中央を通る道路から沢までの南側地区となっていたので、発掘中の土捨場は、調査地区の南側は沢であるため無理として、北側にしか場所が得られない状況にあった。しかし、遺構が予想に反して尾根の北側にも検出させることになると、排土の下をさらに発掘しなければならないことになるので、土捨以前に遺構の有無を確認することとした。5本のトレンチを設定して発掘した結果では遺構が見られなかったので調査の範囲を当初の範囲として調査を開始した。

江刺家Ⅴ遺跡は調査範囲の南側は沢を一本隔てて江刺家Ⅳ遺跡の土捨場に続くので、この沢までである。北側は道路を隔てて水田があり、この水田は一面、一面の水準差が大きく、多量の土量移動によって造成されたものであることがわかる。水のさらに先は沢を1本隔てて嶽Ⅱ遺跡の範囲である。このため、江刺家Ⅴ遺跡と嶽Ⅱ遺跡との間はずでに開田時の造成をうけているので遺構の検出される可能性はないと推定された。

**座標と地区割** 座標は平面直角座標第10系におけるX+28.450m、Y+48.650mの位置を座標原点として、平面直角座標と平行な方向角をとり、江刺家Ⅳ遺跡と江刺家Ⅴ遺跡を共通の相対座標系におさめた。平面直角座標値は公団の路線中心線測量成果より求めた。

地区割は1辺5mのグリッドを設定することとし、グリッド名称は南北方向の地区割名称と東西方向の地区割名称との組み合わせで用いることにした。つまり、座標原点より出発して、南方向はAAからAJまで10グリッド、さらにBAからBJまで10グリッドと進める。東方向は、00から09まで10グリッド、さらに10から19まで10グリッドと進める。グリッド名称は南北方向と東西方向の組み合わせであるから、座標原点から南方向に5番目、東方向に6番目のグリッドであればAE05となる。

**表土発掘と遺構検出**、江刺家Ⅳ遺跡は第Ⅰ層の発掘は主としてバック・ホーを利用しておこない、第Ⅱ層は人力によって発掘した。また、第Ⅲ層上面での遺構検出は人力によっておこなった。

第Ⅲ層上面で検出された遺構の精査が終了した段階で調査面積の4分の1の割合で第Ⅳ層上面における遺構の有・無を発掘によって確認した。この結果は、第Ⅳ層上面に遺構は検出されず、又、第Ⅲ層中に遺物の出土もなかった。

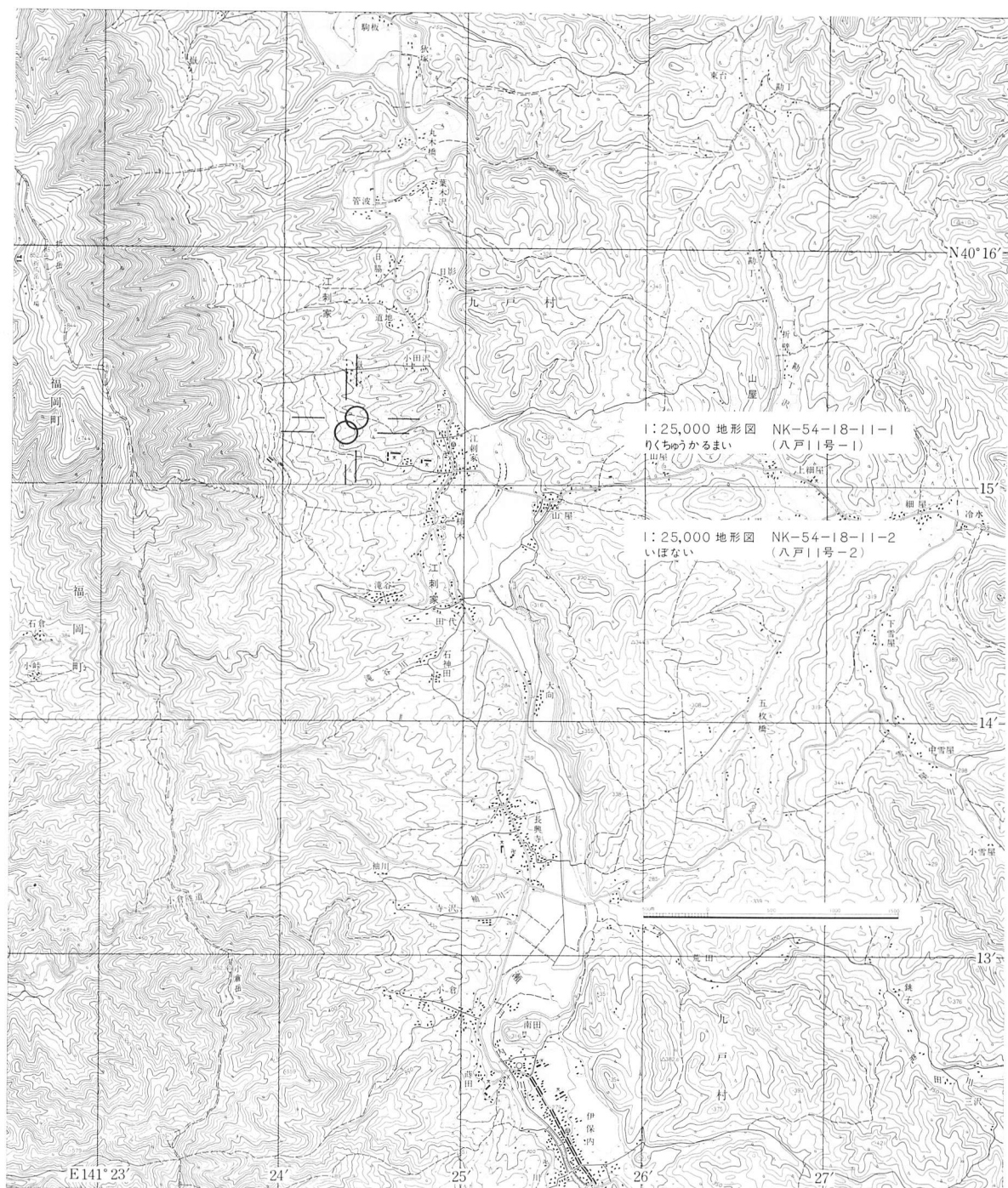
江刺家Ⅴ遺跡はテスト・グリッドや遺構確認のトレンチによって全体に第Ⅰ層が薄いことと発掘面積があまり広くないことから、第Ⅰ層の発掘および遺構検出をすべて人力でおこなった。

**精査と記録** 遺構の精査は住居跡については4分法で、ピットは2分法を原則とした。

調査の記録は、調査の経過は主としてカードへの記入と写真による記録をおこなった。遺構の実測は遣り方実測を応用した方法を用い、平面図、断面図共原則として縮尺を20分の1とし、遺構の細部実測など特に必要と思われる実測については縮尺を10分の1とした。

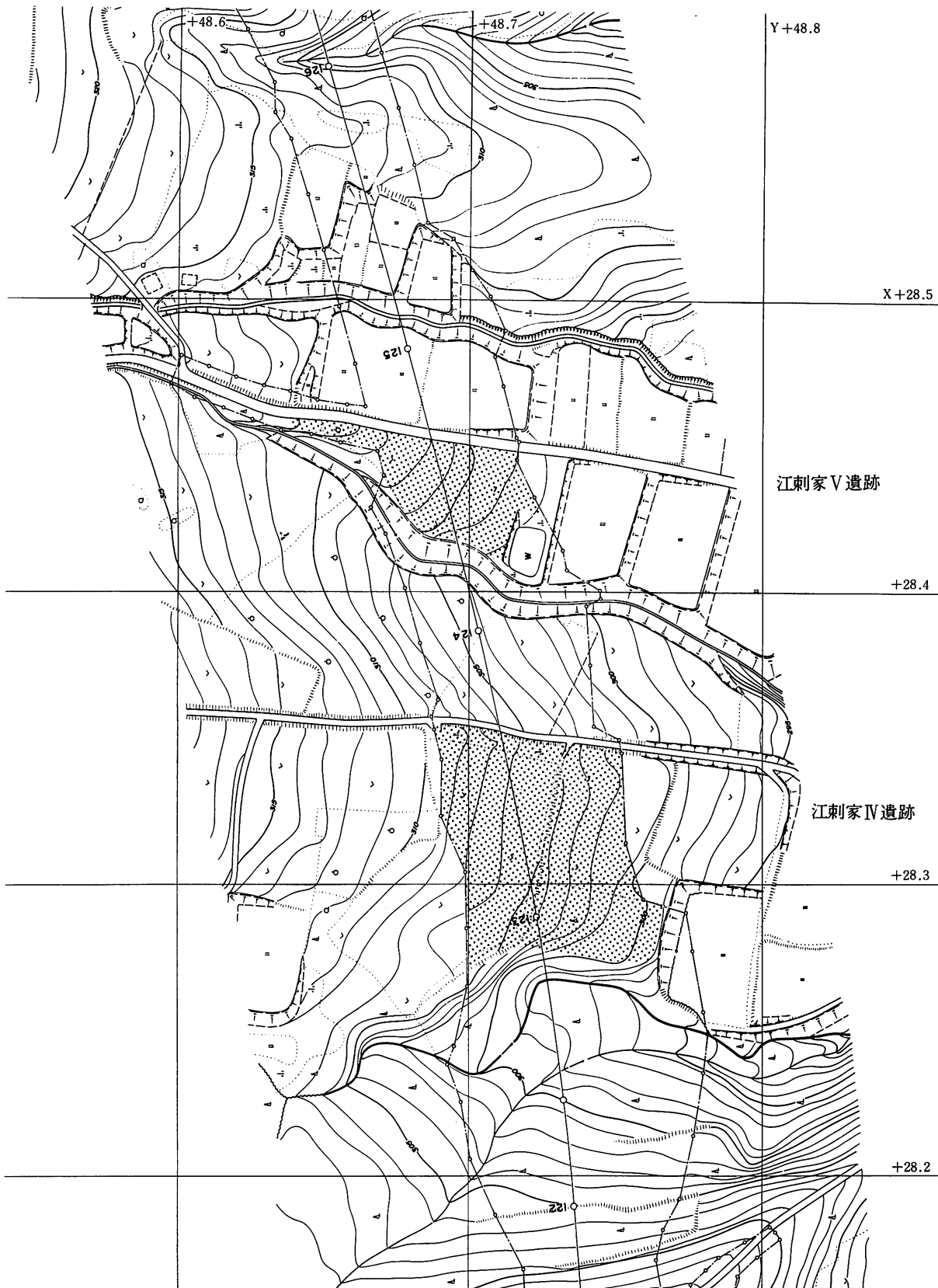
土色の決定は、小山正忠・竹原秀雄編著 1976 新版標準土色帖（5版） 日本色研事業株式会社によった。

写真はモノクロームが6×7版と35mm版で、カラー・リバーサルは35mm版で撮影した。

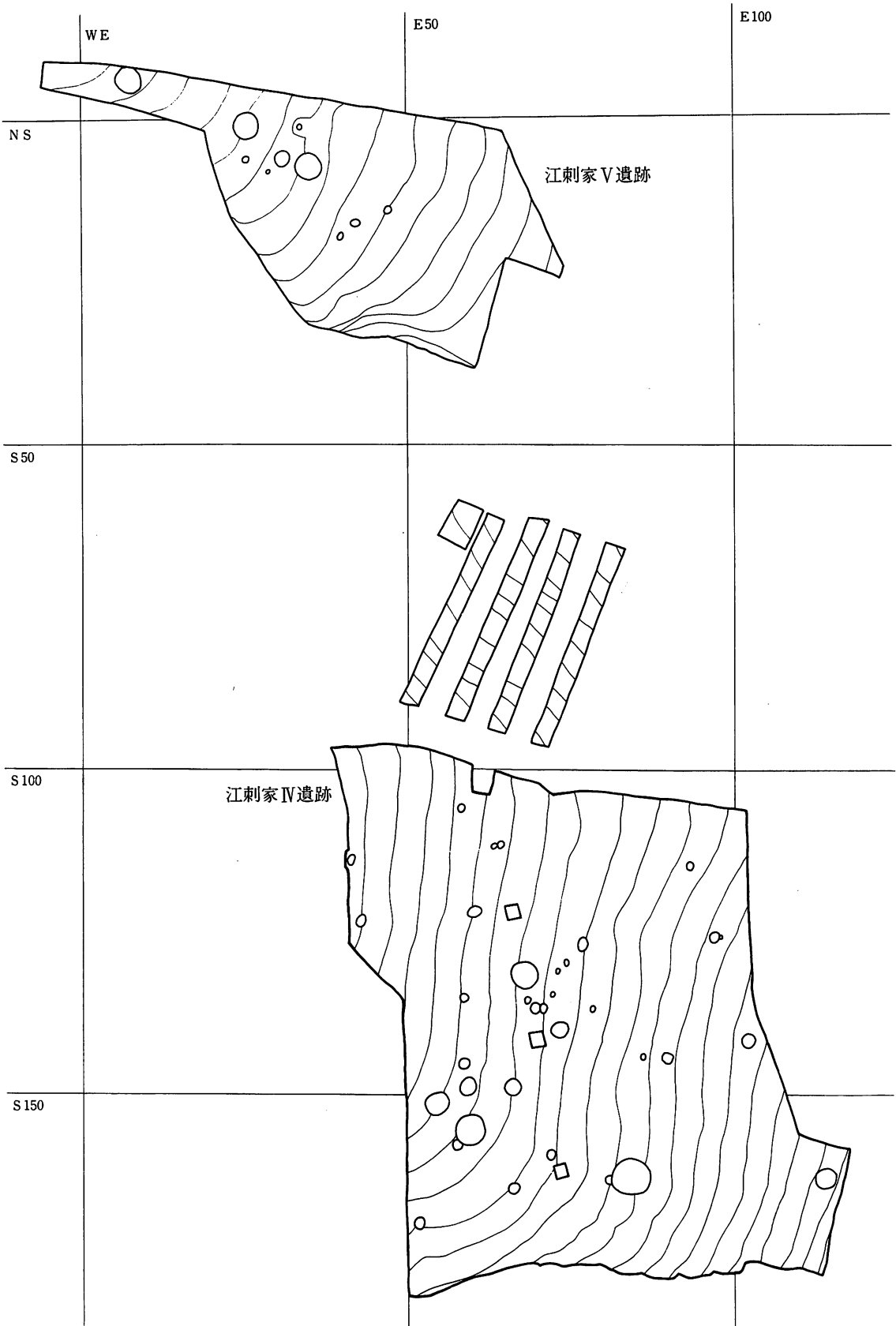


第1図 位置図

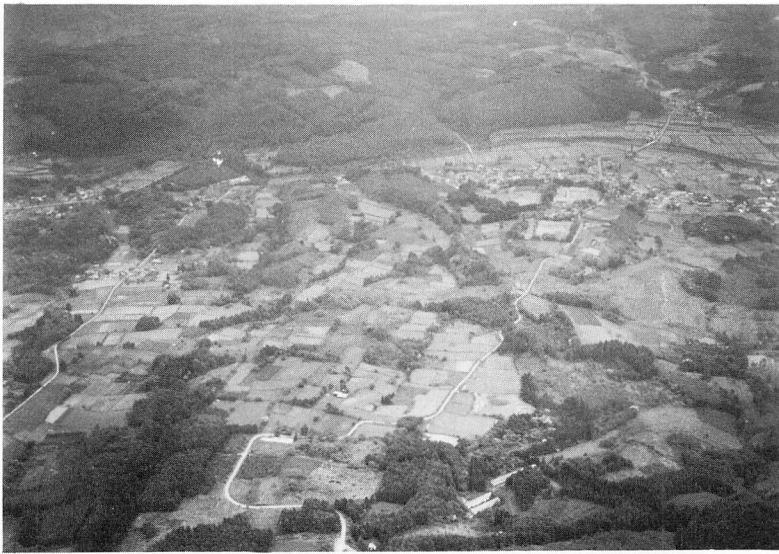




第3図 調査範囲図



第4図 地区割図



1. 江刺家Ⅳ遺跡  
江刺家Ⅴ遺跡



2. 江刺家Ⅳ遺跡(南から)



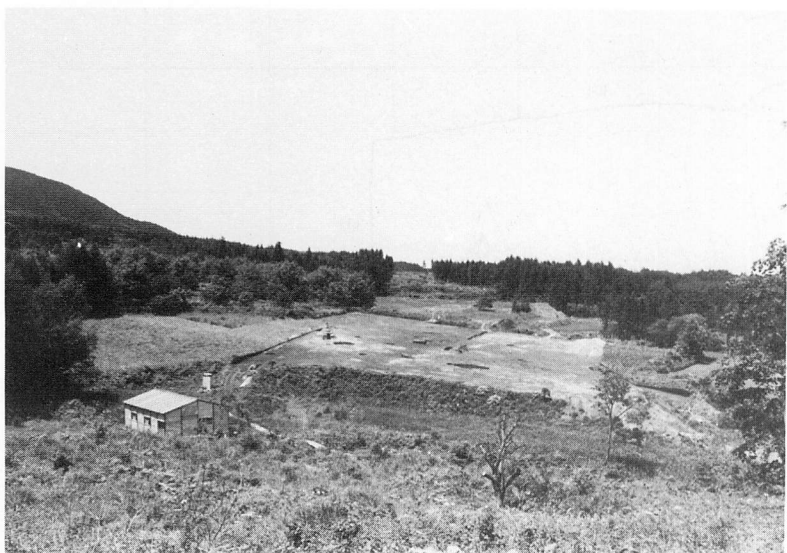
3. 江刺家Ⅳ遺跡(真上から)

第5図 遺跡遠景(空中写真)

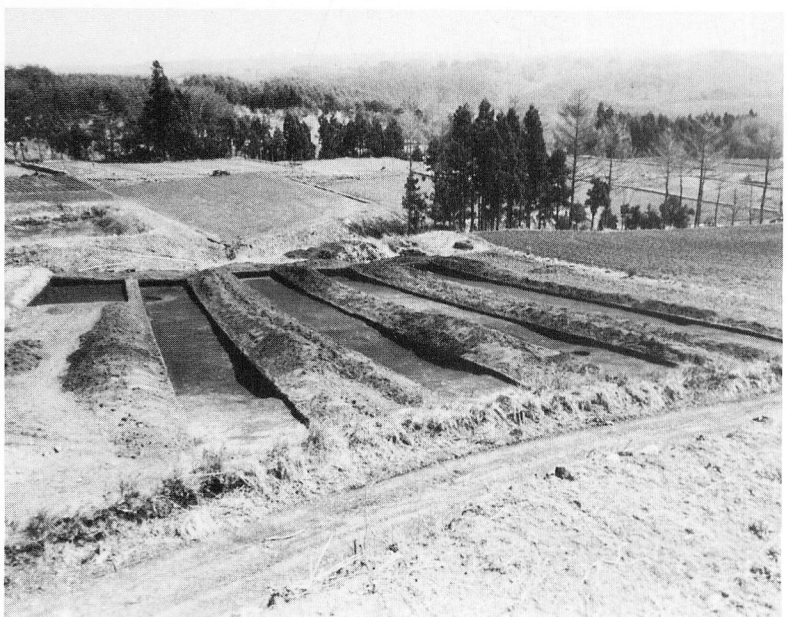




1. 発掘前(南から)



2. 調査後(南から)

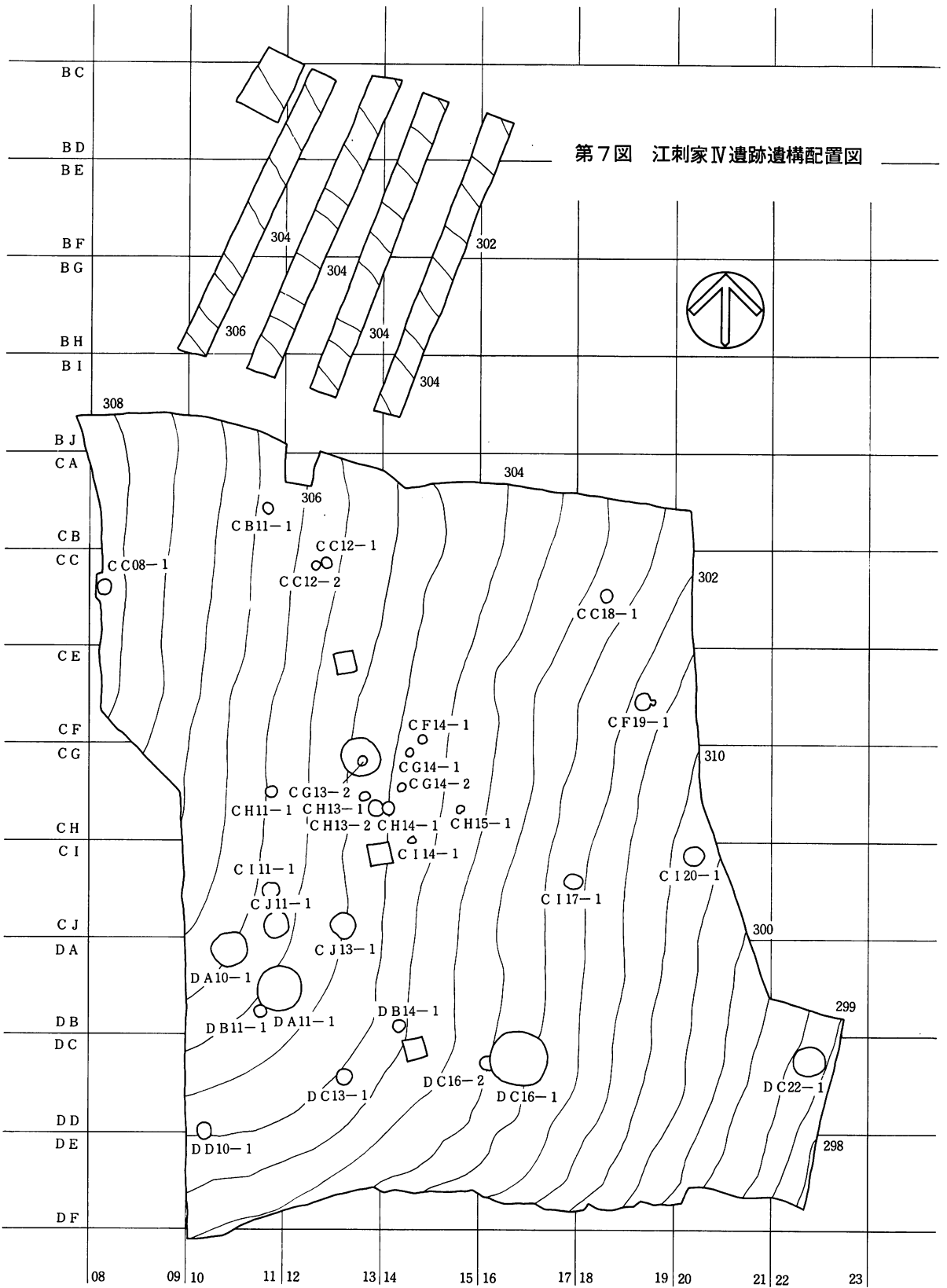


3. 北側試掘(南から)

第6図 江刺家Ⅳ遺跡全景



第7図 江刺家Ⅳ遺跡遺構配置図



## IV. 江刺家IV遺跡の調査成果

### 1. 遺構と遺物

#### (1) C G13-1 住居跡 (第8図、第9図)

C G13グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.44 mの高低差があり傾斜している。この住居跡はほぼ中央でC G13-2ピットと重複しており、住居跡の方が新しい。

平面は床面で直径3.7~3.2mのほぼ円形をしている。埋土は3層に区分されるが、全体として南部浮石を含む暗褐色土で柔く、粘りが無い。

床面はほぼ平坦であるが、全体に西から東方向に約0.2 mの高低差をもって傾斜している。C G13-2ピットと重複している部分での床面は貼り床となっている。

壁は西側で0.5 m、東側で0.2 mほどの高さがあり、全体に135~120°の角度で外傾している。

ピットは4ヶ所で検出された。各々について、掘方径-柱当径-深さの順で示すと次のようになる。 $P_1=0.28-0.2-0.5$   $P_2=0.29-0.18-0.35$   $P_3=0.3-0.15-0.4$   $P_4=0.25-0.15-0.3$  4本共柱として同時に存在したとすれば柱配置が不安定なものとなる。基本的には3本の柱であったものと思われる。

炉は床面中央から少し東側の位置にあって、粘板岩の割り石で内法約0.4 mの方形に囲った石囲炉が作られてあった。粘板岩の割り石は掘り込まれた穴の壁に押しつけるようにはめ込まれていて、石の炉の内側に面した表面は火熱を受けて赤変している。炉底部は南部浮石層を掘り込んでいて、火熱を受けて3~4 cmの厚さで赤色に変化している。

出土遺物は、埋土から縄文土器片が少量出土した。

いずれも少破片で、R Lの単節斜縄文やR Lの燃糸文などの地文に沈線文があり、磨消縄文が見られる。

#### (2) C J11-1 住居跡 (第10図)

C J11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.2 mほどの高低差をもって傾斜している。住居跡の東側でピットと重複しているが、このピットは埋土の状況から判断して新しい時期の攪乱と思われる。

平面は床面で2.3~1.8mのほぼ円形をしている。埋土は1層で南部浮石を少量含む黒褐色土でしまりもなく粘りもない。

床面はほぼ平坦であるが中央の東側に径0.7 m、深さ0.1 mほどのくぼみがある。貼床はなく、全体に堅くしまっている。

壁は北西の部分で0.2 mほどの高さを残しているが南東の部分では壁が残っていない。全体

に約120～110°の角度をもって外傾している。

ピットは検出されていないので、柱配置などは不明である。

炉は中央から少し北側の位置で、床面に検出されたくぼみの北西部分に一部重複するような状況で径0.3mほどの範囲に焼土がわずかに検出されたので、地床炉であったと思われる。

出土遺物はない。

### (3) C J 13—1 住居跡 (第11図)

C J 13グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.35mほど高低差があって傾斜している。

平面は床面で径1.9mほどの円形をしている。埋土は2層と区分できる。

床面はほぼ平坦で堅くしまっているが、多少東側に傾斜している。

壁は西側で0.49m東側で0.22mの高さがあって、外反ぎみに立ちあがっている。

ピットは床面の南端で径0.2m、深さ0.08mのものが1ヶ所検出されただけである。

炉は床面中央の少し東寄りに径0.7mほどの範囲に薄い焼土面が検出されているので、地床炉であったと思われる。

出土遺物は次の2点の土器がある。住居北側の床面から出土し、第42図1と2は入子になっていた。

鉢形土器(第42図1、第47図3)底径5.5cmの底部から内湾ぎみに胴部中央で胴部最大径となり、ここから口縁部直下までわずかに窄まりぎみに立ちあがる。口縁部は少し外湾ぎみに開き、口径は16.2～15.8cmと最大径となる。器高は19.5～19.0cmで全体に少し歪みのある鉢形の土器である。外面には、底部から口縁部まで一面にRLの単節斜縄文がほどこされている。内面には、全体に縦の磨きがほどこされた後に、口唇部だけ横の磨きが内・外共に見られる。内面には高さの約半分の所で上半分の器面が黒っぽく、下半分は白っぽくなっている。外面にも火熱を受けた痕跡が見られる。

鉢形土器(第42図2、第47図2)底径4.5cmの底部は少し張り出している。底部から約3分の2ぐらいのところまで胴部最大径9.8～10cmがあり、口唇部直下まで全体に内湾ぎみに立ちあがる。わずかに口唇部のところで少し外湾し、口径は胴部最大径とほぼ同じになる。器高は11.4～10.7cmで全体に少し歪みのある鉢形の小型土器である。外面には底部から口縁部まで一面にRLの単節斜縄文がほどこされている。内面には全体に横の磨きが見られる。

### (4) D A 10—1 住居跡 (第12図、第13図)

D A 10グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.35mの高低差があって傾斜している。

平面は床面で径3.4～2.9mの少し方形がかった長円形をしている。埋土は2層に区分できる

が、全体に南部浮石を少量含む黒褐色土で粘りも、しまりもない。床面に近い層に炭化物が多く含まれている。

床面は平坦で、堅くしまっていて、貼り床などはない。

壁は北西部分で0.35m、南東部で0.09mの高さがあり、全体に120～110°の角度で外傾している。

ピットは3ヶ所で検出されている。各々を掘方径—柱当径—深さの順に示すと次のようになる。 $P_1=0.3-0.12-0.38$   $P_2=0.3-0.21-0.34$   $P_3=0.34-0.18-0.58$  いずれも住居の柱跡と思われ、柱は2等辺3角形に配置されている。

炉は石囲炉が1基あって、住居の中央から少し南東側の位置に掘りくぼめられた穴の壁に粘板岩の割り石を貼りつけるように立てかけ、内法で約0.4×0.25mの長方形に作られている。炉床はわずかに焼けた痕跡があるが明確な焼土は形成されていない。炉を囲っている石の表面もそれほど火熱を受けた様子はないので、炉はあまり長い時間使用されたのではないと思う。

床面の主として西側から炭化材が検出された。炭化材は住居の構造材が焼失によって炭化したものと思われるが、部材として復元できるほど残ってはいなかった。炭化材の一部を利用して放射性炭素の測定をおこなったところ、 $3970\pm 125$ yB.P.のC-14年代が得られた。

出土遺物は次の土器4点である。土器は4点ともP（奥の柱）の周囲の床面から出土した。

鉢形土器（第42図5、第47図4）この土器は底部がなく、現存器高は約30cmである。底部方向から胴部最大径をとおり、口縁部直下まで全体にゆるく内湾しながら立ちあがり、口縁部が少し外湾ぎみに開く、胴部最大径と口径はほぼ同じで24.5～23.5cmである。外面は一面にLRの単節斜縄文がほどこされている。内面は全体に縦の磨きの後に口縁部だけ横の磨きがほどこされる。内面には現存高の約半分から上は器面が黒くスス状の付着物があって黒光りしているが、下半分は白っぽい。この境目は斑点状に白っぽい器面となっている。外面にも火熱を受けた痕跡が見られる。

鉢形土器（第42図6、第48図1）底径7.6cmの底部は少し張り出している。底部から器高の約半分ぐらいの位置にある胴部最大径まで内湾ぎみに立ちあがり、胴部最大径の位置から口縁部直下までわずかにくびれて、さらに立ちあがる。口縁部は外湾して開き、外側に折り返し口縁となっている。口径は20～17cmである。器高は26.1～25.5cmと全体に歪みのある鉢形の土器である。外面とは底部から口縁部まで一面にRLの単節斜縄文がほどこされている。内面には全体に縦のみがきがほどこされた後に、口縁部だけ横のみがきが内・外共に見られる。

鉢形土器（第42図4、第47図5）底径5.2～4.6cmの底部から胴部最大径までの下半部でわずかにくびれぎみの、全体として内湾ぎみに立ちあがる。胴部最大径の位置から少しくびれて、口縁部で外湾して開く、口径は12.4～10.5cmで最大径となる。器高は17.7～17.2cmと全体に歪

みのある鉢形土器である。外面は底部から口縁部まで一面にR Lの単節斜縄文がほどこされ、内面には全体に横のみがきが見られる。

鉢形土器（第42図3、第47図1）この土器は全体の約2分の1が欠損している。底径3.3～3.0cmの底部は少し外に張り出している。底部直上で少しくびれてから口縁部まで直線状に外傾して開く、口径は約8cmと思われる。外面は底部から口縁部まで一面に撚のゆるいLRの単節原体を不整な撚糸文にして施文している。内面には不定方向のみがきが見られる。焼成は良好ではない。

#### (5) DA11-1 住居跡（第14図、第15図）

DA11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.4mの高低差があり傾斜している。

平面は床面で径4.0～3.9mの円形をしている。埋土は南部浮石や炭化物を少量含む黒褐色土で一応3層に区分したが境界は明瞭ではない。床面付近では炭化材の小片がみられる。

床面は平坦で堅くしまっているが南側に多少凹凸がある。

壁は北西部分で0.51m南東部分で0.14mの高さがあり、約150～140°の角度で外傾している。

ピットは4ヶ所で検出された。各々について掘方径-柱当径-深さの順で示すと次のようになる。 $P_1=0.35-0.19-0.36$   $P_2=0.52-0.24-0.48$   $P_3=0.23-0.14-0.16$   $P_4=0.29-0.12-0.32$

炉は新・旧2ヶ所で検出された。第1の炉は住居の南側に長径（北東～南西方向）1.1m、短径（北西～南東方向）0.8m、深さ0.1mほどの長円形の掘り込みがあって、この掘り込みの北側半分に焼土面が見られる。焼土は2～3cmの厚さで堅くしまっている。石を抜き取ったような痕跡も見られないので地床炉であったと思われる。さらに、この掘り込みの埋土は南部浮石と炭化物が少量含まれる暗褐色土で堅くしまっている。これはあきらかに、住居跡の埋土とは区別でき、住居の使用中に埋められたものである。第2の炉は住居のほぼ中央に位置し、0.6～0.5mの範囲に焼土面が検出された。周囲に何の痕跡もないのでこれも地床炉である。焼土の厚さは薄くてわずかである。

出土遺物は埋土から縄文土器片が少量出土した。（第53図9）は二又の山形をした小形の突起で口唇は少し肥厚している。地文はLRの単節斜縄文である。

#### (6) DC16-1 住居跡（第16図、第17図、第18図）

DC16グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.78mの高低差があり傾斜している。住居跡の西側でDC16-2ピットと重複している。住居がピットを切っているので住居の方が新しいことになる。

平面は床面で径5.3～4.8mの少し方形がかった円形をしている。埋土は基本的には4層に区

分でき、住居は西側から途々に埋まったことがわかる。埋土は床面に近い層ほど炭化物の含まれる量が多くなる。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

壁は比較的高く、西側で1 m、東側で0.25 mほどの高さで残っていて、床面から110~125°の角度で外傾している。

ピットは4ヶ所で検出されている。各々について堀方径—柱当径—深さの順で示すと次のようになる。 $P_1=0.33-0.16-0.66$   $P_2=0.37-0.21-0.7$   $P_3=0.37-0.14-0.7$   $P_4=0.34-0.16-0.7$  これらは配置等から住居の柱であると思われる。

炉は住居の東側で石で囲った複式炉が検出された。炉は燃焼部と前庭部が掘り下げられ、壁にチャート質の角礫を押しつけるように並べて作られている。燃焼部は内法で0.6 mの方形に近い形をしている。前庭部は0.8 mの円形に近い形をしている。燃焼部の礫の内側は火熱を受けて赤変している。又、炉床には焼土が3~4 cm形成されている。前庭部の底面は堅くしまっている。

床面は主として4本の柱に囲まれた範囲の床面から炭化材が検出された。炭化材は住居の構造材が焼失によって炭化したものと思われるが、部材として復元できるほど残っていない。炭化材の一部を利用して放射状炭素の測定をおこなったところ、 $4100\pm 85yB.P$ のC-14年代が得られた。

出土遺物は土器4点、石器5点などがある。

鉢形土器（第43図1、第48図2）住居跡の中央床面から出土した。下半分を欠損していて、現存器高は約28 cmである。器形は底部方向から胴部最大径まで内湾ぎみに立ちあがり、胴部最大径から口縁部直下までくびれ、ここから口唇部まで外湾して開く、口径は31~29.3 cmで最大径を示す。外面は一面にRLの単節斜縄文がほどこされている。内面は全体に縦のみがきの後に口縁部だけ横のみがきがほどこされる。内面は全体に器面が黒くなっているが、現存高の約半分は斑点状に器面が白っぽくなっている。外面下半には火熱を受けた痕跡が見られる。

鉢形土器（第43図2、第49図1）住居の北側の床面から出土した。器形は底径10 cmの底部から器高の約半分ぐらいの位置にある胴部最大径まで内湾ぎみに立ちあがるが、下半部では少し外湾ぎみである。最大径の位置から口縁部直下までくびれて口縁部は外湾して開く、口径は28.3~25.3 cmで胴部最大径もほぼ同じである。器高は47.5~47 cmあって全体に歪みのある鉢形土器である。外面には一面にLRの単節斜縄文がほどこされている。内面には全体に初め縦のみがきの後に横のみがきをしている。外面の上部3分の2は火熱を受けた痕跡が見られる。

鉢形土器（第43図3、第49図2）住居の中央附近の床面から出土した。器形は底径4.5 cmの底部から胴部最大径の位置まで外湾して立ちあがる。胴部最大径は底部直上にあって、6~5.5

cmと最大径を示す。胴部最大径から口縁部へと内湾ぎみに、口径4.3cmと窄まってゆく。器高は8.2～7.8cmである。外面は上半分に初め縦のケズリがあって、後に横のみがきが見られる。下半分はLRの単節斜縄文がほどこされている。内面は全体に横のケズリがあって、後に上半分のみ横のみがきが見られる。

小形土器（第43図4、第49図3）住居の中央附近の床面から出土した。この土器は上部を欠損している。器形は底径が1.5cmあって、底部が0.5cmほど直線的に立ちあがり、底面は丸く抉られているため台付のように見える。底部から少し内湾ぎみに立ちあがっているが、現存部が高さ約2.2cmしかなく、詳細は不明である。外面にはLRの単節斜縄文が見られる。内面の調整は不明である。

敲石（第45図1、第51図1）住居の埋土下層から出土した。一部欠損している。石質は両輝石安山岩（第四紀・岩手山火山群起源産）である。敲打された痕跡が見られるが、磨石としても使用された可能性がある。

磨石（第45図2、第51図2）炉の北側、東壁ぎわの床面から出土した。石質は花崗閃緑岩（中生代・豊沢ダム付近産）である。形状は10.9×9.6×6.4cmの偏平な球形をしている。

磨製石斧（第45図4、第51図3）住居の埋土上層から出土した。石質は粗粒玄武岩（中新統中部・雫石西南部産）である。基部を欠損している他に刃こぼれも認められる。全面にわたって研磨成形されている。刃部は両凸刃で、いわゆる蛤刃となっている。

磨製石斧（第45図3、第51図4）住居の南東壁ぎわ床面から出土した。石質は石質細粒凝灰岩（中新統中部・雫石西南部産）である。基部を欠損している他に刃こぼれも認められる。全面にわたって研磨成形されている。刃部は両凸刃で、いわゆる蛤刃となっている。片面の中央に敲打痕がある。

不定形石器（第45図5、第51図5）住居の北側床面から出土した。これはもともと何か他の石器であったものの破片と思われるもので、片面の片側に連続した剝離調整を加えたと思われる部分が見られる。これ自体が石器として使用されたかは不明であるが、一応不定形石器とした。石質は珪質凝灰質泥岩（中新統上部・雫石西部産）である。

琥珀片、住居の中央から少し南西の位置で床面から出土した。琥珀は3ヶ所のブロックに分かれていたが、互いに近接している。いずれもザクザクに砕けていて、製品と思われる形状や、加工痕跡は見られなかった。岩手県立博物館に依頼し、赤外吸収スペクトルによる分析をしたところ、これらの琥珀は久慈産である可能性ができた。

#### (7) DC22-1住居跡（第19図）

DC22グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.51mの高低差があって傾斜している。

平面は床面で径2.5 mの円形をしている。埋土は南部浮石を少量含む暗褐色土で粘性はなく、わずかにしまりがある。

床面は全体に西から東方向に傾斜していて、地床炉と思われる焼土面の位置で一番低くなる。周囲との差は0.15～0.03 mほどである。床面は全体にわずかに堅いていどである。

壁は西側で0.45 m、東側ではわずかに0.08 mほどで、床面から115°の角度で外傾しているが、東側は壁の高さがほとんどないため不明瞭である。

炉は住居の中央から少し東側によった位置に径0.4 mほどの痕跡でいどの薄い焼土が認められ、周囲には何の痕跡も認められないので、地床炉であったと思われる。

出土遺物はない。

#### (8) C G 14—1 焼土遺構 (第20図)

C G 14グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は焼土面を中心に2 mぐらいの範囲では0.13 mの高低差があり西から東方向に傾斜している。

平面は径0.9～0.8 mの円形をしており、焼土は最大1 cmほどの厚さがあった。焼土の周辺には他に何の痕跡もなく、焼土面を中心に2 mほどの範囲には礫や土器片の分布が見られたが、量は少量である。当初は住居跡の可能性も検討されたが、壁や床面らしい痕跡もなく、住居とする根拠が得られなかったので焼土遺構とした。

出土遺物は縄文土器片が少量出土している。いずれも地文だけの破片であった。

#### (9) C H 15—1 焼土遺構 (第21図)

C H 15グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は焼土面を中心に径2 mぐらいの範囲で西から東方向に0.13 mの高低差があり傾斜している。

焼土の範囲はあまり明瞭ではないが径0.9～0.6 mほどの不整形円形をしている。焼土の厚さはきわめて薄く、痕跡でいどであった。

焼土の周辺、周囲には他に何の痕跡も検出されなかった。

出土遺物はない。

#### (10) C I 14—1 焼土遺構 (第21図)

C I 14グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は焼土面を中心に、径2 mの範囲では北西から南東方向に0.31 mの高低差があり傾斜している。

焼土の範囲は明確ではないが、径0.7～0.6 mの不整形円形を呈すると思われる。焼土の厚さはきわめて薄くて、痕跡でいどであった。

焼土の周囲、周辺には他に何の痕跡も見られなかった。

出土遺物はない。

#### (11) C B 11—1 ピット (第22図)



C B11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.13mの高低差があつて傾斜している。

平面は開口部で径1.2m位、頸部で径1.0m位、底部で径1.25m位のほぼ円形をしている。

断面は開口部から頸部で窄まり、さらに底部にかけて脹らみ、全体としてフラスコ状を呈する。頸部は底面から0.3mほどの位置にあり、全体の深さは0.62～0.5m位である。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

底面はほぼ平坦であるが、中央より少し東よりに径0.4m、深さ0.1mほどの凹があり、礫が1個おかれてあつた。

出土遺物はない。

#### (12) C C 08—1ピット (第23図)

C C 08グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.15mの高低差があつて傾斜している。

平面は開口部で径1.4m位、頸部で径0.9m位、底部で径1.1m位のほぼ円形を呈している。

断面形は開口部から頸部にかけて窄まり、さらに底部にかけて脹らみ、全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面から0.3～0.25mの位置にあつて、全体の深さは0.7～0.65m位である。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

底面は平坦で、やや全体に西から東方向に傾斜している。

出土遺物はない。

#### (13) C C 12—1ピット (第24図)

C C 12グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.14mほど高低差があつて傾斜している。本ピットの西側に近接してC C 12—2ピットがあるが重複していない。

平面は開口部で径1.12～0.9m位、頸部で径1.05～0.85m位、底部で径1.25～1.1m位で南北方向に少し長い円形を呈している。

断面は開口部のすぐ下に頸部があつて、頸部から底部にかけて外湾し、全体としてフラスコ状を呈する。全体の深さは0.65～0.55mである。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

底面は平坦である。出土遺物はない。

#### (14) C C 12—2ピット (第25図)

C C 12グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.12mの高低差があつて傾斜している。本ピットの東側に近接してC C 12—1ピットが検出されているが、重複していない。

平面は開口部で径1～0.8 m位、頸部で径0.9～0.8 m位、底部で径1.1～1.0 m位の不整形円形をしている。

断面は開口部から頸部にかけて窄まり、頸部から底部にかけて脹らみ、全体としてフラスコ状を呈する。頸部は底面から0.4～0.2mの位置にあって全体の深さは0.55 mである。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

底面は平坦である。出土遺物はない。

(15) C C 18—1ピット (第26図)

C C 18グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.25mの高低差があり傾斜している。

平面は開口部で径1.15m位、底部で径1.4 m位の円形を呈している。

断面は開口部から底部にかけて脹らみ、頸部位置がわからないが、全体としてフラスコ状を呈している。全体の深さは0.4～0.35mである。

底面はゆるく凹面状になっていて中央部が一番低くなる。

埋土は5層に区分でき、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

(16) C F 14—1ピット (第27図)

C F 14グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.23mの高低差があり傾斜している。

平面は開口部で径1～0.85m位、底部で径0.75m位のほぼ円形を呈する。

断面は浅くて、口径が開いた皿状を呈し、壁は底部から開口部に直線的に外傾するため頸部がない。全体の深さが0.2mである。

底面は全体に東方向に傾斜しながら、ゆるく凹面状になっていて中央部が一番低くなる。

埋土は南部浮石をわずかに含む単層の黒褐色土で、小礫とわずかの縄文土器片が含まれていた。土器片はいずれも単節斜縄文を地文とする小片のみである。

(17) C F 19—1ピット (第28図)

C F 19グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.22mの高低差があって傾斜している。本ピットの東側に小さなピットが重複しているが、この小ピットは埋土が第Ⅰ層と同質であるため、新しい時期のピットと思われる。

平面は開口部径1.6～1.5m位、底面で1.1～1 mの不整形円形をしている。

断面は浅くて口径が開く皿状を呈するが、整った形をしていない。全体の深さは0.4～0.3mほどである。

底面はゆるやかな凹凸があって平坦ではない。

埋土は南部浮石を少量含む黒色土と黒褐色土からなり、3層に区分できる。

出土遺物はない。

(18) C G13-2ピット (第29図)

C G13-1住居跡の床面のほぼ中央の位置で検出された。C G13-1住居はC G13-2ピットを切って作られたのか、それともC G13-1住居の床面から掘ってC G13-2ピットが作られたのか、両方の可能性があるが、C G13-2ピットの埋土の状況が人為的であること。G G13-1住居の石囲炉の石がC G13-2ピットの埋土の上に配置されていることなどから、C G13-1住居の方が新しいと思われる。

平面は開口部径が約1.1m位、底部径が約1.1m位とほぼ円形を呈している。

断面はピーカー状を呈しているが、北側の壁が少しオーバーハングしているので、原形はフラスコ状であった可能性がある。

底面は平坦である。

埋土は3層に区分できるが、埋土全体は南部浮石を少量含む黒褐色土と褐色土の水平互層になっていて、堅くしまっている。人為的な埋土と思われる。出土遺物はない。

(19) C H11-1ピット (第30図)

C H11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.19mの高低差があり傾斜している。

平面は開口部径約1.1m位、底部径約0.7mのほぼ円形を呈する。

断面は浅く、口径が開く皿形を呈している。底面はほぼ平坦である。

埋土は南部浮石を少量含む単層の黒色土である。出土遺物はない。

(20) C H13-1ピット (第31図)

C H13グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.13mの高低差があり傾斜している。本ピットに近接してC H13-2ピットが検出されているが、重複はしていない。

平面は開口部径1.1~1m位、頸部径0.8~0.6m位、底部径0.7~0.9mのほぼ円形をしている。

断面は開口部から頸部にかけて窄まり、さらに底部にかけて脹らみ、全体にフラスコ状を呈している。頸部は底面から0.3~0.25mの位置にあって、全体の深さは0.6~0.5mであった。

底面は少し中央で低くなるが、ほぼ平坦である。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。出土遺物は縄文土器片が数片出土した。いずれも単節斜縄文の小片のみである。

(21) C H13-2ピット (第32図)

C H13グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.1mの高低差があって傾斜している。本ピットに近接して、北西側にC H13-1ピット、東側にはC H14-1ピットが検出されている。いずれも重複はしていない。

平面は開口部径1.6m、頸部径1.25m、底部径1.3mのほぼ円形をしている。

断面は開口部から頸部にかけて窄まり、さらに底部にかけて脹らみ、全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面から0.4～0.3mの位置にあって、全体の深さは0.7～0.6mであった。底面はほぼ平坦である。

埋土は4層に区分できる。自然堆積と思われる。出土遺物は縄文土器片が数片であった。第53図1のものは口縁部の破片である。口縁部には地文はないが、微隆帯による水平区画が見られ、RLRの複節の側面圧痕文がある。口唇部は肥厚している。胴部にはRL単節斜縄文を地文として、この上からRLR複節の側面圧痕文が施文される。

#### (22) CH14-1ピット (第33図)

CH14グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.12mほど高低差があって傾斜している。本ピットの西側に近接してCH13-2ピットが検出されているが、重複はしていない。

平面は開口部径1.3m位、頸部径1～0.8m位、底部径1～0.7m位と開口部は円形であるが底部では少し長円形ぎみになる。

断面は西半分にわずかに頸部が残されているので、本来はフラスコ状を呈していたと思われる。東半分は崩れたために頸部を失ったものと思われる。頸部は底面から0.3～0.2mの位置にあって、全体の深さは0.45～0.4mである。

底面には多少凹凸が見られ、平坦ではない。

埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。出土遺物は縄文土器片が少量出土した。いずれも単節斜縄文を地文とする小片である。

#### (23) CI11-1ピット (第34図)

CI11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.16mの高低差があり傾斜している。

平面は開口部径1.7m、頸部径1.5m、底部径1.7mの不整円形を呈している。底面は平坦であるが、しまりが無い。

断面形は開口部から頸部、さらに底部へと内湾ぎみに掘り込まれていて、全体としてフラスコ状を呈している。北西側の壁は少崩落していると思われる。頸部は底面から0.5～0.3mの位置にある。全体の深さは0.7～0.55mである。埋土は5層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物はない。

#### (24) CI17-1ピット (第35図)

CI17グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.2mの高低差があって傾斜している。

平面は開口部径1.8～1.4m位、頸部径1.4～1.2m位、底部径1.5～1.3m位で不整円形を呈している。底面はほぼ平坦で、少ししまりがある。

底面には密着して0.38～0.12m大の扁平な川原石が10個検出された。このうち4個の石には火熱を受けた痕跡が認められる。なお、ピットの底面には火熱を受けた痕跡は見られなかった。

断面は開口部から頸部にかけて窄まり、頸部から底部にかけて少し広くなり、フラスコ状を呈している。頸部は底面から0.3～0.2mの位置にあり、全体の深さは0.7～0.45mである。埋土は3層に区分され、自然堆積と思われる。

出土遺物は縄文土器片が少量出土した。いずれも単節斜縄文を地文とする少片である。

#### (25) C I 20-1ピット (第36図)

C I 20グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.37mの高低差があつて傾斜している。

平面は開口部から頸部の間は崩落があつて広く不規則な形状となつていて、全体として不整円形を呈している。開口部径1.8～1.5m、頸部径1～0.8m、底部径1.1～0.8mである。底面はほぼ平坦でよくしまつている。

断面は頸部より底部がわずかに広く、西側が内湾ぎみに掘り込まれ、東側は頸部がなく、直線的に外傾した壁となつている。わずかに西側の頸部によつて本来はフラスコ状のピットであつたことがわかる。埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物はない。

#### (26) D B 11-1ピット (第37図)

D B 11グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.14mの高低差があり傾斜している。

平面は開口部径1.3m、頸部径1.1m、底部径1.3～1.2mのほぼ円形をしている。底面はほぼ平坦で、それほどしまりはない。底面中央付近に径0.2m、深さ0.05mほどの小ピットがあり、このピットの南西位置には礫が1個底面に密着しておかれてあつた。

断面形は開口部から直線的に窄まって頸部にいたり、頸部から底部に内湾ぎみに掘り込まれていて、全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面から約0.3mの位置にあつて、全体の深さは0.6～0.5mであつた。埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物は縄文土器片が数片出土しただけである。いずれも単節斜縄文を地文とする小破片である。

#### (27) D B 14-1ピット (第38図)

D B 14グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.26mの高低差があつて傾斜している。

平面は開口部径1.35~1.25m、頸部径1.15~1.05m、底部径1.2~1.1mのほぼ円形を呈している。底面は平坦でわずかにしまっている。

断面は開口部から頸部にかけて少し外湾ぎみに窄まり、頸部から底部に外湾ぎみに掘り込まれている。全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面より0.35~0.2mの位置にあって、全体の深さは0.6~0.5mである。埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物は、ピット底面から0.16mほど上の埋土から完形の鉢形縄文式土器が1個、口を北東に向け横位置で出土した。この他に出土遺物はない。

鉢形土器（第44図1、第50図2）底径7.1~6.8cmの底部から胴部最大径までの下半部は外湾して、上半部は内湾して立ちあがる。胴部最大径位置から口縁部直下まで窄まり、口縁部は外湾して開く、口径は20.6~19.8cmで最大径を示す。器高は26.6cmである。

外面には一面にR Lの単節斜縄文が施文されているが、ほんの一部分にL Rの単節斜縄文が見られる。内面には縦のみがきの後に口縁部にのみ横のみがきがみられる。

胴部最大径位置の外側器面には火熱を受けた痕跡があり、内面には下半部スス状の付着物が見られる。

#### (28) D C 13-1ピット（第39図）

D C 13グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.16mの高低差があって傾斜している。

平面は開口部が径1.5m、底部が径1.35~1.4mの隅丸方形を呈している。底面はほぼ平坦で、あまりしまりが無い。

断面は開口部から底部にかけてほぼ直立するが、わずかに外湾ぎみに掘られていて、全体としてはピーカー状を呈する。全体の深さは0.85~0.75mである。

埋土は5層に区分でき、自然堆積と思われるが、本ピットの埋土には次のような状況が見られた。第1点は、埋土最下層上面に炭化物が検出されたことである。炭化物は細い枝のようにも見えたが詳細な観察ができるような状態ではなかった。この炭化物の放射性炭素の測定をおこなったところ880±85yB.PのC-14年代が得られた。第2点は、埋土の上から2番目の黒褐色土層には十和田a降下火山灰がブロック状に多く混入していたことである。

出土遺物は縄文土器片が数片出土しただけである。第53図2はR Lの単節斜縄文の地文に粘土紐を貼り付けてその両側を磨消している。

#### (29) D C 16-2ピット（第40図）

D C 16グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.15mの高低差があって傾斜している。本ピットの東側3分の1はD C 16-1住居跡と重複し、住居に切られている。

平面は開口部径1.45m、頸部径1.05m、底部径1.2mのほぼ円形を呈している。底面はほぼ平坦で、堅くしまっている。

断面は開口部から頸部にかけて、ゆるく外湾ぎみに窄まり、頸部から底部にこれもゆるく、内湾ぎみに掘り込まれていて、全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面より0.5~0.4mの位置にあって、全体の深さは1.2~1.1mである。埋土は5層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物はない。

### (30) DD10-1ピット (第41図)

DD10グリッド、第Ⅲ層上面で検出した。検出面は北から南方向に約0.19mの高低差があって傾斜している。

平面は開口部径が約1.6m、頸部径が約1.5~1.3m、底部径が約1.7mでほぼ円形を呈している。底面は平坦で、あまりしまりが無い。

断面は開口部から頸部に少し窄まり、頸部から底部に内湾ぎみに掘り込まれていて、全体としてフラスコ状を呈している。頸部は底面から約0.8~0.4m位置にあって、全体の深さは1.1~1.0mほどである。

埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物は埋土から縄文土器片が数片出土したが、いずれも単節斜縄文を地文とする小片であった。

## 2. 遺構外の遺物

遺構以外出土の遺物、つまり、第Ⅰ層と第Ⅱ層から出土した遺物は、発掘を機械力によって実施したこともあるが、もともと量は多くなかった。

土器については次のものが見られた。

第Ⅰ群、第Ⅱ層から出土した尖底土器(第44図2、第50図1)で、上部を欠損している。現存する器高は復元によって23cmほどである。外面には結束の羽状縄文が横方向に施文されている。原体はRLとLRの単節であるが、施文の場合、上・下に段を変えるときに、原体の上・下位置を変えて施文している。胎土には繊維が含まれている。焼成は良好でない。縄文時前期初頭に位置づけられるであろう。

第Ⅱ群、第53図1は口縁部片で、口縁部は無文で、口縁部の下は単節斜縄文が施文され、無文と地文の境には単節縄文の側面圧痕文が見られる。第53図2は単節斜縄文の上に細い粘土紐が貼り付けられている。第53図3~7は単節斜縄文を地文にして、沈線文と磨消縄文が見られる一群である。これらはいずれも縄文時代中期に位置づけられ、特に後半のグループは末葉に

位置づけられる。

第Ⅲ群、第53図8のものは、単節斜縄文を地文として、間隔のせまい平行沈線が引かれ、地文を残す区間と磨消縄文の区間が交互にあり、上部には列点文が見られる。1点だけ小さな瘤が見られる。縄文時代後期に位置づけられる。

第Ⅳ群、第Ⅱ層から出土している。浅鉢形土器（第44図3、第50図3）で、復元によってほぼ完形となった。底径は11.4～10.6cm、口径17.5～16.5cmと全体に楕円形を呈する。底部から口縁部まで直線的に外傾して立ちあがる。器高は3.6cmである。口唇部には沈線が入り、4個のB突起が配されている。文様は磨消縄文によるC字文系の雲形文である。内・外面とも全体に磨きあげられていて、沈線の一部に丹塗りの痕跡を残している。この土器は縄文時代晩期に位置づけられる。

土器以外の遺物については次のとおりであった。

石槍（第46図1、第52図1）第Ⅱ層から出土している。石槍であるとすれば先端側を欠損していることになる。基部には茎が作り出されていないので、木葉形尖頭器に分類できよう。調整は両面調整が行われている。現存する長さは5cm、巾は2.8cm、厚さ1cmである。石質は珪質凝灰質泥岩（中新統上部・雫石西部産）である。

不定形石器（第46図2、第52図2）第Ⅰ層から出土した、片面に連続した大まかな剝離調整が加えられている。石質は硬質凝灰質泥岩（中新統上部・雫石西部産）である。

簪（第46図3、第52図3）第Ⅰ層から出土した。先端部が折れて欠損している。全体に加熱を受けた痕跡がある。材質は銅で、飾りは梅か桜の花が透かし彫りされている。全体に金メッキされ、花の蕊には何か粘り付けられていたと思われるが材質など詳細は不明である。

泥人形（第46図4、第52図4）第Ⅰ層から出土した。高さは2.1cmである。形込めによって作られている。七福神のうちの布袋である。

刀（第46図5、第52図5）第Ⅰ層から出土した。刀身は折られているために先端側が失損している。全体に錆が進行しているため柄に銘らしきものは見えないが、もともと銘はなかった可能性がある。現存する刀身の全長は28.5cmである。

### 3. まとめ

今回の調査地区内において検出、精査された遺構は、住居跡7、焼土遺構3、ピット20であった。（第7図）

住居跡のうち炉が複式炉であるもの1、石囲炉であるもの2、地床炉であるもの4であった。複式炉は簡略化されているし、石囲炉や地床炉においても床面の中央ではなく、傾斜面の低い壁側によった位置に作られる傾向が見られるなど、類似した形態を示している。



遺物においては、住居跡にともなう土器の量が少ない上に、粗製土器ばかりであるため、多少時期の巾を広くせざるを得ないが、土器の器形などから推定して、大木10式に相当か併行する時期と思われる。

ピットは、住居跡群が南側の沢にそって分布するが、その北側に分布している。一般に住居区域の外側に分布するピット群のあることは知られているが、この例に類似するとすれば、遺構群の北側は尾根の中央までを範囲として考えることが可能となる。

ピットにともなう遺物の量が少量であるため具体的に時期を定めることは困難であるが、DC13-1ピットを例外として、住居跡とほぼ同じ時期であろうと推定している。

住居跡の形状や出土遺物、ピットの形状などから、住居、ピットとも、ほぼ同時期と推定されるが、その時期は、土器の器形などから大木10式に相当か併行と思われる。住居の焼失部材の放射状炭素による年代測定結果、 $4100 \pm 85\text{yB.P}$  と  $3970 \pm 125\text{yB.P}$  とも大きな矛盾はない。

個別の問題として、DC16-1住居跡から出土した琥珀が赤外吸収スペクトルによる分析によって、原産地が久慈地方である可能性が指摘された。久慈と江刺家とは直線距離で約30km少々あるが、北上山地の山と沢の複雑な地形を越えて来なければならない。いずれにしても、この時期の交流を具体的に示す資料として貴重である。

DC13-1ピットについては、ピットの形状が他のピットと異なるとともに、埋土上層に十和田の降下火山灰のブロックを含むこと。埋土下層の炭化物の放射状炭素による年代測定によれば、 $880 \pm 85\text{yB.P}$  が得られるなどから、平安時代に位置づけることができよう。なお、調査地区内に同時期と思われる遺構も遺物も見られない。

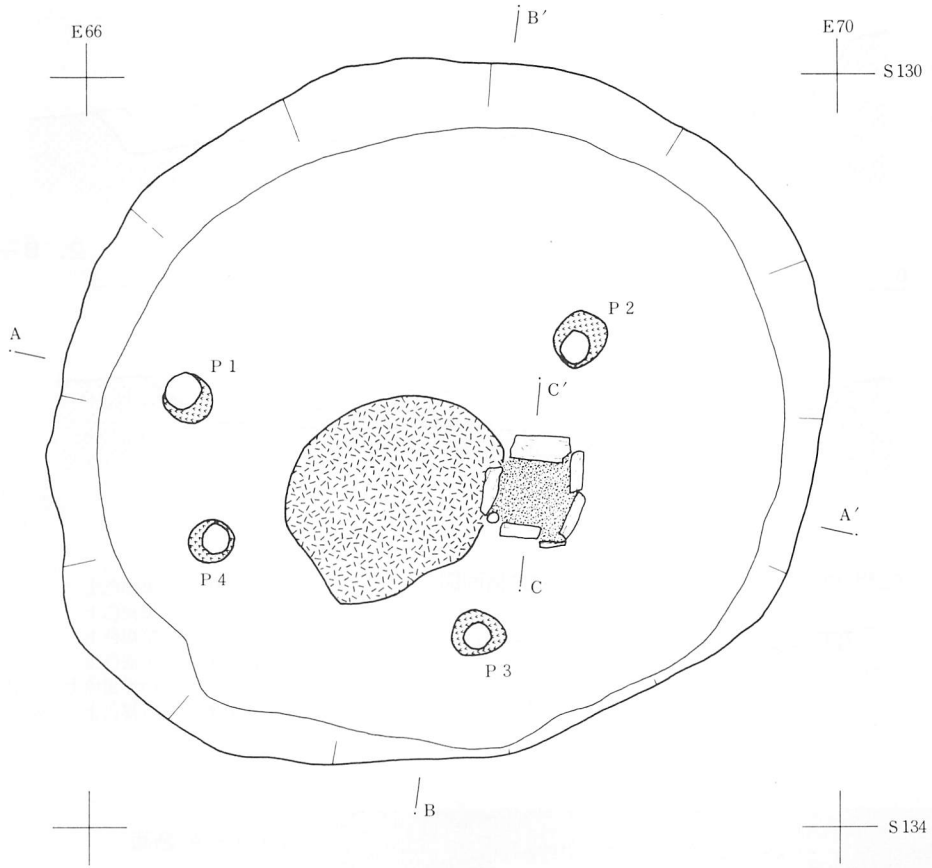
遺構以外の出土遺物のうち土器については、出土量は少量であったが、次の4群に区分できた。各々、第Ⅰ群は縄文時代前期に相当する。第Ⅱ群は中期に相当する。第Ⅲ群は後期に相当する。第Ⅳ群は晩期に相当するものであった。第Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ群の出土量はきわめて少量、主体は第Ⅱ群のうち末葉のものであった。

このように、土器群のなかには、今回調査された遺構と年代観の異なるものがあるが、これは周辺地域において関連遺構の存在することを意味するのであろうし、この地域での人間生活の歴史が連続していることをも意味するものである。

遺跡としての範囲は、調査地区の南側と東側に及ぶことは地形的に困難であると思われる。北側は遺構のないことを確認しているので、西側に続くことが最も自然のように思われる。これは地形的に可能であるばかりではなく、現地には遺物が分布している。

江刺家Ⅳ遺跡は沢水と湧水に恵まれた小さな尾根の南側斜面に営まれた集落であり、今回この集落の東側の一部を調査したことになる。

1. 平面図



2. 住居跡全景

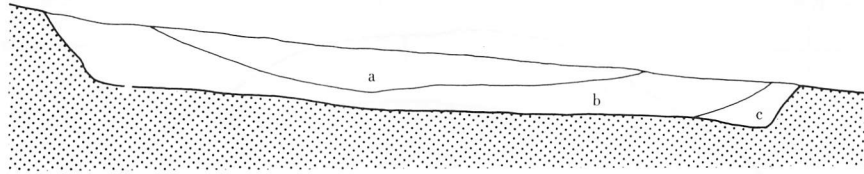


第8図 CG13-1住居跡

1. A-A'断面图

A 305.4m

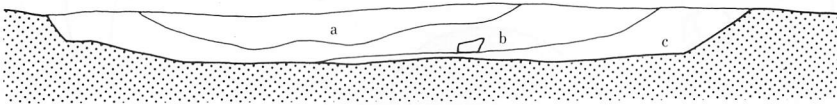
A'



2. B-B'断面图

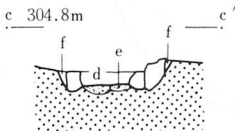
B

B'

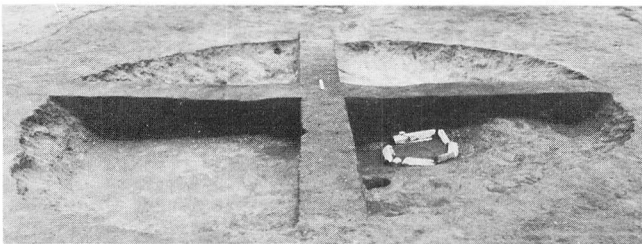


c 304.8m

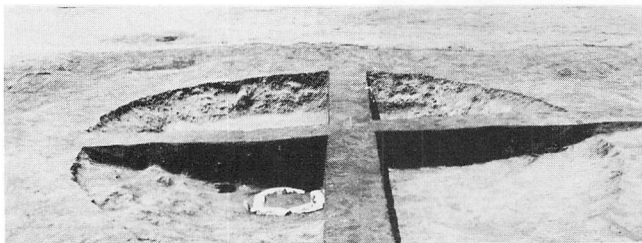
3. C-C'断面图



- a. 10Y R  $\frac{3}{4}$  黑褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黑褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{2}$  暗褐色土
- d. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黑褐色土
- e. 5 Y R  $\frac{3}{2}$  明赤褐色土
- f. 10Y R  $\frac{3}{2}$  暗褐色土

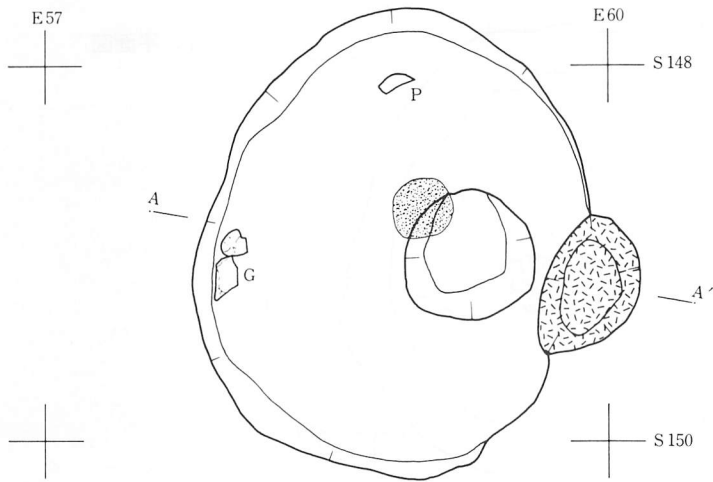


4. A-A'断面



5. B-B'断面

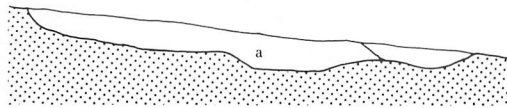
第9图 CG13-1住居跡



1. 平面图

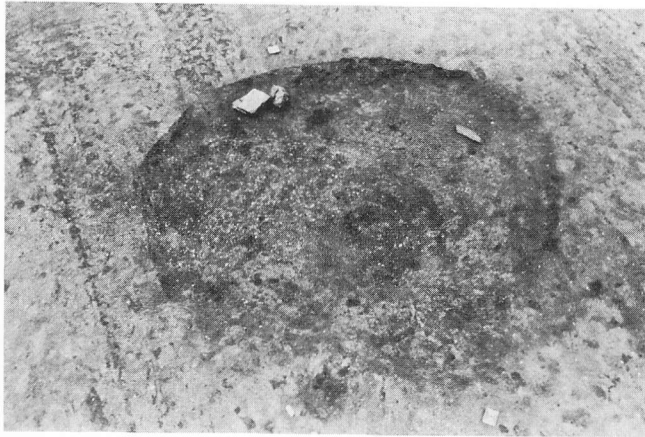
A 306.0m

A'

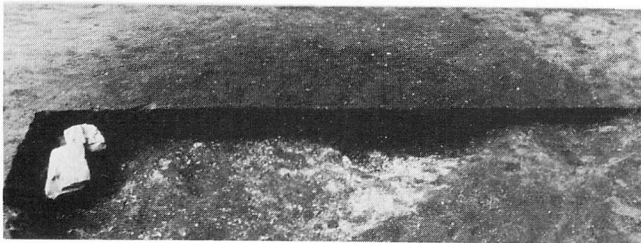


2. A—A' 断面图

a 10YR $\frac{3}{2}$  黑褐色土

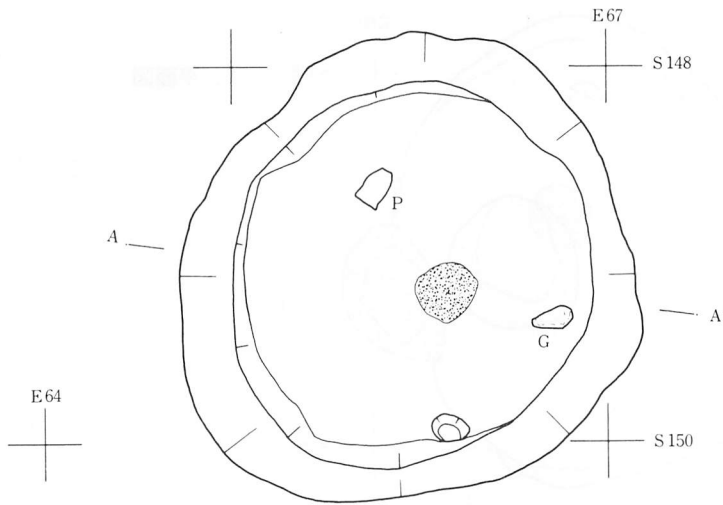


3. 住居跡全景

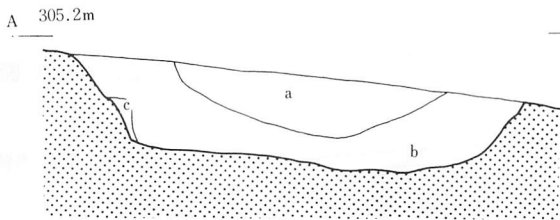


4. A—A' 断面

第10图 C J 11—1 住居跡



1. 平面図

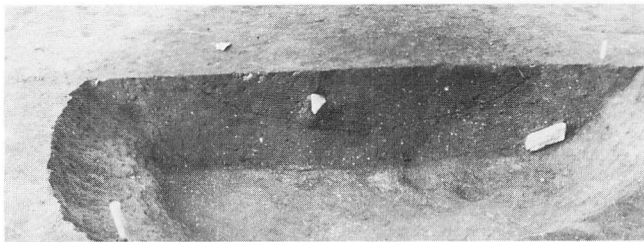


2. A-A'断面図



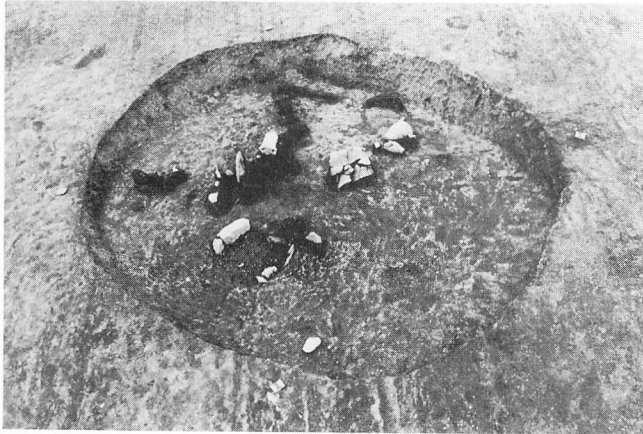
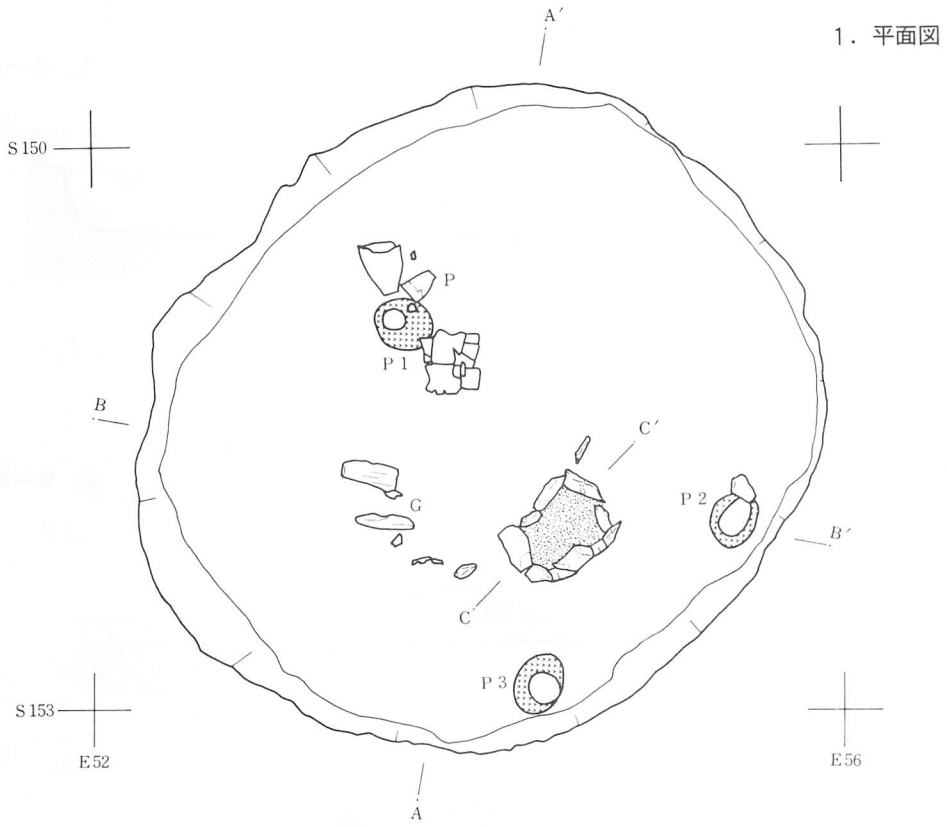
3. 住居跡全景

- a. 10Y R  $\frac{3}{1}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{2}$  暗褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{4}$  にぶい黄褐色土

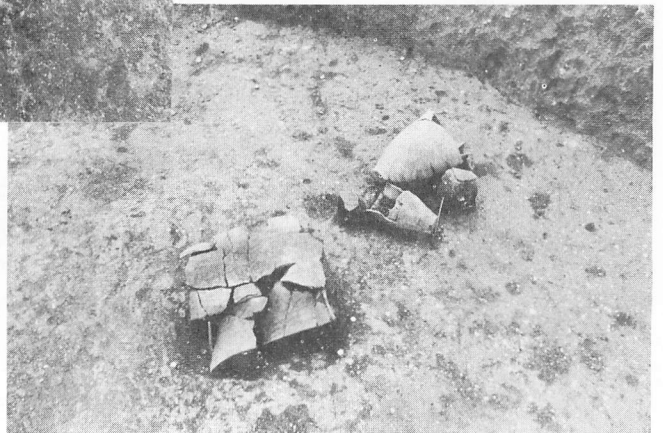


4. A-A'断面

第11図 C J 13-1 住居跡

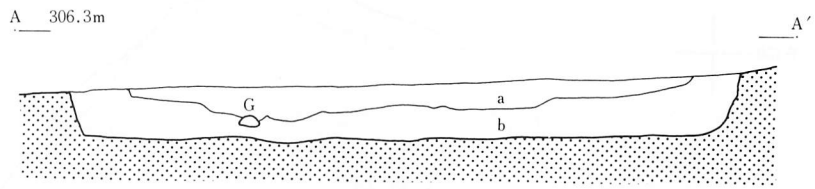


3. 土器出土状況

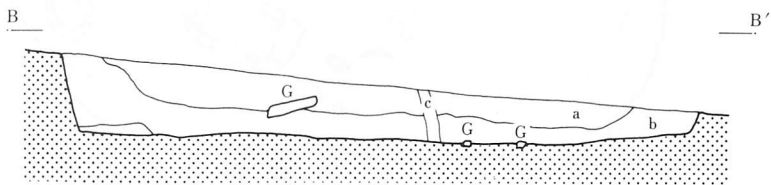


第12図 DA10-1 住居跡

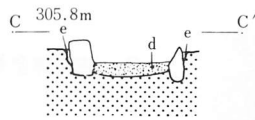
1. A—A' 断面图



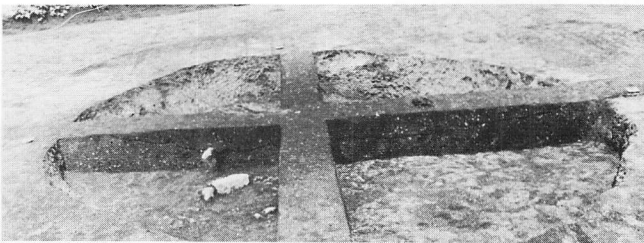
2. B—B' 断面图



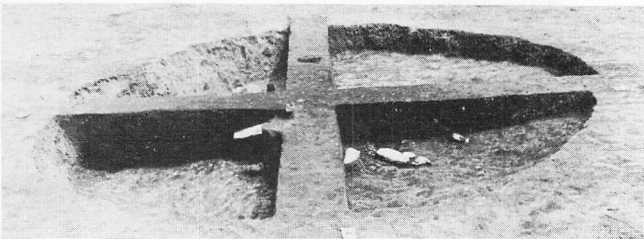
3. C—C' 断面图



- a. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黑褐色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黑褐色土
- c. (搅乱)
- d. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黑褐色土
- e. 10Y R  $\frac{2}{3}$  暗褐色土



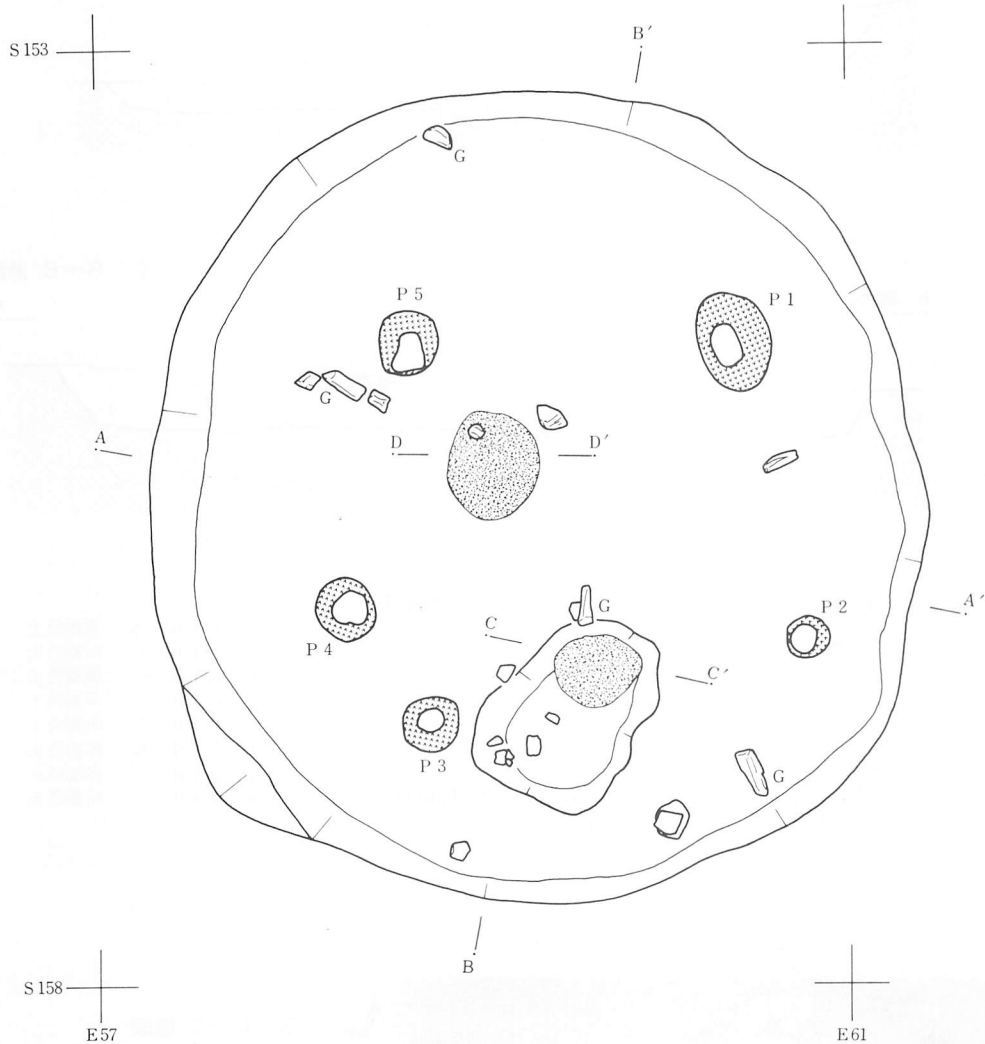
4. A—A' 断面



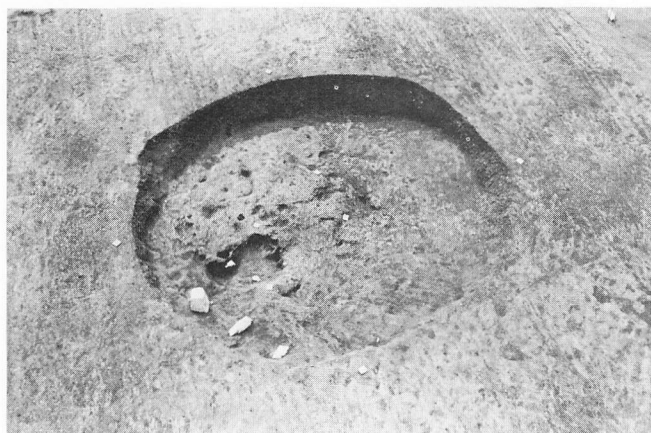
5. B—B' 断面

第13图 DA10-1 住居跡

1. 平面图



2. 住居跡全景

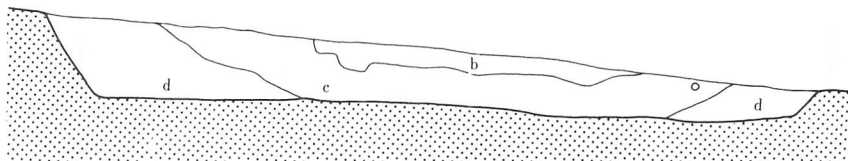


第14图 DA11-1住居跡



1. A—A'断面图

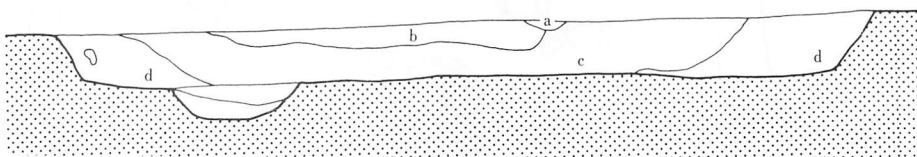
A 305.7m



A'

2. B—B'断面图

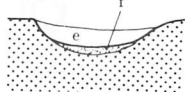
B 305.7m



B'

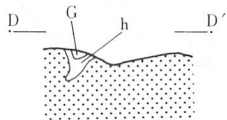
3. C—C'断面图

c 305.2m



C'

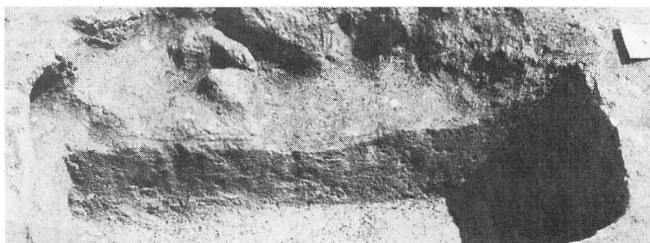
4. D—D'断面图



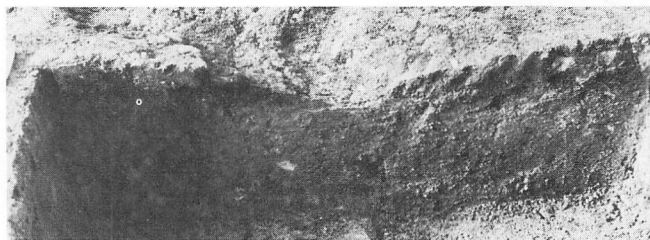
D

D'

- |    |       |               |      |
|----|-------|---------------|------|
| a. | 10Y R | $\frac{3}{5}$ | 黑褐色土 |
| b. | 10Y R | $\frac{3}{5}$ | 暗褐色土 |
| c. | 10Y R | $\frac{3}{5}$ | 黑褐色土 |
| d. | 10Y R | $\frac{3}{5}$ | 黑褐色土 |
| e. | 10Y R | $\frac{3}{5}$ | 暗褐色土 |
| f. | 5 Y R | $\frac{1}{6}$ | 赤褐色土 |
| g. | 5 Y R | $\frac{1}{6}$ | 赤褐色土 |
| h. | 10Y R | $\frac{3}{4}$ | 暗褐色土 |



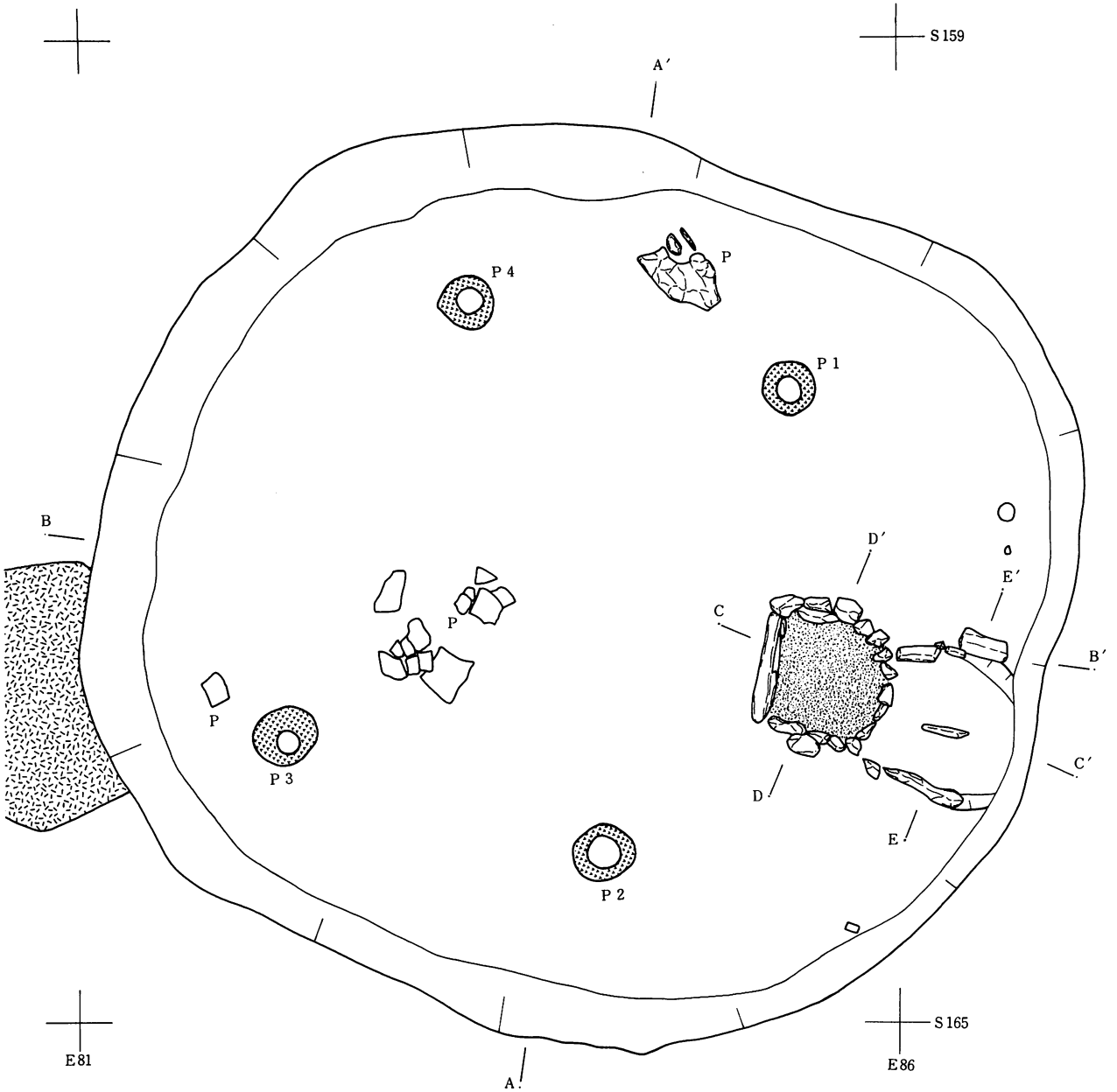
5. C—C'断面



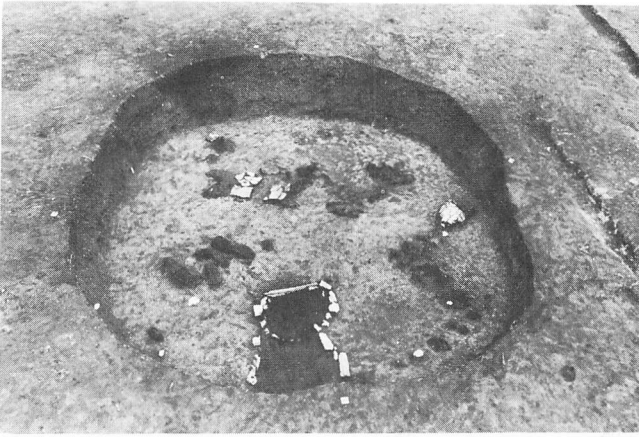
6. D—D'断面

第15图 D A11—1住居跡

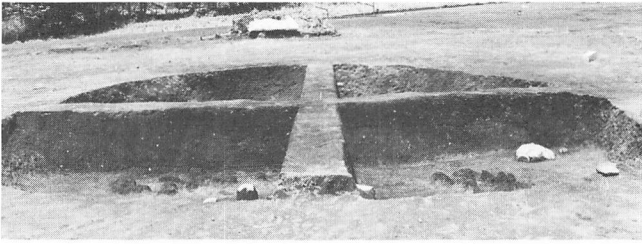
1. 平面图



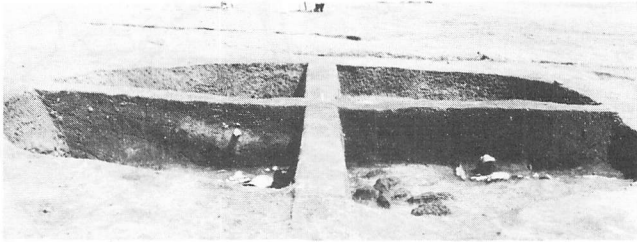
第16图 DC 16-1 住居跡



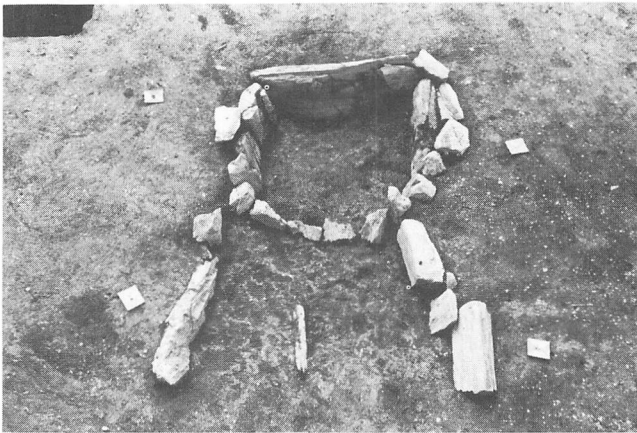
1. 住居跡全景



2. A-A'断面



3. B-B'断面



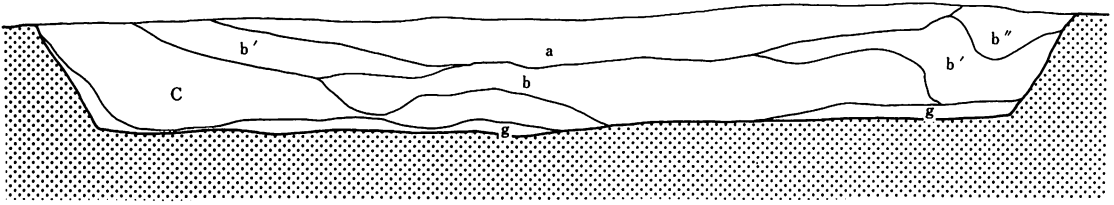
4. 複式炉

第17図 DC16-1住居跡

1. A-A' 断面图

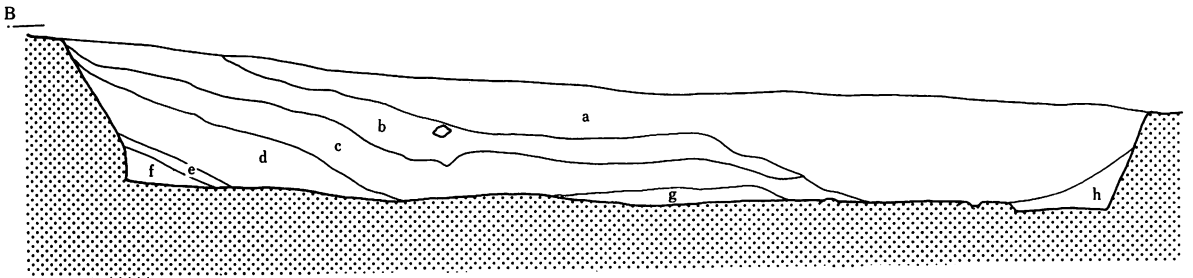
A 303.1m

A'

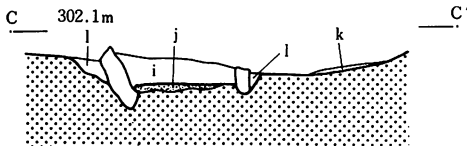


2. B-B' 断面图

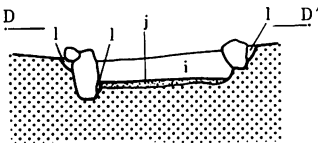
B'



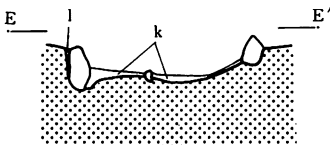
3. C-C' 断面图



4. D-D' 断面图



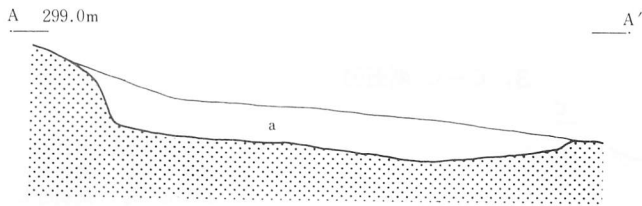
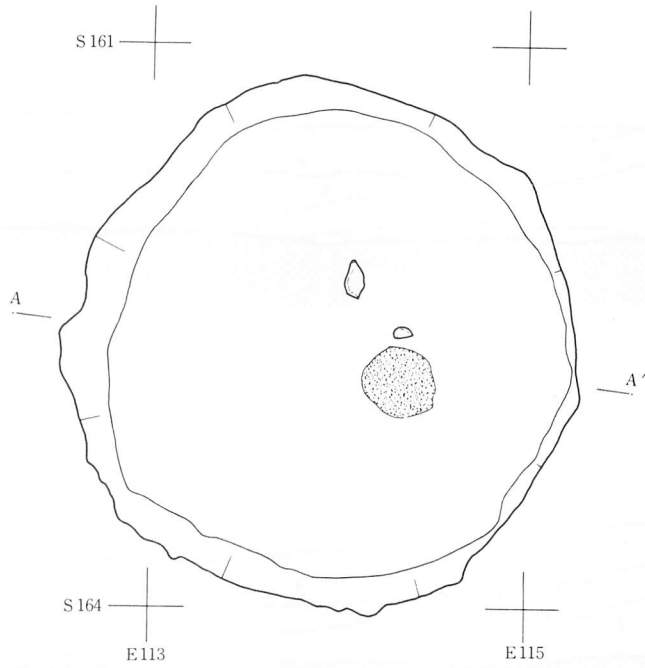
5. E-E' 断面图



- a. 7.5 YR 1.7/1 黑色土
- b. 10YR 3/4 褐色土
- b'. 10YR 3/2 黑褐色土
- b''. 10YR 3/2 黑褐色土
- c. 10YR 3/4 黑褐色土
- d. 10YR 3/2 暗褐色土
- e. 10YR 3/4 褐色土
- f. 10YR 3/4 暗褐色土
- g. 10YR 3/2 暗褐色土
- h. 10YR 3/2 黑褐色土
- i. 10YR 3/2 黑褐色土
- j. 5 YR 3/4 明赤褐色土
- k. 10YR 3/4 褐色土
- l. 10YR 3/2 黑褐色土

第18图 DC16-1 住居跡

1. 平面图



2. A-A'断面图

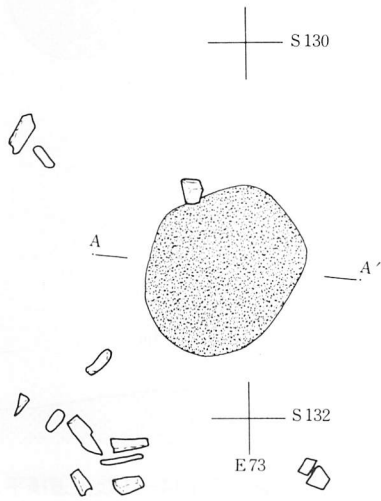
a. 10YR 3/3 暗褐色土



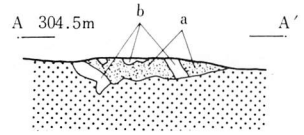
3. 住居跡全景

第19图 DC22-1 住居跡

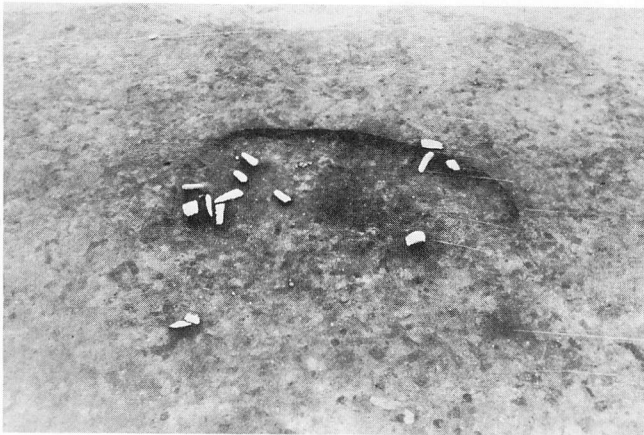
1. 平面図



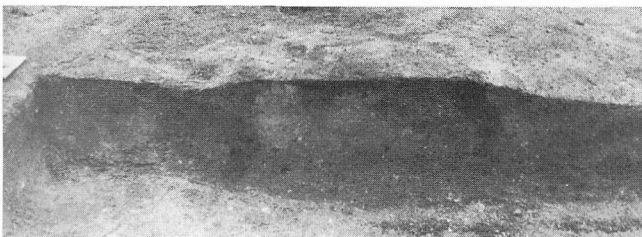
2. A-A'断面図



- a. 5 Y R  $\frac{5}{8}$  明赤褐色土(烧土)
- b. 10 Y R  $\frac{2}{4}$  黑色土



3. 遺構全景



4. A-A'断面

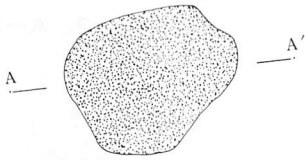
第20図 CG14-1 烧土遺構

S136  
E77

E79

S140  
E72

A A' E74

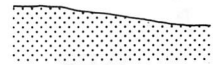


A 303.8m A'

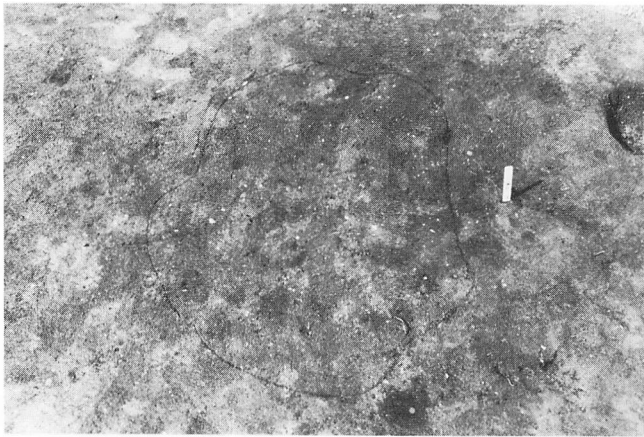


1. CH15-1 烧土遺構平、断面図

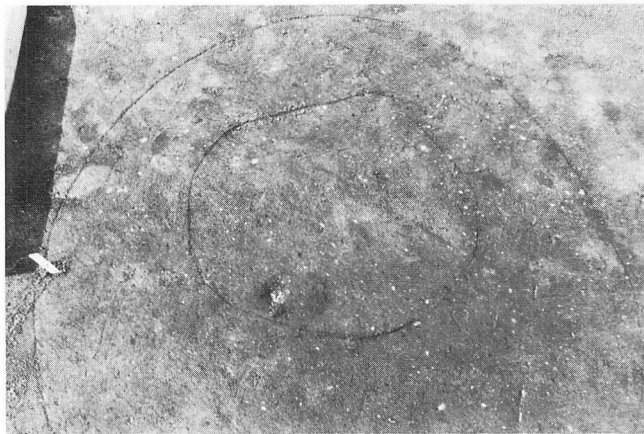
A 304.4m A'



2. C I 14-1 烧土遺構平、断面図



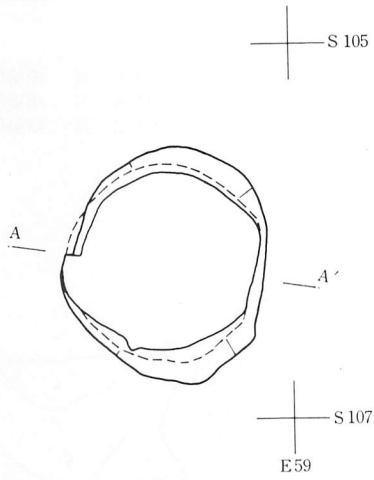
3. CH15-1 烧土遺構全景



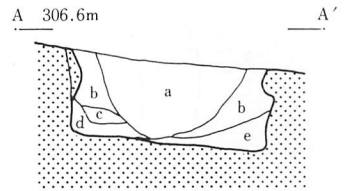
4. C I 14-1 烧土遺構全景

第21図 CH15-1 烧土遺構  
C I 14-1 烧土遺構

1. 平面図



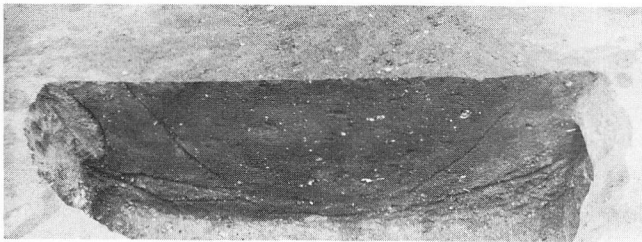
2. A-A'断面図



- a. 10YR 3/4 黒色土
- b. 10YR 3/4 黒褐色土
- c. 10YR 3/4 褐色土
- d. 10YR 3/2 黒褐色土
- e. 10YR 3/4 褐色土



3. ピット全景

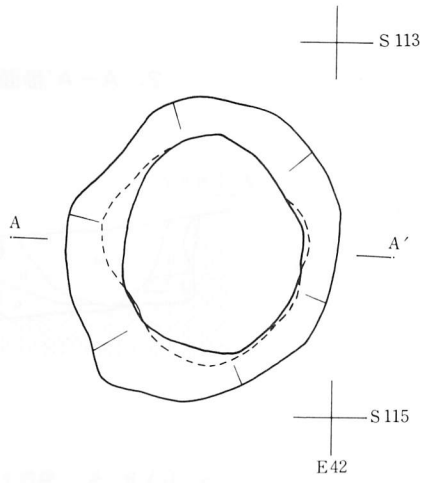


4. A-A'断面

第22図 CB11-1ピット

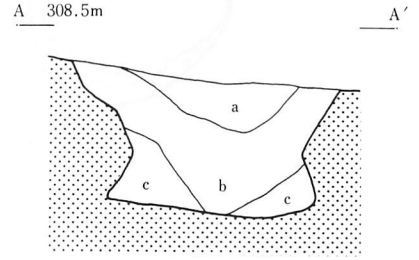


1. 平面図

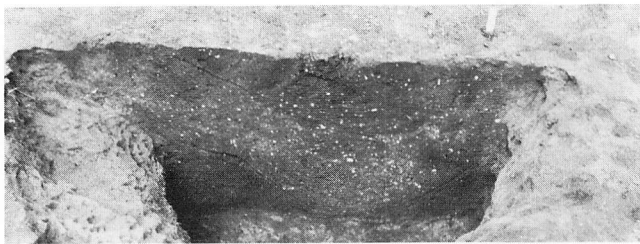


2. A-A'断面図

- a. 75Y R  $\frac{3}{1}$  黒褐色土
- b. 75Y R  $\frac{5}{3}$  暗褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土

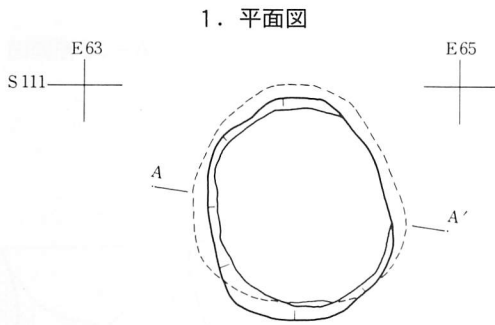


3. ピット全景

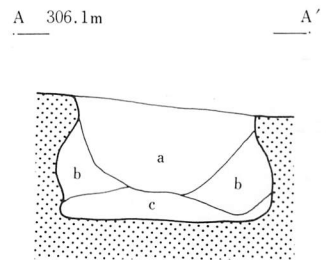


4. A-A'断面図

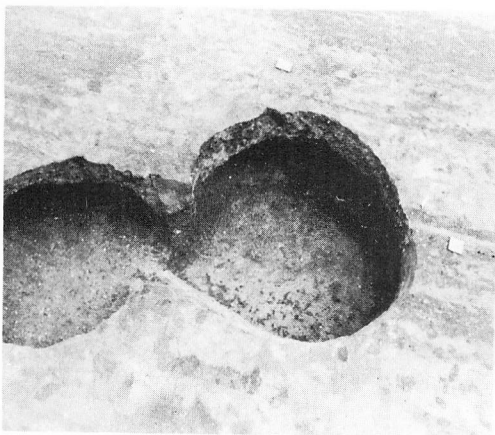
第23図 C C08-1 ピット



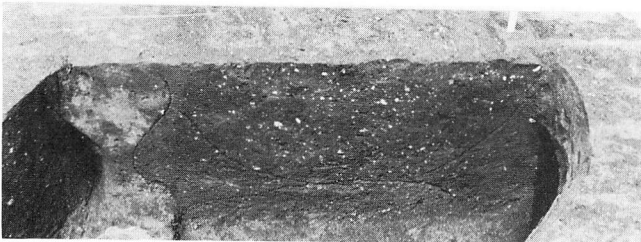
2. A-A'断面図



- a. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{2}$  暗褐色土
- c. 10Y R  $\frac{4}{2}$  にぶい黄褐色土



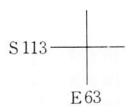
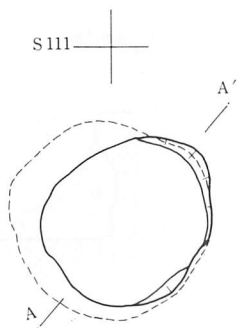
3. ピット全景



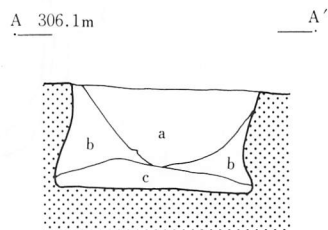
4. A-A'断面

第24図 CC12-1ピット

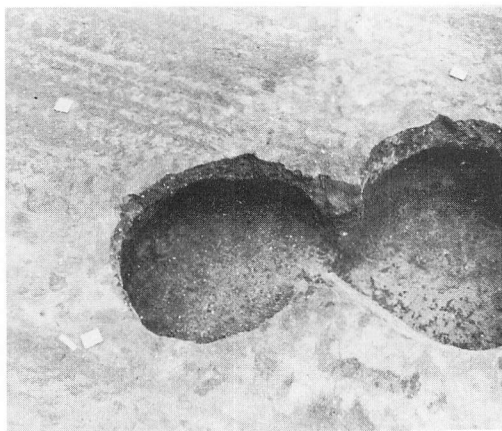
1. 平面図



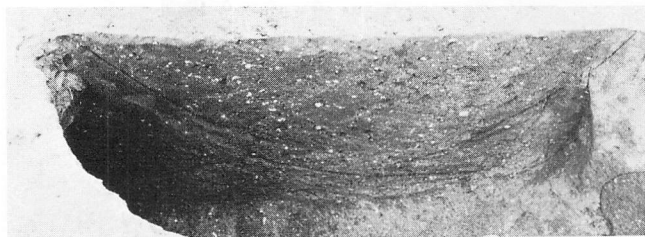
2. A-A'断面図



- a. 10YR  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- b. 10YR  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- c. 10YR  $\frac{1}{6}$  褐色土



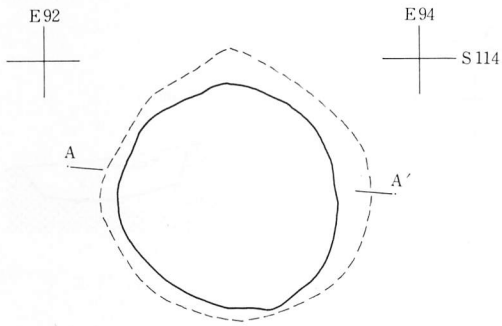
3. ピット全景



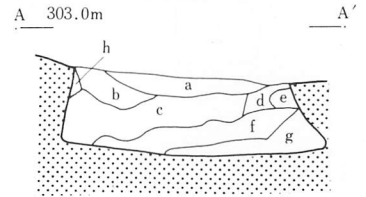
4. A-A'断面

第25図 CC12-2ピット

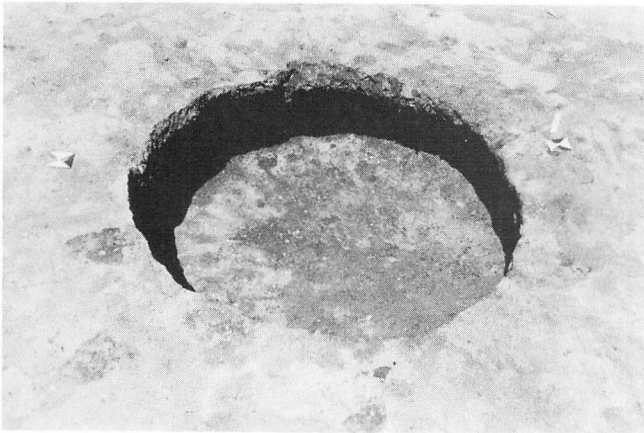
1. 平面図



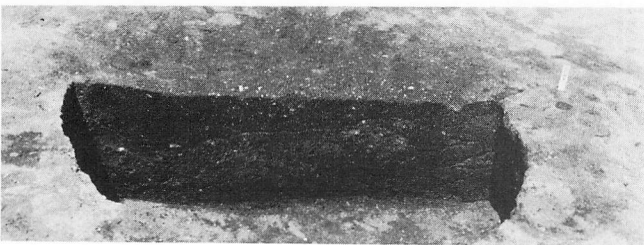
2. A-A'断面図



- a. 10Y R 3/2 黒褐色土
- b. 10Y R 3/2 黒褐色土
- c. 10Y R 3/4 褐色土
- d. 10Y R 3/4 暗褐色土
- e. 10Y R 3/4 褐色土
- f. 10Y R 3/2 黒褐色土
- g. 10Y R 3/6 褐色土
- h. 10Y R 3/8 黄褐色土



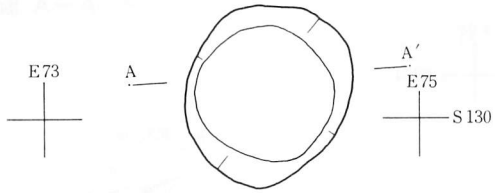
3. ピット全景



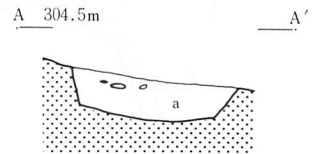
4. A-A'断面

第26図 CC18-1ピット

1. 平面図



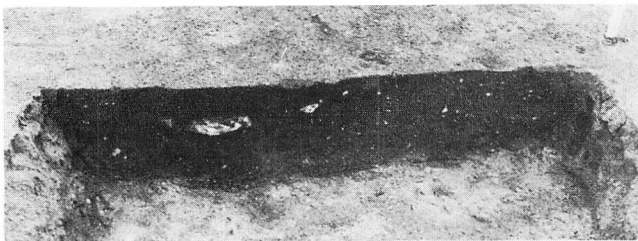
2. A-A'断面図



a. 10YR 3/2 黒褐色土



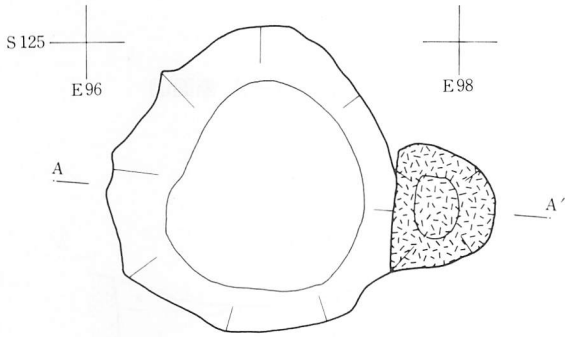
3. ピット全景



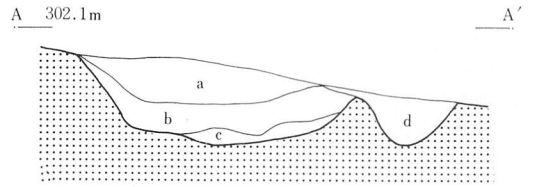
4. A-A'断面

第27図 CF14-1ピット

1. 平面図



2. A-A'断面図

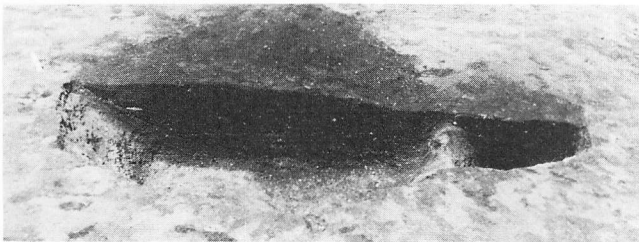


- a. 10 Y R 1.7/1 黒色土
- b. 10 Y R 2/1 黒色土
- c. 10 Y R 3/2 黒褐色土
- d. 10 Y R 4/1 黒色土



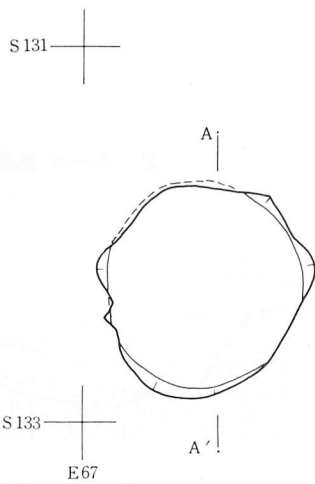
3. ピット全景

4. A-A'断面

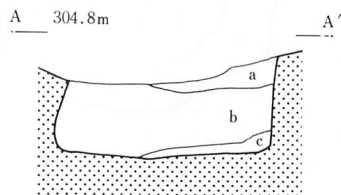


第28図 C F19-1 ピット

1. 平面図



2. A-A' 断面図



- a. 75 Y R  $\frac{3}{4}$  褐色土
- b. 75 Y R  $\frac{3}{2}$  と 75 Y R  $\frac{3}{4}$  黒褐色土とにふい橙色土
- c. 75 Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土



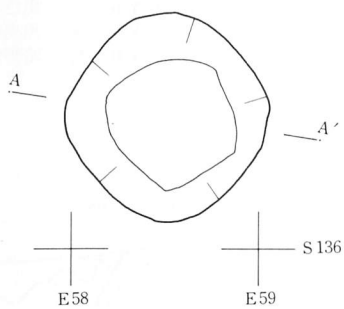
3. ピット全景



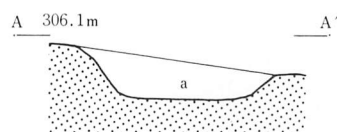
4. A-A' 断面

第29図 CG13-2ピット

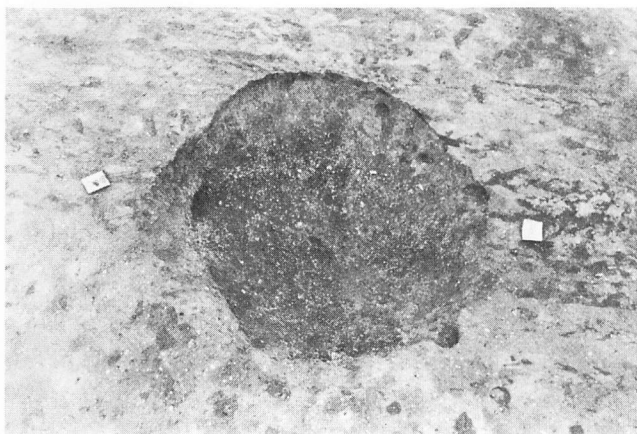
1. 平面図



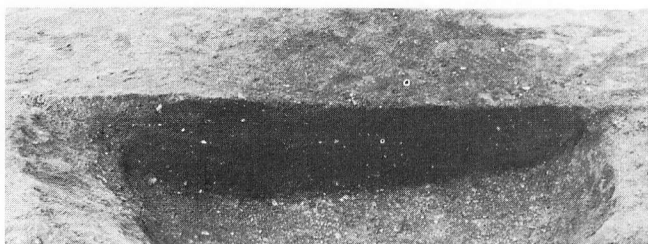
2. A-A'断面図



a. 10YR 2/1 黒色土



3. ピット全景

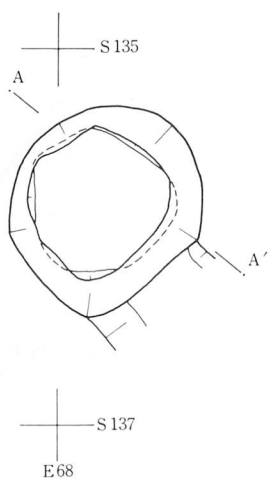


4. A-A'断面

第30図 CH11-1ピット

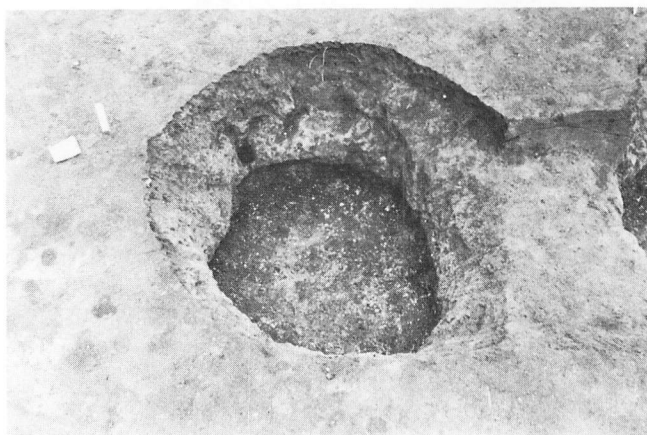
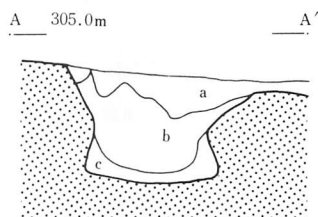


1. 平面図

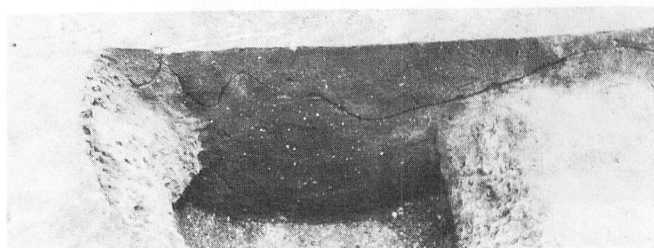


2. A-A'断面図

- a. 10Y R  $\frac{2}{1}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{2}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土



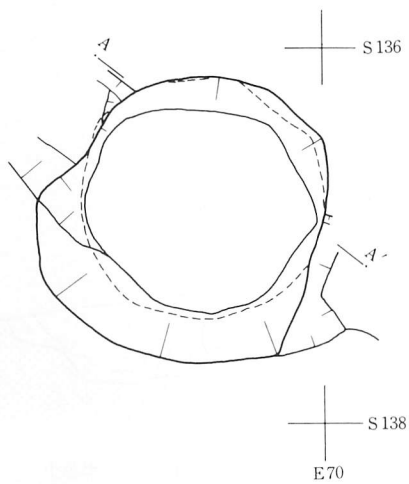
3. ピット全景



4. A-A'断面

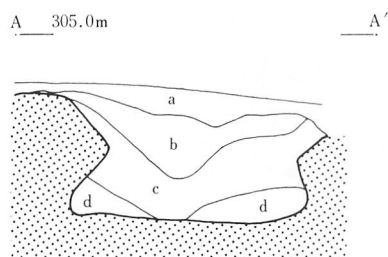
第31図 CH13-1ピット

1. 平面図

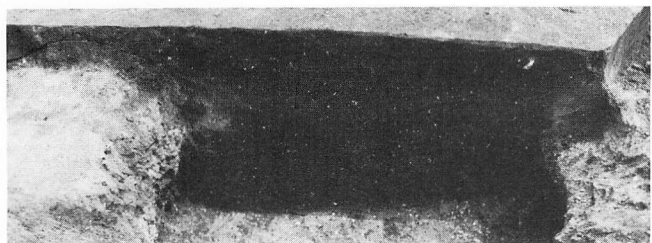


2. A-A'断面図

- a. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{2}{3}$  暗褐色土
- d. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土



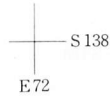
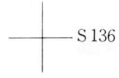
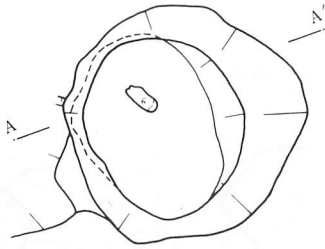
3. ピット全景



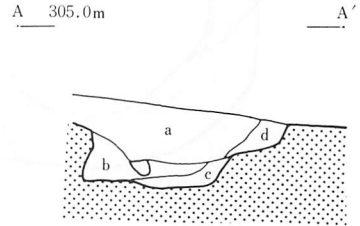
4. A-A'断面

第32図 CH13-2ピット

1. 平面図



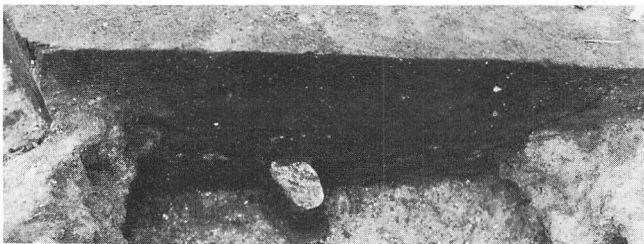
2. A-A'断面図



- a. 10Y R  $\frac{2}{4}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- d. 10Y R  $\frac{1}{2}$  灰黄褐色土



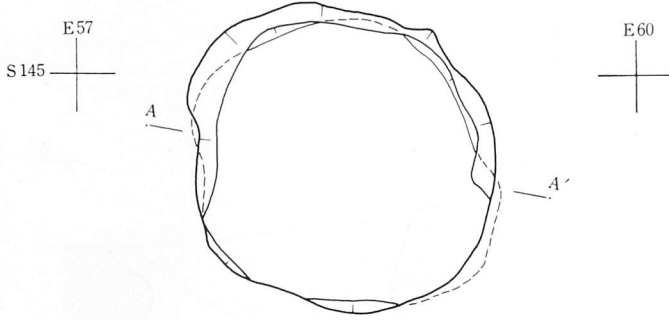
3. ピット全景



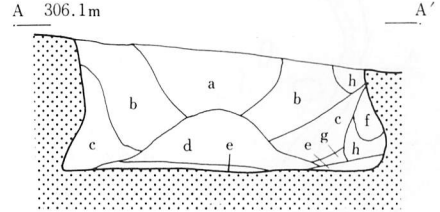
4. A-A'断面

第33図 CH14-1ピット

1. 平面図

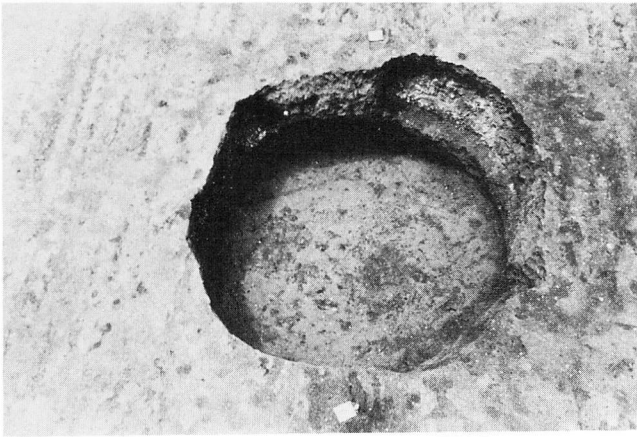


2. A-A'断面図

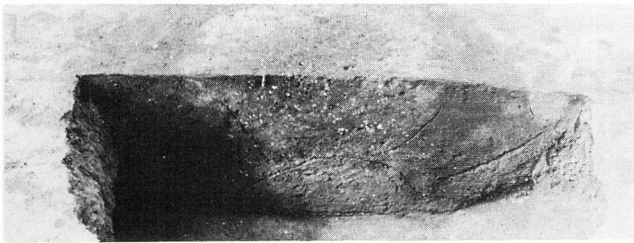


- a. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{1}{4}$  褐色土
- d. 10Y R  $\frac{1}{6}$  褐色土
- e. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- f. 7.5Y R  $\frac{5}{8}$  明褐色土
- g. 7.5Y R  $\frac{5}{6}$  明褐色土
- h. 10Y R  $\frac{1}{6}$  褐色土

3. ピット全景

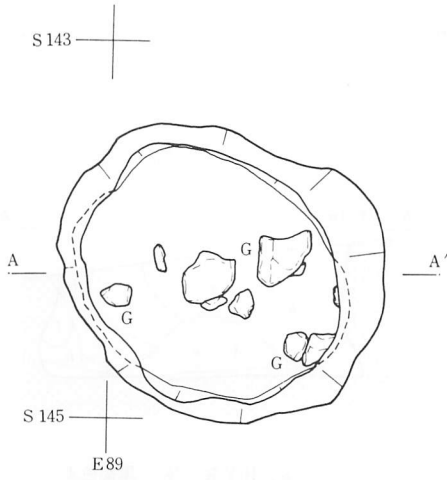


4. A-A'断面

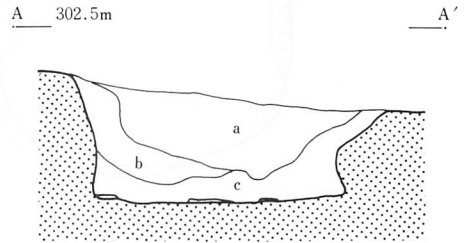


第34図 C I 11-1ピット

1. 平面図



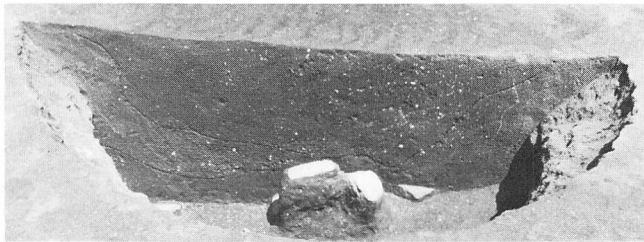
2. A-A'断面図



- a. 10Y R  $\frac{2}{3}$  黒褐色土
- b. 75Y R  $\frac{2}{3}$  黒褐色土
- c. 75Y R  $\frac{1}{1}$  黒色土



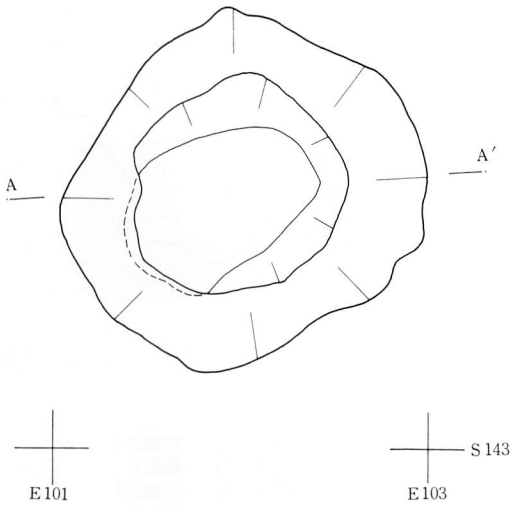
3. ピット全景



4. A-A'断面

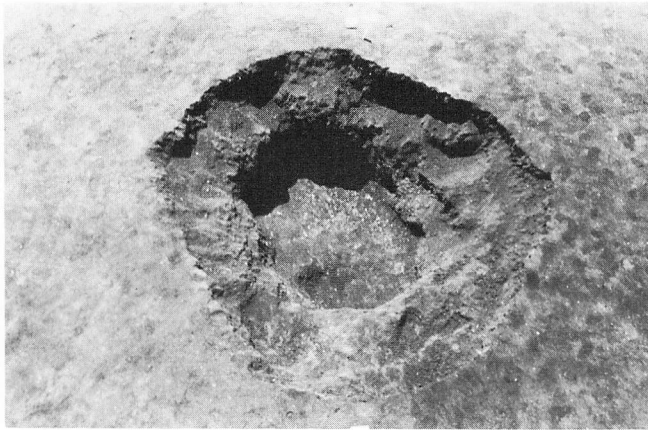
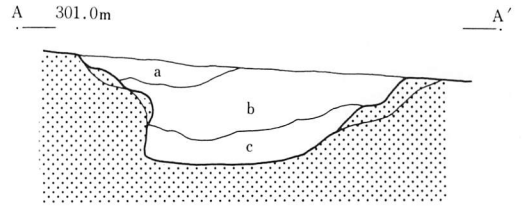
第35図 C117-1ピット

1. 平面図

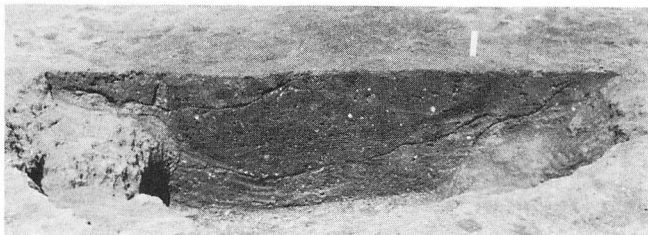


2. A-A'断面図

- a. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{2}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土



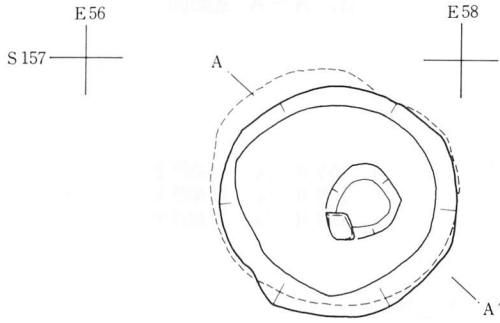
3. ピット全景



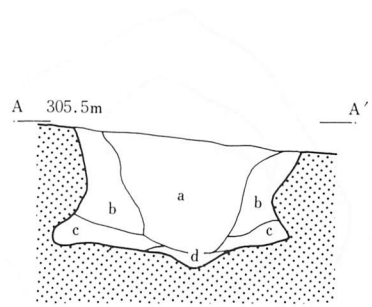
4. A-A'断面

第36図 C I 20-1 ピット

1. 平面図



2. A-A'断面図

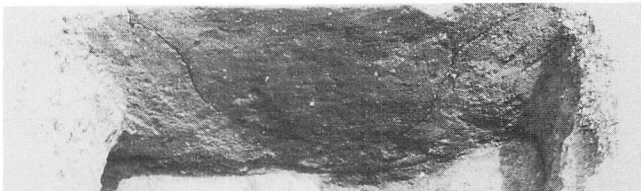


- a. 10Y R  $\frac{3}{4}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{1}{4}$  褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- d. 10Y R  $\frac{1}{2}$  黒褐色土

3. ピット全景

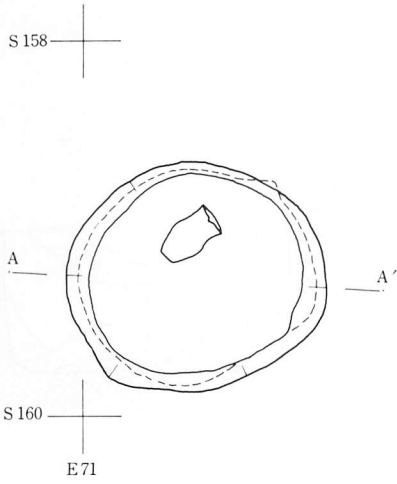


4. A-A'断面

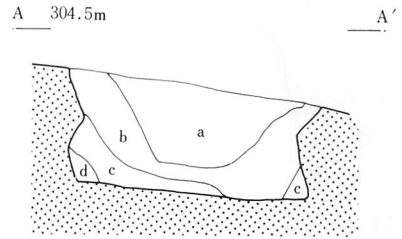


第37図 DB11-1ピット

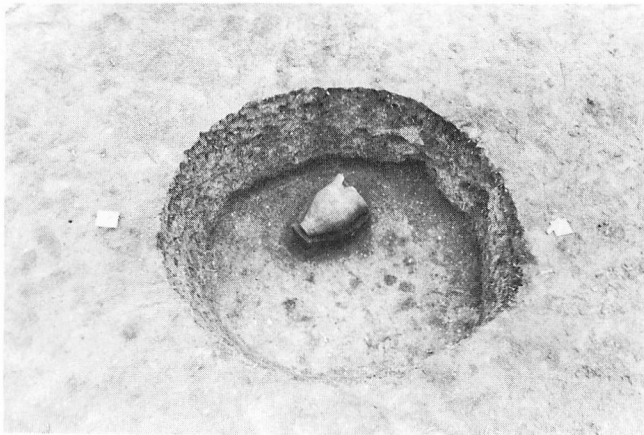
1. 平面図



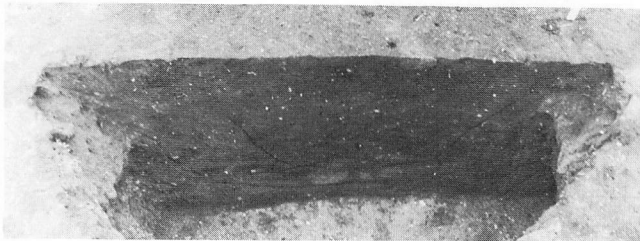
2. A-A'断面図



- a. 75 Y R  $\frac{2}{4}$  黒色土
- b. 10 Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- c. 10 Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- d. 75 Y R  $\frac{6}{6}$  橙色土



3. ピット全景



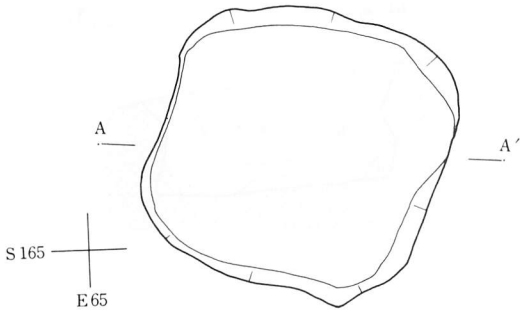
4. A-A'断面

第38図 DB14-1ピット

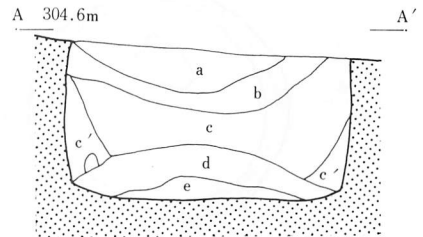


1. 平面図

S163

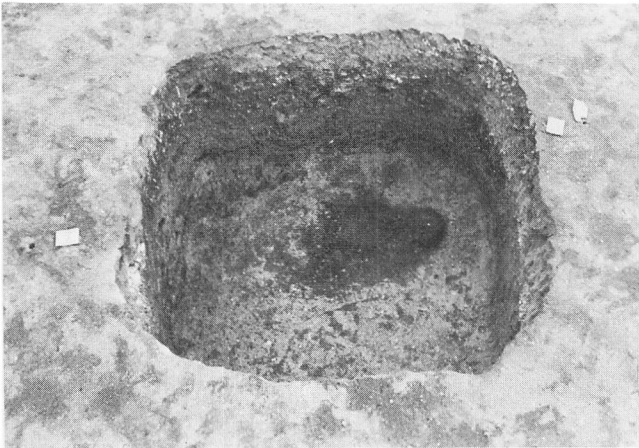


2. A-A'断面図

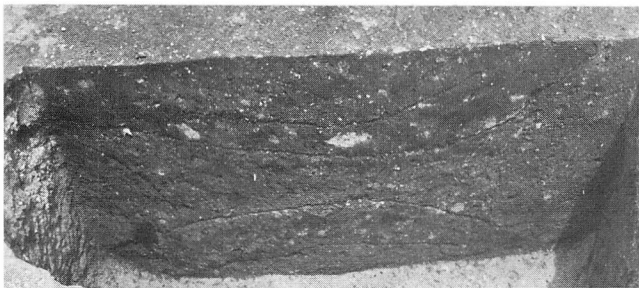


- a. 10Y R  $\frac{2}{4}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{4}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- c'. 10Y R  $\frac{2}{3}$  にぶい黄褐色土
- d. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- e. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土

3. ピット全景

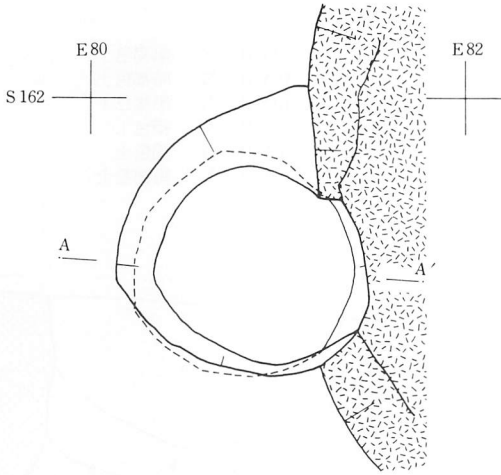


4. A-A'断面



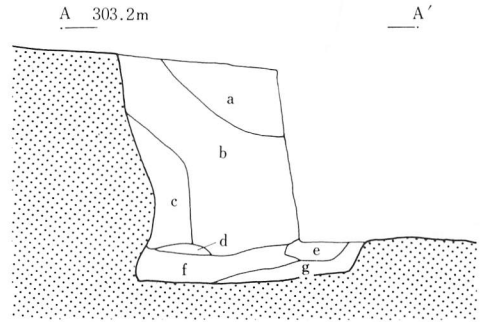
第39図 DC13-1ピット

1. 平面図

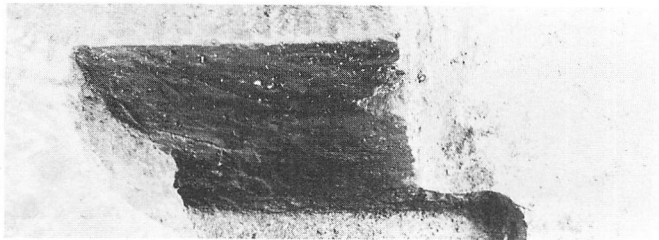


2. A-A'断面図

- a. 10Y R  $\frac{2}{8}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{8}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{4}{8}$  褐色土
- d. 10Y R  $\frac{3}{8}$  暗褐色土
- e. 10Y R  $\frac{4}{8}$  褐色土
- f. 10Y R  $\frac{4}{8}$  褐色土
- g. 10Y R  $\frac{3}{8}$  暗褐色土

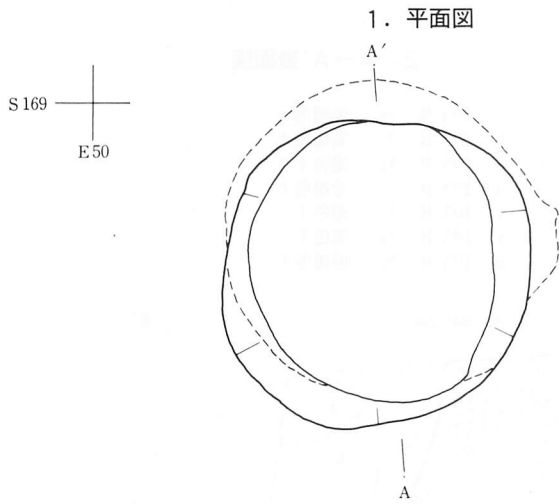


3. ピット全景



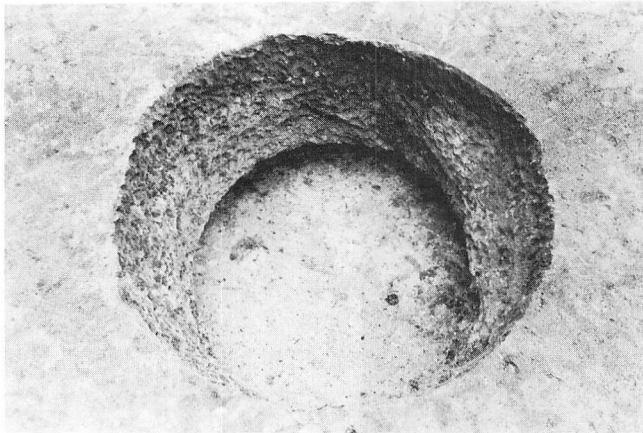
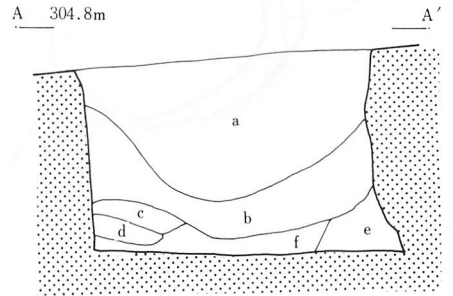
4. A-A'断面

第40図 DC16-2ピット

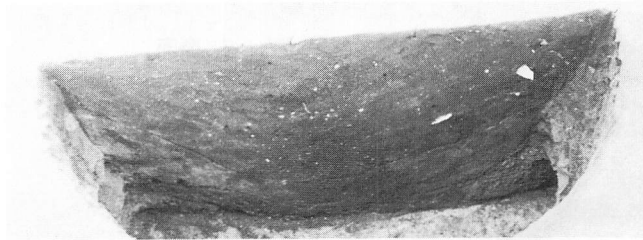


2. A-A'断面図

- a. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{1}$  黒褐色土
- d. 10Y R  $\frac{4}{4}$  褐色土
- e. 10Y R  $\frac{5}{6}$  褐色土
- f. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土

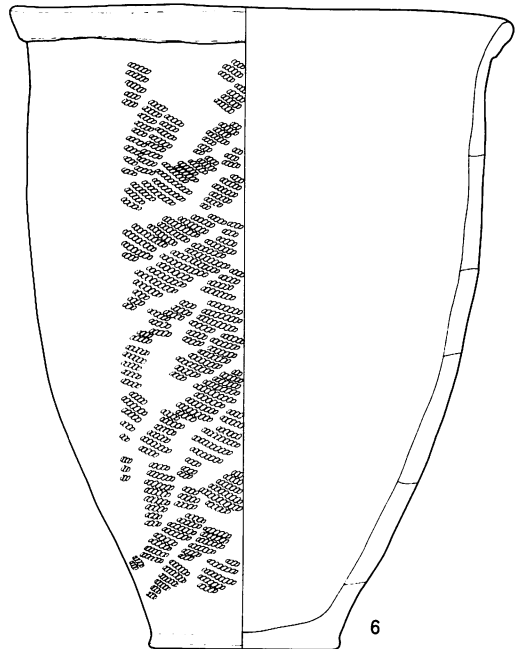
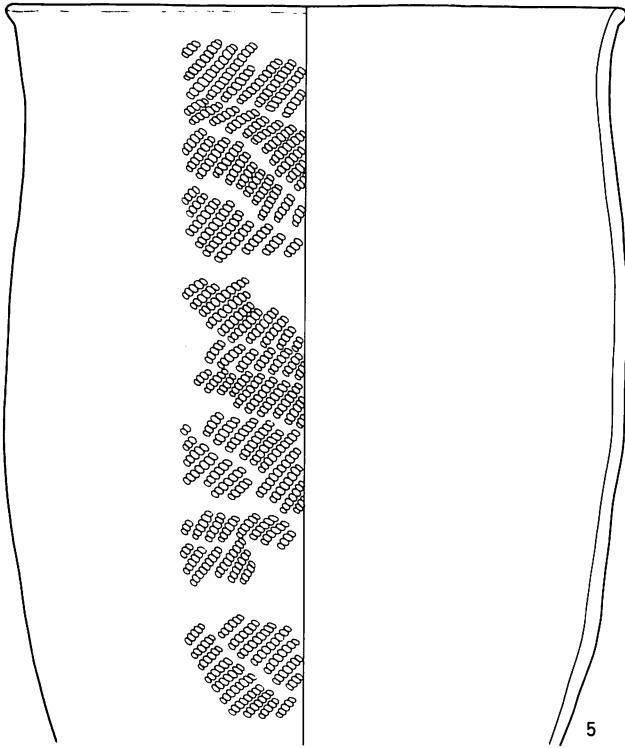
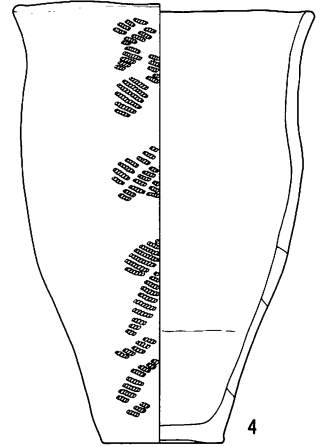
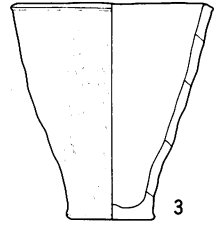
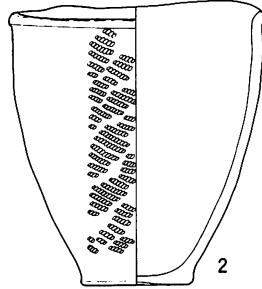
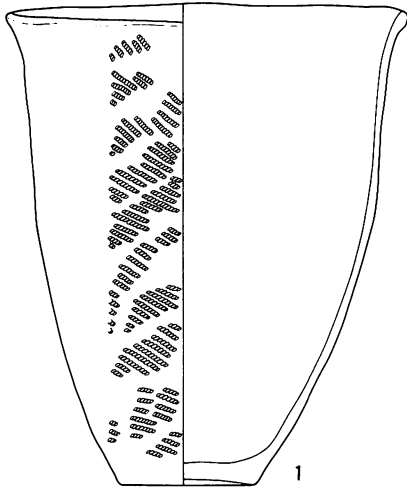


3. ピット全景

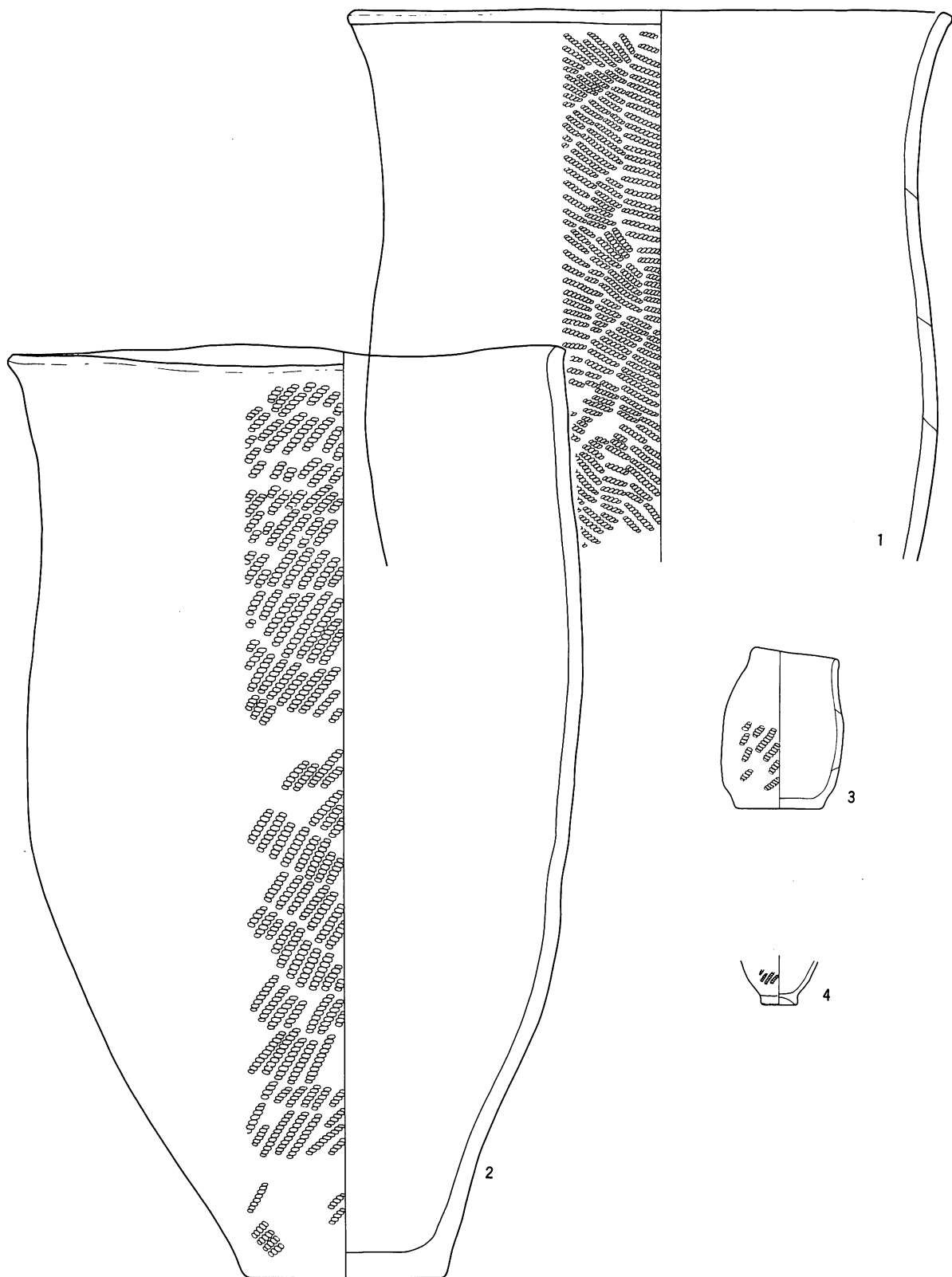


4. A-A'断面

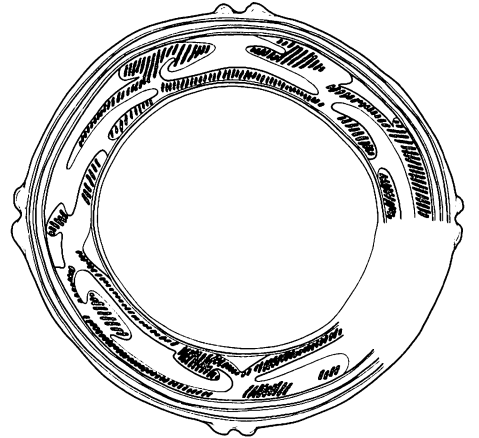
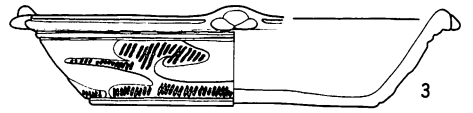
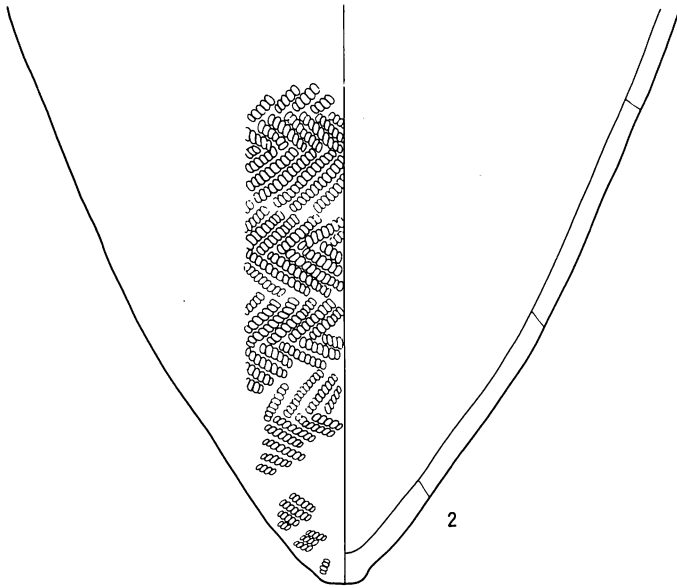
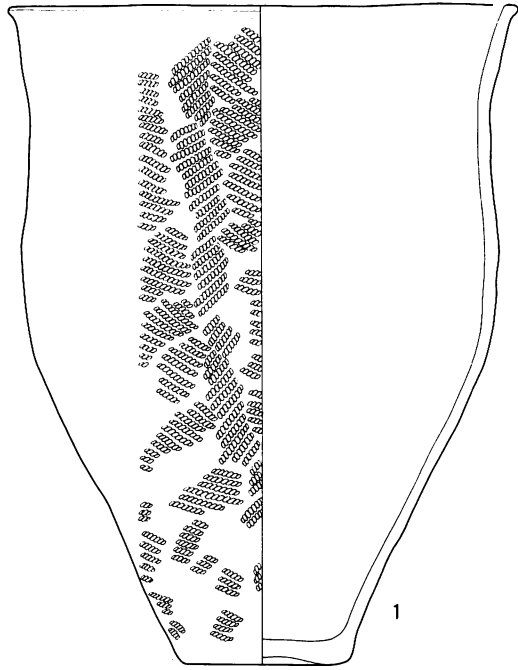
第41図 DD10-1ピット



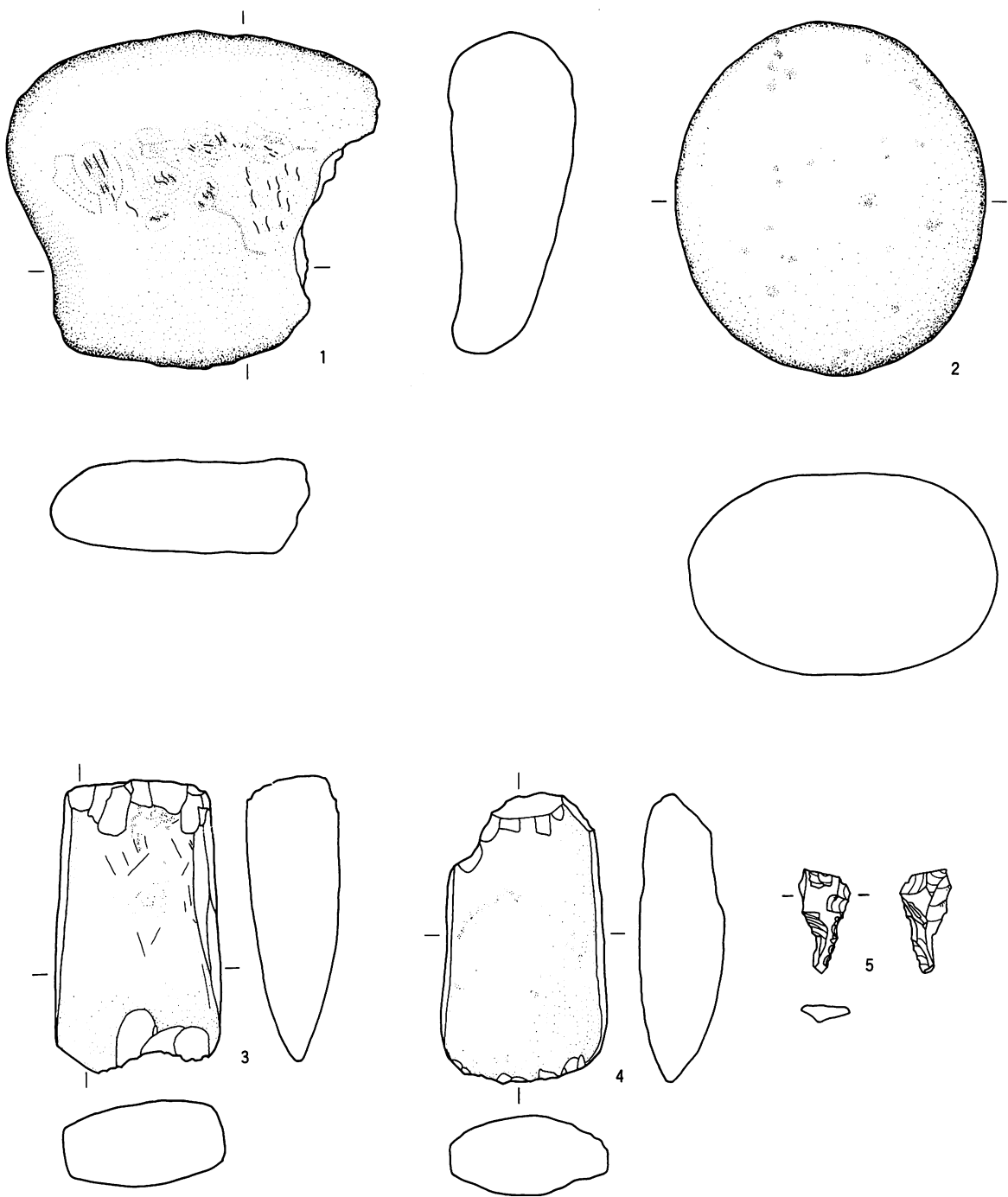
第42図 土器実測図



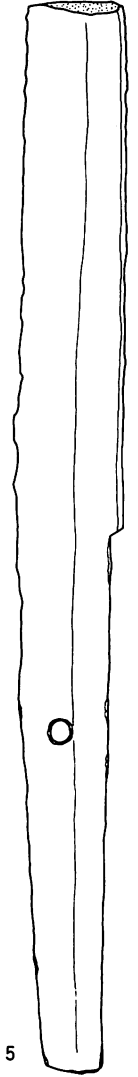
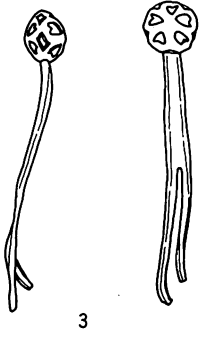
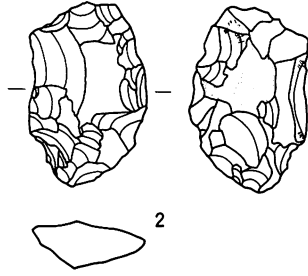
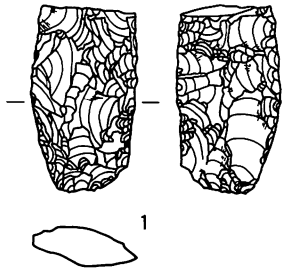
第43図 土器実測図



第44图 土器実測図



第45图 石器实测图



第46图 石器等实测图





第47図 土器



1

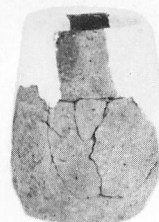


2

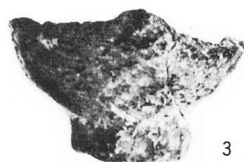
第48図 土器



1



2



3

第49図 土器



1

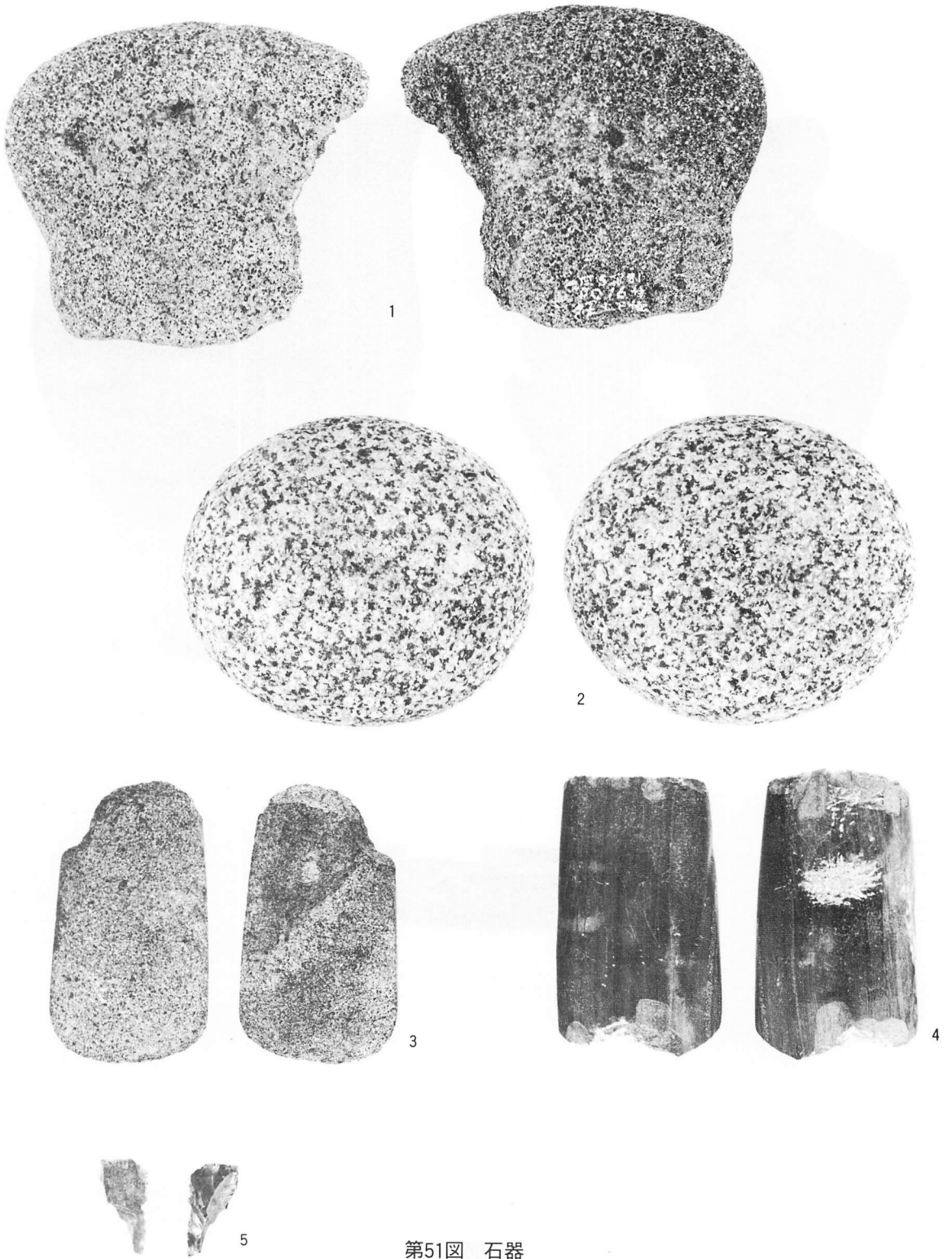


2

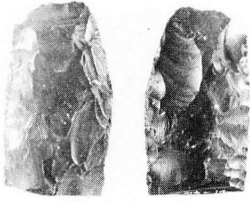


3

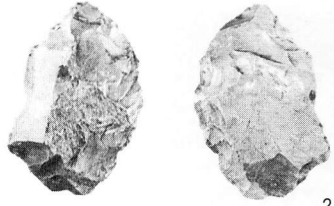
第50図 土器



第51図 石器



1



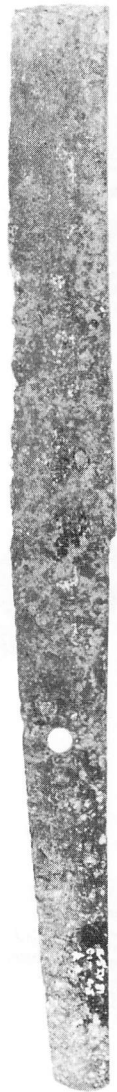
2



3

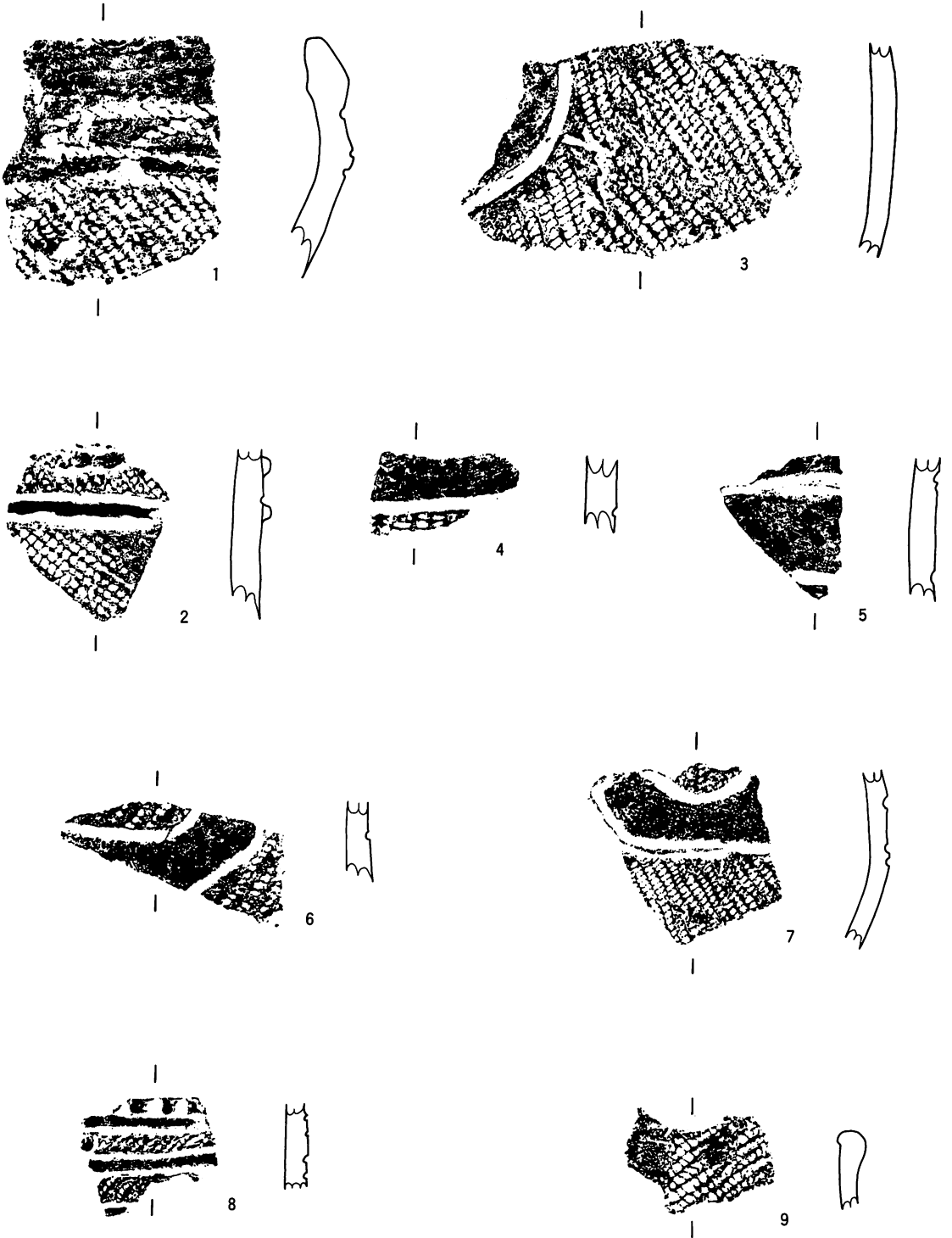


4



5

第52図 石器・他



第53圖 土器片

## V. 江刺家V遺跡の調査成果

### 1. 遺構と遺物

#### (1) Z101-1住居跡 (第56図、第57図)

Z101グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.4 mの高低差があつて傾斜している。

平面は、床面で径4.2~3.7mでほぼ円形を呈している。床面はわずかに起伏があるが、ほぼ平坦で、貼床は認められなかった。

ピットは6ヶ所で検出された。各々について、掘方径一柱当径一深さの順に示すと次のようになる。 $P_1=0.28-0.23-0.56$   $P_2=0.23-0.19-0.39$   $P_3=0.30- ? -0.15$   $P_4=0.20- ? -0.11$   $P_5=0.25-0.20-0.35$   $P_6=0.21-0.16-0.29$ m、柱穴は $P_1$ 、 $P_2$ 、 $P_5$ 、 $P_6$ の4本であると思われる。 $P_2$ 、 $P_3$ は柱当りの区別がつかなかった。

炉は床面中央から少し南よりの位置にあつて、粘板岩の割石で内法約0.35~0.3 mの方形に囲った石囲炉が作られてあつた。石囲炉は床面をわずかに掘り込んで割石を埋めて作られている。焼土は約0.05mほどである。割石の内側は火熱を受けて少し赤変している。

壁は、西側で0.4 m、東側で0.05mほどの高さしかなく、全体に床面から140~120°の角度で外傾している。

埋土は4層に区分されるが全体として南部浮石を少量含む黒色土ないし褐色土で、しまりもなく、粘りもない。

出土遺物は鉢形土器1、磨石1、石鍬1、などで、いずれも南東の壁ぎわの床面より出土した。

鉢形土器(第69図1、第73図1)この土器は下半分のほぼ全体と、上半分の文様帯下半は約半分、上半は4分の1程度が現存する。復元してみると底径12.6cmの底部から、文様帯下端まで、わずかに外湾ぎみに外傾して開き、ここから文様帯中央付近まで直線的に立ちあがり、口縁部までは外湾し外傾して径を大きくする。口縁最大径は推定で34cmぐらいと思われる。器高は推定で46cmぐらいであろう。

口縁は波状口縁で4波状である。波状口縁裏面の項には三日月状の粘土の盛り上げがみられる。

文様は、初めに、全体にLRの単節斜縄文が施文され、次に波状口縁毎にS字系の先端を閉じたモチーフを2本の平行沈線で区画する。区画文内の縄文は磨消されて研磨される。さらにS字の両先端には鱗伏の貼り付けが見られる。S字とS字の上端は波状口縁に平行して一本の沈線が引かれ、この池線と口唇までの間は縄文が磨消され、研磨される。もう一方のS字とS



字の下端は平行沈線が水平に引かれ、この沈線間は縄文が磨消され研磨されている。

この土器は大木10式に併行すると思われるので、縄文時代中期末に位置づけられるであろう。

石鍬（第71図1、第75図1）住居の埋土上層から出土した。大きさは縦20.5cm、横11.5cm、厚さ1.8cmである。石質は絹雲母片岩（古生界・北上山地産）である。刃部に相当する部位に刃がついていないが、未製品である可能性があるので一応石鍬とした。

磨石（第71図2、第75図2）住居の南東壁ぎわの床面より出土した。大きさは、縦12.5cm、横8.0cm、厚さ5.2cmである。石質は硬砂岩（古生界・北上山地産）である。磨痕の他に、長辺の両端や側面の一部に敲打痕が見られる。

磨石（第71図3、第76図1）住居の南西壁ぎわの床面より出土した。長辺の一端を欠損している。大きさは縦11.3cm、横6.9cm、厚さ5.5cmである。石質は硬砂岩（古生界・北上山地産）である。全面に磨痕がある。一端を欠損しているのは敲石として使用したためであろうか。又、欠損部の縁はつぶれて丸くなっている。敲打によってつぶれたものと思われる。

## (2) A A05-1 住居跡 （第58図、第59図）

A A05グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.34mの高低差があって傾斜している。

平面は、床面で径3.7～3.5mの円形を呈している。床面は東側が少し低いが、ほぼ平坦である。床面のしまりはなく、貼床なども見られなかった。

壁は、西側で0.38m、東側で0.18mほどが残されており、全体に115～120°の角度で外傾している。埋土は2層に区分され、全体として南部浮石を少量含む黒～黒褐色土で、しまりもなく、粘りもない。

ピットは1ヶ所も検出されていないので、柱配置などは不明である。

炉は、床面の中央北東よりに炉跡と思われる焼土があり、焼土の周囲には5個の角礫が散存している。焼土は床面より少し浮き上がって検出された。周囲の礫は床面あるいは焼土上におかれたような状況であった。

住居の北壁ぎわから、埋設土器が検出された。壁と床の境に斜めの穴を掘り、底部のない鉢形の土器を口縁部を上にして、少し住居の内側に傾けて埋設している。又、土器のすぐ上には土器を覆うように、巾0.25m、長さ0.4m、厚さ0.05m位の上部に折れ目の見える偏平な石が埋設土器と同じ穴に差し込まれてあった。

この埋設土器のすぐ西側に近接して、長さ約0.5mと0.38mの長大な偏平な礫が床面に2個平行に並べられてあった。

出土遺物は埋設土器の他は埋土より縄文土器片が数片出土しただけである。土器片はいずれも単節斜縄文の小片だけである。

鉢形土器（第69図3、第73図3）この土器は底部を欠損している。器形は、底部方向から口縁部直下の胴部最大径の位置まで内湾ぎみに外傾して立ちあがる。胴部最大径の位置から口縁部までは外湾ぎみに外傾しているため、少しくびれたように見える。口径は推定で20～21cm、現存する器高は23cmである。

外面には全面にRLの単節斜縄文が施文されている。内面は全面に縦のみがきがおこなわれた後に、口縁部だけ横のみがきがおこなわれる。

現存する下半部に火熱を受けた痕跡が見られる。

### (3) AB06-1 住居跡（第60図、第61図）

AB06グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.6mの高低差があって傾斜している。住居の北西側に2.5～2mの不整形ピットが重複している。埋土の状況から、ピットが住居より新しいと思われる。

平面は、床面で径3.6～3.4mの不整形円形を呈している。床面は、ほぼ平坦であるがあまりしまりがない。

壁は、西側で0.55m、東側で0.15mほどが残されていて、全体に115～110°の角度で外傾している。埋土は、4層に区分でき、全体として南部浮石を少量含む黒～黒褐色土で、しまりもなく、粘りもない。住居と重複している不整形ピットの埋土上層には十和田a降下火山灰層が認められる。

ピットは3ヶ所で検出されているが、これを柱穴とすると配置が不自然である。又、掘方と柱当りの区別もつかないし、深さもあまり深くない。各々の掘方径―深さを示すと次のようになる。 $P_1=0.25-0.38$   $P_2=0.25-0.19$   $P_3=0.26-0.28$ m

炉は、床面中央東よりに地床炉と思われる焼土が0.7～0.5mの範囲に見られた。焼土面は南側で床面より少し低く、北側では反対に少し高くなっている。焼土の厚さは3～5cmであるが、全体にしまりがない。礫が周囲に見られるが、石囲炉にはならない。

出土遺物は鉢形土器1、と縄文土器片が埋土から少量であった。第72図4、5、6、は単節斜縄文に沈線や磨消縄文が見られる他微隆帯が見られる。

鉢形土器（第69図2、第73図2）この土器は底部は欠損し、胴部は約4分の1、口縁部はわずかしこ現存していない。復元によって器形を見ると、底部方向から口縁部下端まで下半部がわずかに内湾、外傾して、上半部は直線的に立ちあがる。胴部と口縁部の境には明瞭な段ができる。口縁部はほとんど直線的に外傾して開く、口縁部は波状口縁で4波状と思われる。口径は推定で最大19cmぐらい。胴部の最大径は14～15cmと思われる。器高は20cmぐらいであろう。

文様は、全面にRLの単節斜縄文が施文され、次に口縁部に平行沈線文が引かれ、平行沈線間は原則として地文を磨消しているが、平行沈線、磨消縄文は共に粗雑である。胴部下端に

はけずりが見られる。

この土器は十腰内Ⅰ式に併行すると思われるので、縄文時代後期初頭に位置づけられるであろう。

#### (4) A A 06—1 焼土遺構 (第62図)

A A 06グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.43mの高低差のある斜面に、径約3.5mの不整円形の落ち込みが検出された。当初、この落ち込みが住居跡である可能性も考えて精査したところ、壁面や床面に相当する状況も見られず、柱穴も検出されないため住居跡ではないと考えるに至った。

落ち込みは、検出面が西から東に傾斜していることもあると思われるが、東側法面が検出されていない。西側法面の高さは約0.35mである。

底面は平坦ではなく、全体に少し西側が低くなっている。底面のほぼ中央に、0.8～0.6mの範囲に焼土が検出された。焼土の厚さは約7cmほどで、東半分は攪乱を受けている。焼土の周囲には何も痕跡が認められない。焼土上面には焼土と炭粒を少量含む暗褐色土があって、この層から鉢形の縄文土器1個体が横位置につぶれて出土した。

鉢形土器(第70図1、第74図2)口縁部と胴部を欠損している。器形は底径9cmの底部から、胴部の下半は直線的に外斜し、上半部は直線的に立ちあがり、胴部最大径にたつする。胴部と口縁部の境には明瞭な段が見られる。口縁部は山形部分がほぼ直線的に外傾して開き口縁部先端の最大径にたつする。口縁は波状口縁で6波状である。口径は26cm、胴部最大径は19cmである。器高は最大29.5cmである。

文様は、土器全体に、R Lの単節斜縄文が施文され、次に土器全体の4分の3を文様帯にして、平行沈線が引かれる。文様は、口縁部には円形文や曲線文、胴部には波状の平行沈線によって水平に3段の区画が作られ、その区画をさらに、半円状に平行沈線で水垂に区画し文様を作っている。2本の沈線間は原則として地文が磨消されている。沈線、磨消縄文共に粗雑である。

#### (5) A B 05—3 焼土遺構 (第63図)

A B 05グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に0.18mの高低差のある斜面に径2.1～1.2mの不整形の深さが最大0.22m断面が皿状の落ち込みが検出された。底面は平坦ではなく、全体に検出面と共に東側に傾斜している。

底面のほぼ中央に径約0.4mの範囲に焼土が検出された。焼土の厚さは約0.03mほどで、周囲には他に何の痕跡も認められなかった。

落ち込みの埋土は3層に区分でき、埋土の上層から壺形土器1個体分の破片が出土した。

壺形土器(第70図2、第74図1)全体の約4分の1が欠損している。器形は、底径約7cmの

底部から大きく内湾して立ちあがり、頸部にいたる。胴部最大径は20.5cmで底部から約11cmの位置にあって、全体に球形で、最大径位置で少し外に張り出すような形をしている。頸部径は11.2cmで、胴部から口縁部に向かって段を作ることなく、外湾して開き、口唇部にいたる。口径は12.4cmで器高は約25cmである。

この土器に文様はなく、無文である。外面には頸部から下が縦方向、頸部と口縁部は横方向のミガキ痕が見られる。内面は、全体に横方向のナデやミガキが見られ、少例ではあるが、不定方向の痕跡もある。内・外共にナデやミガキは粗雑である。

焼成はやや軟質で、黒斑が見られる。この土器は器面調整などを見ると土師器のようにも見えるが、器形が独特であるため判断しかねている。

(6) A B 05—1ピット (第64図)

A B 05グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.15mの高低差があって傾斜している。

平面形は開口部径1.05～0.95m、底面径約0.8mで円形を呈している。底面は平坦であまりしまりがない。

断面は開口部から底部方向に少し外湾ぎみに窄まり、全体としてフラスコ状を呈する。全体の深さは0.37～0.35mである。

埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

(7) A B 05—2ピット (第65図)

A B 05グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.35mの高低差があり傾斜している。ピットの南西側で風徴木痕と重複しているため、第Ⅵ層の礫層が検出面に出ている。ピットはこれを切って作られている。

平面は開口部径が1.15～1.1m、底部径が0.95～0.9mのほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦であまりしまりがない。

断面は開口部から底部方向に直線的に窄まり、全体としてフラスコ状を呈する。全体の深さは0.57～0.5mである。埋土は4層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物はない。

(8) A C 09—1ピット (第66図)

A C 09グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に0.12mの高低差があって傾斜している。

平面は、開口部径が1.4～1.1m、底部径が1～0.8mの楕円形を呈する。長軸方向は北西—南東方向で、検出面の傾斜方向と同じである。底面はほぼ平坦でしまりがない。底面から礫2個が出土している。

断面は、開口部から底部方向に直線的に窄まり、全体にフラスコ状を呈する。全体の深さは0.4～0.35mである。埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物は、埋土から縄文土器片数片が出土した。これらの土器片はいずれも単節斜縄文を地文とする小破片である。

(9) A D 07-1ピット (第67図)

A D 07グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は北西から南東方向に約0.15mの高低差があつて傾斜している。

平面は、開口部径が1.1～0.9mの不整円形、底部は0.7～0.2mの長円形を呈する。長軸方向は北東-南西方向で、検出面の傾斜方向と直交する。底面はほぼ平坦であるが、北側がわずかに高い。

断面は、開口部から底部方向に少し内湾ぎみに窄まり、全体に薬研状を呈する。全体の深さは約0.5mである。埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。

出土遺物はない。

(10) A D 08-1ピット (第68図)

A D 08グリッド、第Ⅲ層上面で検出された。検出面は西から東方向に約0.45mの高低差があつて傾斜している。

平面は、開口部径は1.5～1m、底部径は1.1～0.7mの長円形を呈している。長軸方向は東-西方向で検出面の傾斜と同一方向である。底面はほぼ平坦で、しまりが無い。

断面は開口部から底部方向へ少し外湾ぎみに窄まり、全体にピーカー状を呈する。全体の深さは0.37～0.33mである。

埋土は3層に区分でき、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

## 2. 遺構外の遺物

遺構外からの出土遺物、つまり第Ⅰ層、第Ⅱ層より出土した遺物は、第Ⅰ層、第Ⅱ層の発掘を人力でおこなったのであるが、量的には多くなかった。

石棒(第72図3、第76図2)第Ⅰ層より出土した。上端部と下端部を欠損しているが、石棒の一部と思われる。現存部の最大長は15.6cm、横断面は直径7.2cmの円形になっている。石質は、石英安山岩(中新統上部、雫石南部産)で、敲打によって円柱状に加工されている。表面には加熱を受けた痕跡があつて、内部に達する亀裂が数本入っている。

円盤状土製品(第72図1-2、第76図3-4)共に第Ⅰ層より出土した。

第72図1のものは、直径4.4～4cmの不整円形をしている。LRの単節斜縄文を施文した土器片を加工したものである。

第72図2のものは、直径5～4.5cmの不整円形をしている。LRL複節斜縄文を施文した土

器片を加工したものである。

#### 縄文土器片

土器片は全体量としても少量であった。このうちから特徴のある破片によって分類すると次のようになる。

第Ⅰ群（第77図1） 隆帯が水平に貼り付けられ、この隆帯には縄文が施文されている。隆帯の上部には半裁竹管による刺突文があり、隆帯の下部にはRLの単節斜縄文が施文されている。わずか1片しかないが、円筒上層c式に相当するものである。

第Ⅱ群（第77図2～9） RLかLRの単節斜縄文を地文として、これに沈線が入り、磨消縄文が見られる。磨消縄文はよく研磨されている。少数ではあるが、微隆帯文も見られ、磨消縄文帯の末端に鱗状の貼付けも見られる。本群は、大木10式に相当あるいは併行の土器群である。

第Ⅲ群 十腰内Ⅰ式に相当すると思われる土器群で、無文＋沈線を1類。縄文＋沈線＋磨消縄文を2類。縄文＋沈線を3類とした。

1類（第78図1～10） 地文はなく、無文に沈線文だけの土器片である。この他に単節縄文の側面圧痕文もある。

2類（第79図1～12） RLかLRの単節斜縄文を地文として、これに沈線文が入り、磨消縄文が見られることは第Ⅱ群と同じであるが、本類が第Ⅱ群と相異するところは、沈線や磨消縄文による文様の単位が小さいことであるが、この他に、磨消縄文の磨消し方が第Ⅱ群ほど完全ではなく、粗雑であるため、地文の一部が残ることが多い。

3類（第80図6～9） RLかLRの単節斜縄文を地文として、これに沈線文が入るが、磨消縄文がまったく見られない土器群である。

この他の土器片は、LRやRLの単節斜縄文を地文とする破片がほとんどの数を占め、わずかに羽状縄文や撚糸文が見られるが、網目状文は見られない。

### 3. まとめ

今回の調査によって、住居跡3、焼土遺構2、ピット5が検出され、精査された。（第54図）住居跡は、石囲炉1、地床炉2であった。A A05-1住居跡には埋設土器が検出され、これを覆うような石がともなっていることは注目される。住居の時期は大木10～十腰内Ⅰ式に相当すると思われるので、多少、時間の巾があることになる。

焼土遺構は、いずれも凹地状の底面に検出された。埋土から土器が出土しているが、時期についての判断は不明としておきたい。

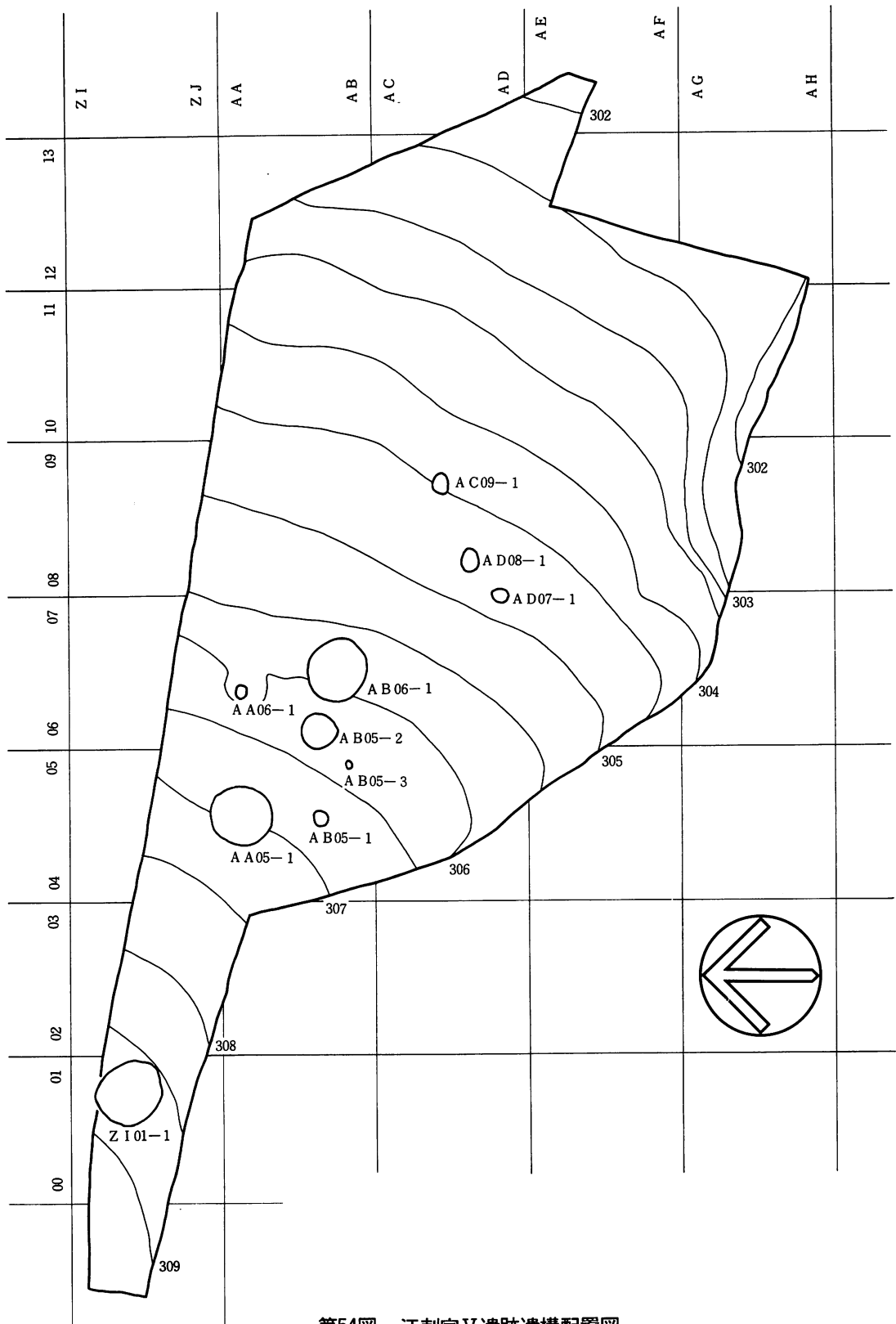
ピットは、フラスコ状を呈するもの3、開口部が不整円形ないし長円形で底部は長円形とな

り、断面がピーカーないし薬研状を呈するものが2、である。ピットの時期は不明である。分布は調査地区の中で見るかぎりでは東側にまとまりが見られる。

遺構以外の出土遺物は、全体量として少量であったが、一応次の3群に区分できる。第Ⅰ群は縄文時代中期の土器、第Ⅱ群は大木10式に相当、あるいは併行の土器、第Ⅲ群は十腰内Ⅰ式に相当する土器である。出土量はⅠ群がほんの少量で、Ⅱ、Ⅲ群の土器片でほとんどの量を占めている。

江刺家Ⅴ遺跡の範囲は遺構の配置状況や地形的条件などから西側に連続するものと推定される。これは、調査地区の南と北にある沢が西の方で間隔が狭くなることもあるが、嶽Ⅱ遺跡とつながると予想されるからである。大まかに見ると嶽Ⅱ遺跡と連続した範囲に各年代毎の遺構が分布することを想定するのであるが、周辺の江刺家Ⅳ遺跡、嶽Ⅱ遺跡、滝谷Ⅲ遺跡、道地Ⅲ遺跡における地形と遺構の配置状況を見ると、たとえ小さくとも尾根毎に南側斜面に遺構が集中していることから推測して、本遺跡においても、南と北に沢があって小さな尾根状になっているので、尾根の北側斜面に相当する地区は開田時の造成があるので発掘していないため未確認ではあるが、2本の沢が西側で間隔を狭ばめる状況を考えると遺構のまとまりを今回の調査地区に少し西側を加えた範囲にまとめることが可能であると思われる。

これは今後、嶽Ⅱ遺跡の調査成果との比較検討が望まれるところである。



第54図 江刺家V遺跡遺構配置図





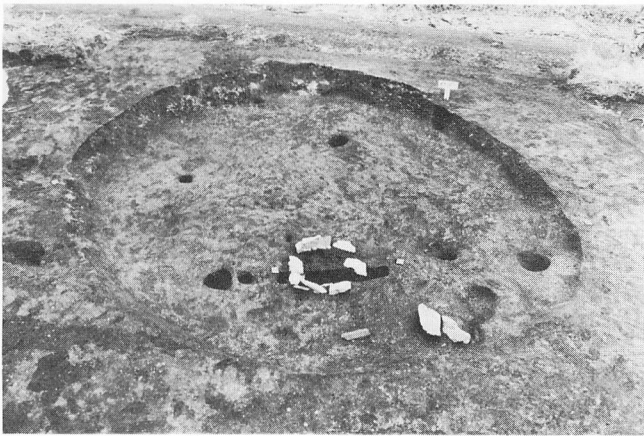
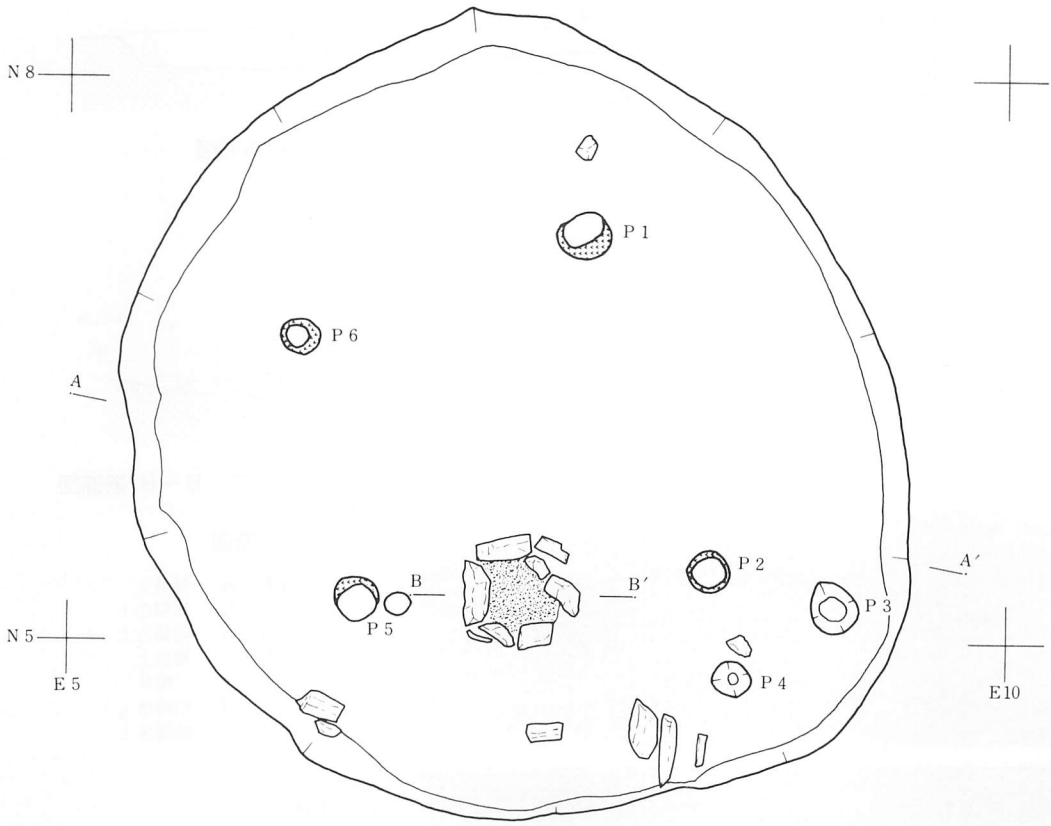
1. 空中写真(北から)



2. 調査後(西から)

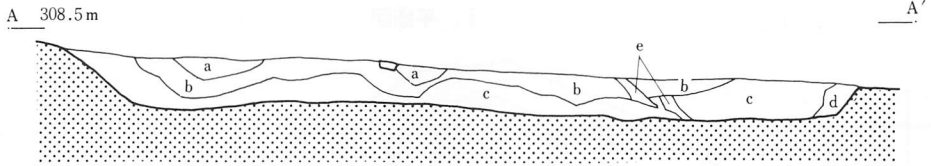
第55図 江刺家V遺跡全景

1. 平面图

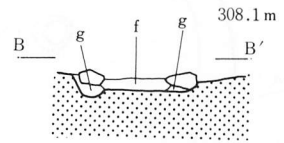


2. 住居跡全景

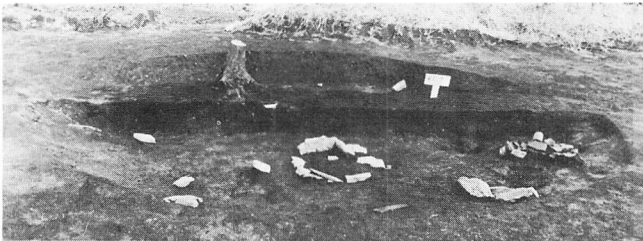
第56图 Z101-1 住居跡



1. A-A'断面图

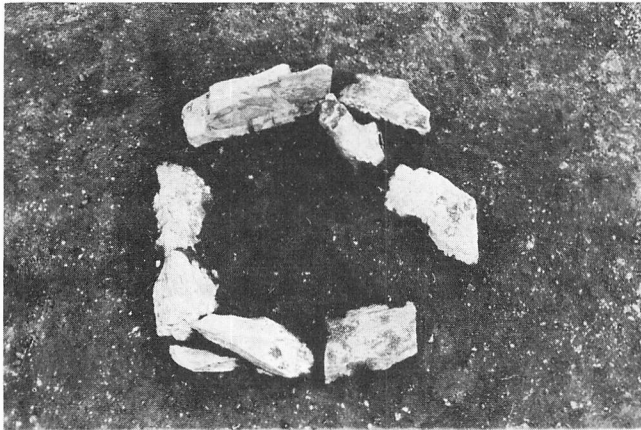


2. B-B'断面图

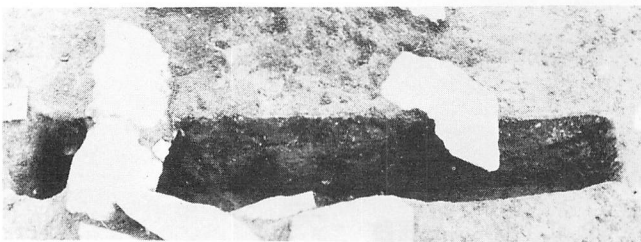


3. A-A'断面

- a. 10YR  $\frac{3}{1}$  黑色土
- b. 10YR  $\frac{3}{2}$  黑褐色土
- c. 10YR  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- d. 10YR  $\frac{3}{6}$  褐色土
- e. (搅乱)
- f. 7.5YR  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- g. 10YR  $\frac{3}{3}$  暗褐色土

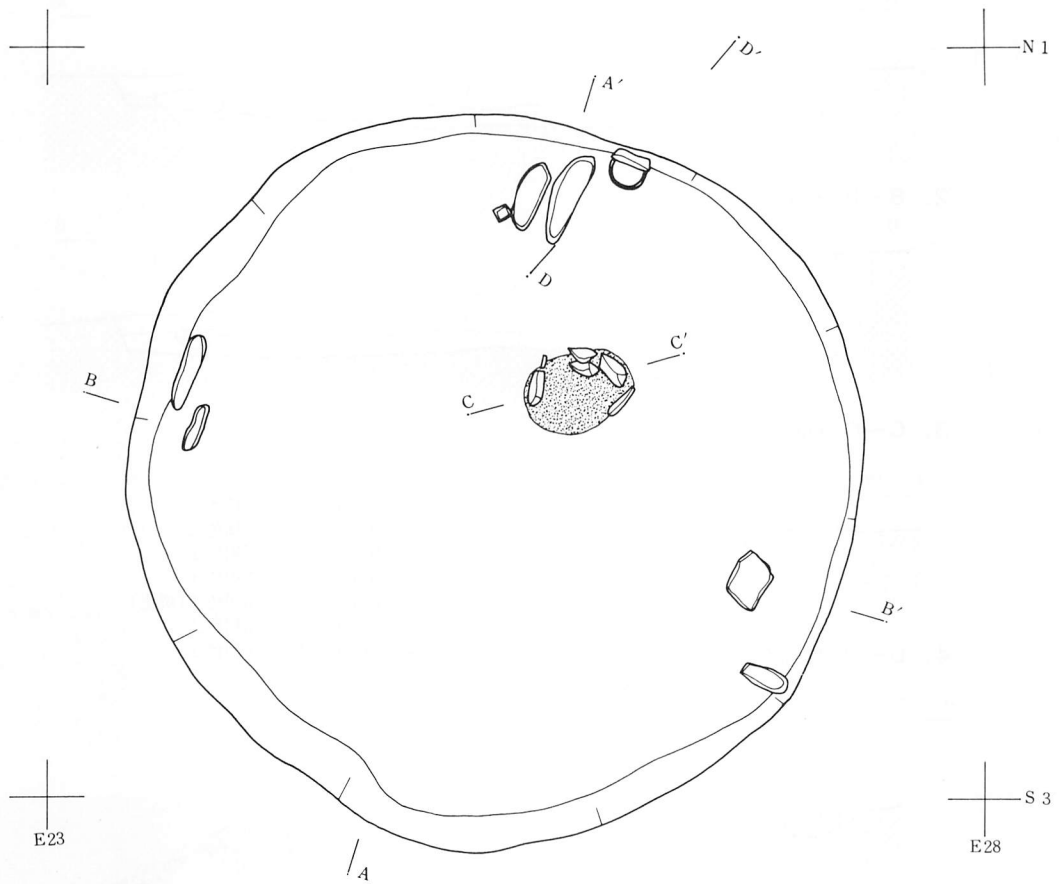


4. 炉迹

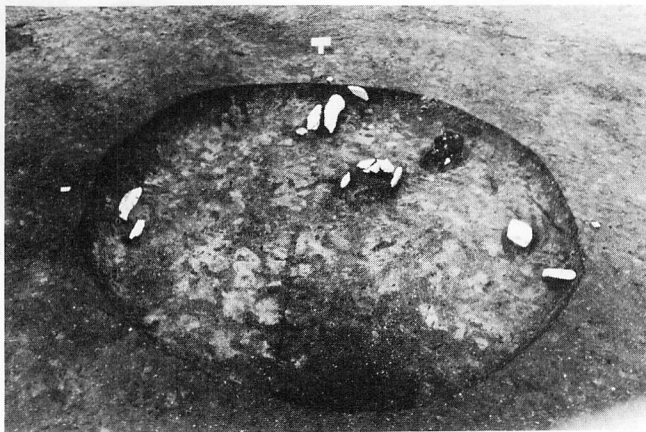


5. B-B'断面

第57图 Z101-1住居迹



1. 平面图



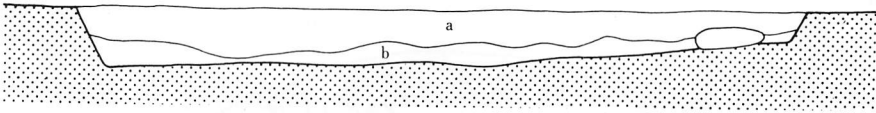
2. 住居跡全景

第58图 A A05-1 住居跡

1. A—A' 断面图

A 307.8m

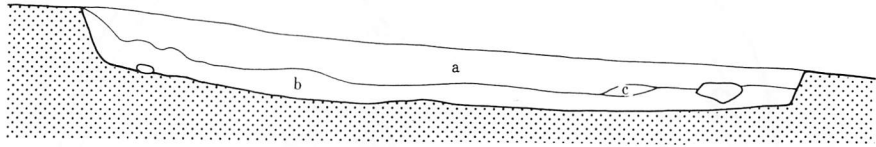
A'



2. B—B' 断面图

B

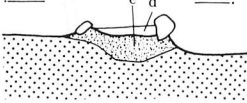
B'



3. C—C' 断面图

C 306.5m

C'

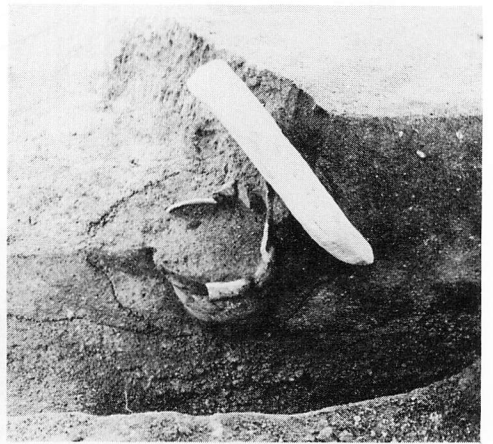
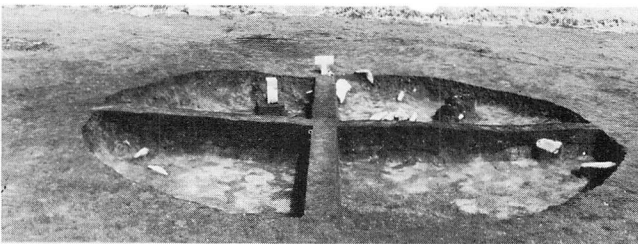
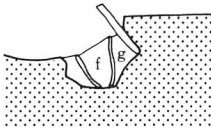


- a. 10 Y R  $\frac{2}{1}$  黑色土
- b. 10 Y R  $\frac{3}{3}$  黑褐色土
- c. 10 Y R  $\frac{2}{2}$  黑褐色土
- d. 10 Y R  $\frac{3}{2}$  黑褐色土
- e. 7.5 Y R  $\frac{3}{4}$  暗褐色土(烧土)
- f. 10 Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- g. 10 Y R  $\frac{2}{2}$  黑褐色土

4. D—D' 断面图

D 307.7m

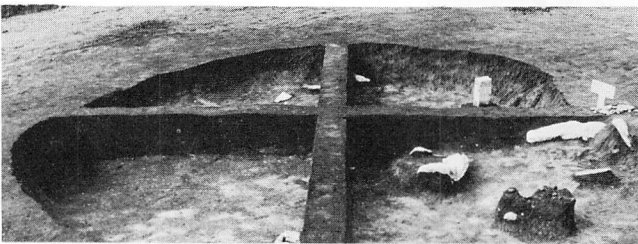
D'



7. D—D' 断面

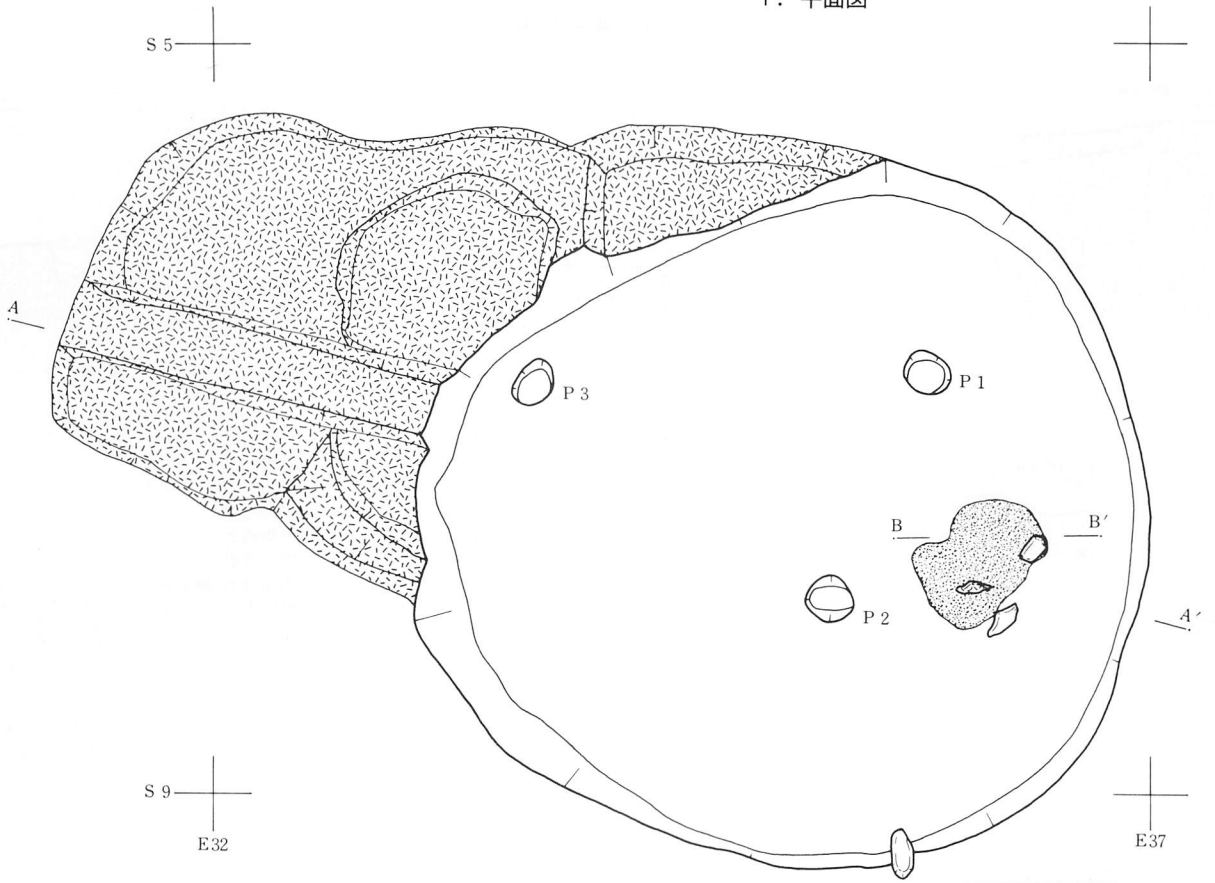
5. B—B' 断面

6. A—A' 断面

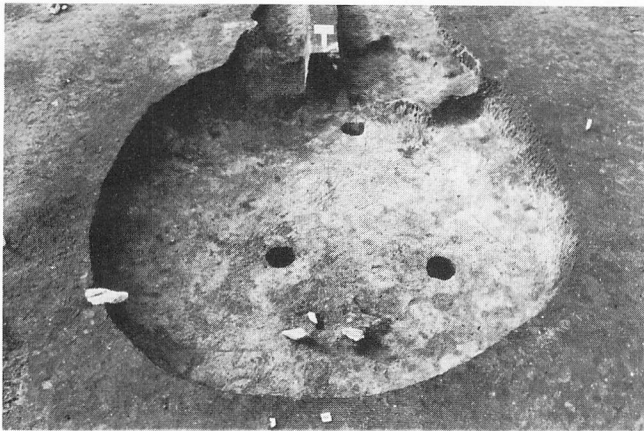


第59图 A A05—1 住居跡

1. 平面图



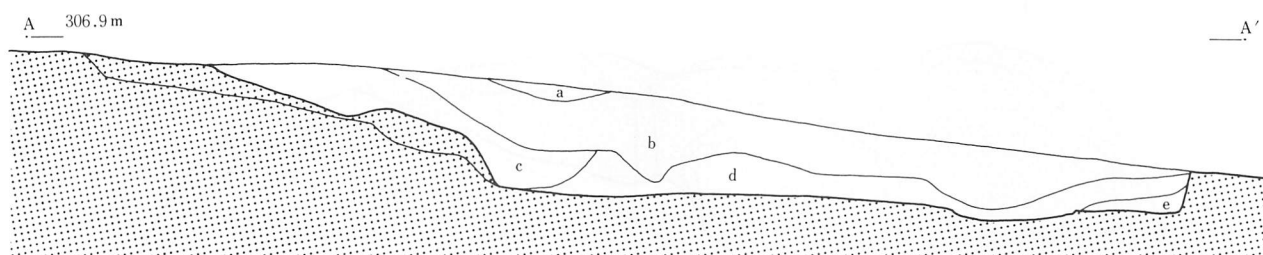
2. 住居跡全景



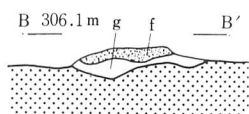
第60图 A B06-1 住居跡



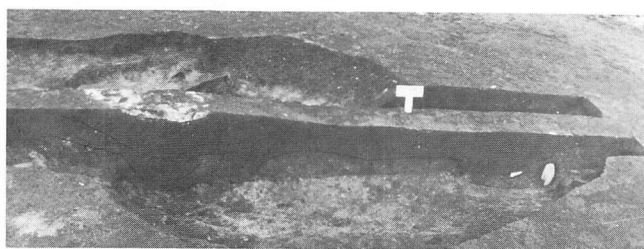
1. A—A'断面图



2. B—B'断面图



- a. 2.5 Y  $\frac{3}{4}$  黄褐色土
- b. 10 Y R  $\frac{2}{4}$  黑色土
- c. 10 Y R  $\frac{2}{3}$  黑褐色土
- d. 10 Y R  $\frac{2}{2}$  黑褐色土
- e. 10 Y R  $\frac{3}{2}$  黑褐色土
- f. 5 Y R  $\frac{1}{8}$  赤褐色土(烧土)
- g. 10 Y R  $\frac{1}{6}$  褐色土

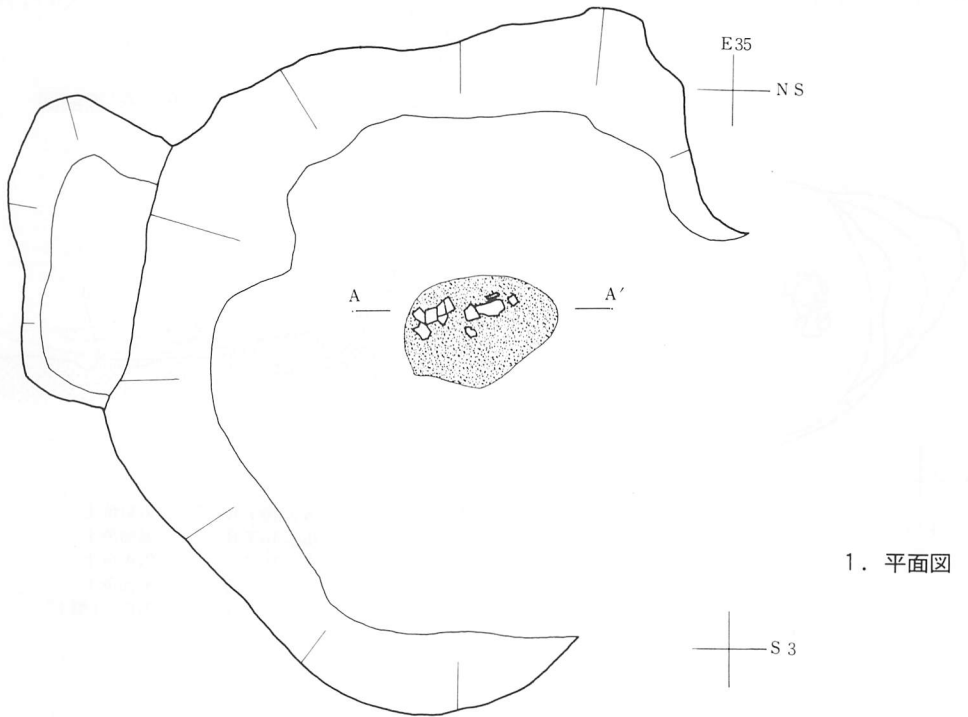


3. A—A'断面



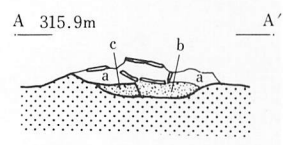
4. B—B'断面

第61图 AB06—1 住居跡

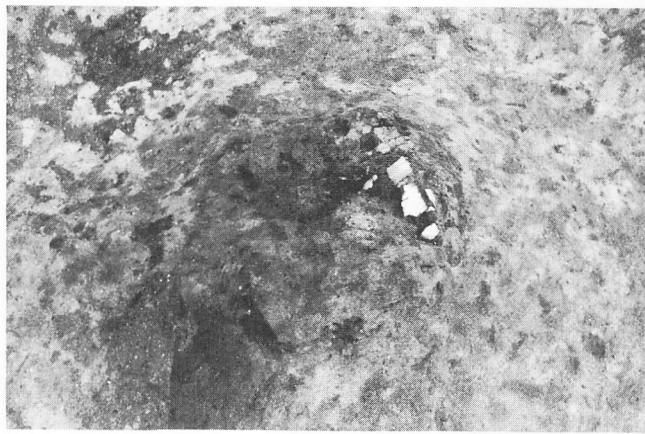


1. 平面图

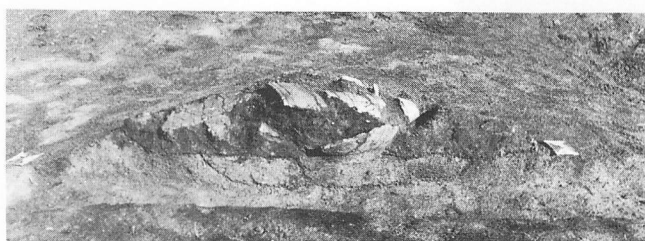
2. A-A' 断面图



- a. 7.5 YR  $\frac{3}{4}$  暗褐色土
- b. 2.5 YR  $\frac{3}{6}$  暗赤褐色土(烧土)
- c. 2.5 YR  $\frac{1}{8}$  赤褐色土(烧土)



3. 烧土遺構全景

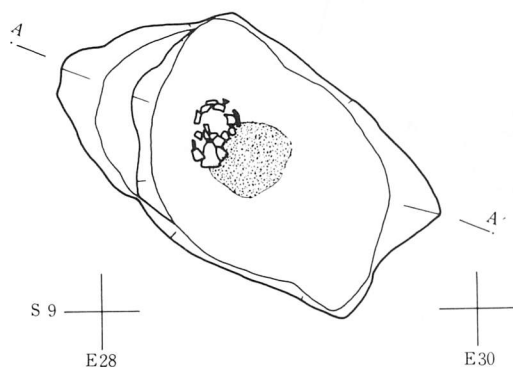


4. A-A' 断面

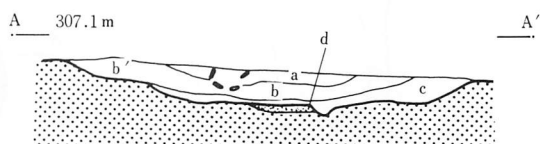
第62図 A A06-1 烧土遺構



1. 平面图



2. A-A' 断面图



- a. 10Y R  $\frac{2}{2}$  黑褐色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{1}$  黑褐色土
- b'. 10Y R  $\frac{3}{1}$  黑褐色土
- c. 10Y R  $\frac{2}{2}$  黑褐色土
- d. 75Y R  $\frac{4}{6}$  褐色土(烧土)



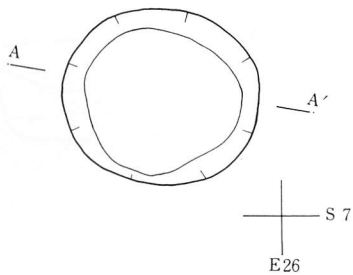
3. 烧土遺構全景



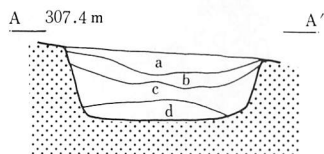
4. A-A' 断面

第63图 AB05-3 烧土遺跡

1. 平面図



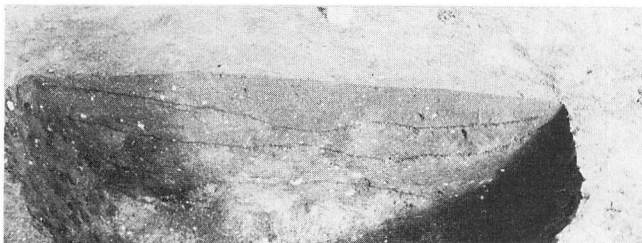
2. A-A断面図



- a. 10Y R  $\frac{2}{1}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{3}$  暗褐色土
- d. 10Y R  $\frac{4}{4}$  褐色土



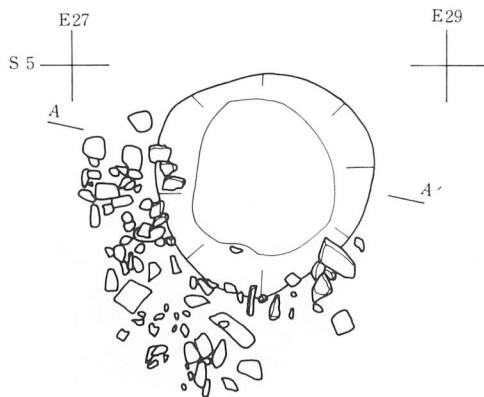
3. ピット全景



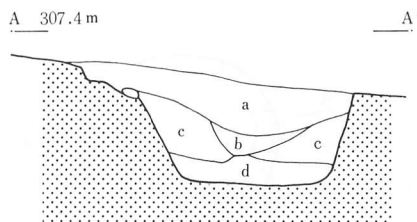
4. A-A'断面

第64図 AB05-1ピット

1. 平面図



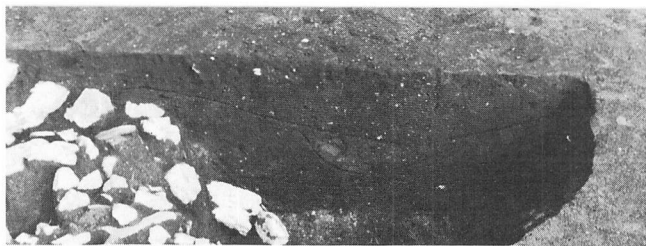
2. A-A'断面図



- a. 10 Y R  $\frac{1}{4}$  黒色土
- b. 10 Y R  $\frac{3}{8}$  暗褐色土
- c. 10 Y R  $\frac{5}{8}$  黒褐色土
- d. 10 Y R  $\frac{7}{8}$  黒褐色土

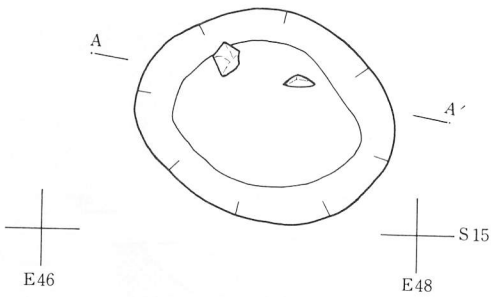


3. ピット全景



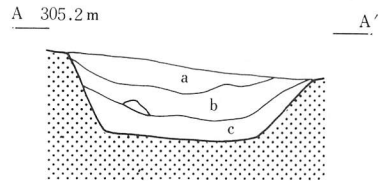
4. A-A'断面

第65図 AB05-2ピット



1. 平面図

2. A-A'断面図

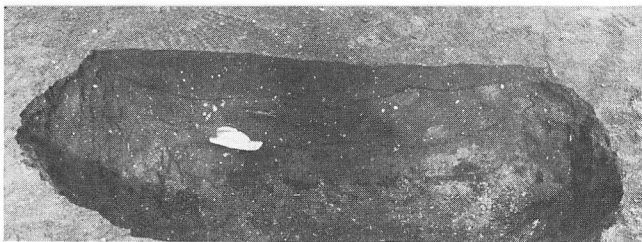


- a. 10Y R  $\frac{2}{4}$  黒色土
- b. 10Y R  $\frac{2}{2}$  黒褐色土
- c. 10Y R  $\frac{3}{4}$  褐色土

3. ピット全景

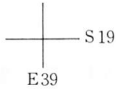
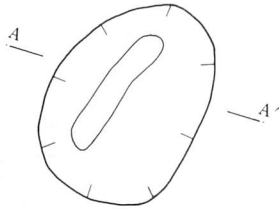


4. A-A'断面

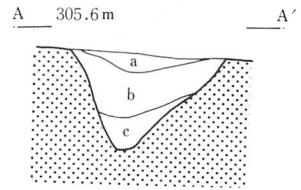


第66図 AC09-1ピット

1. 平面図



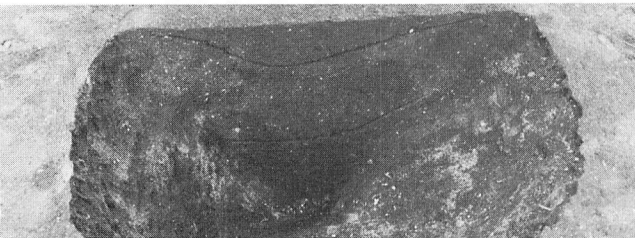
2. A-A'断面図



- a. 10 Y R  $\frac{2}{1}$  黒色土
- b. 10 Y R  $\frac{2}{3}$  黒褐色土
- c. 10 Y R  $\frac{2}{2}$  黒褐色土



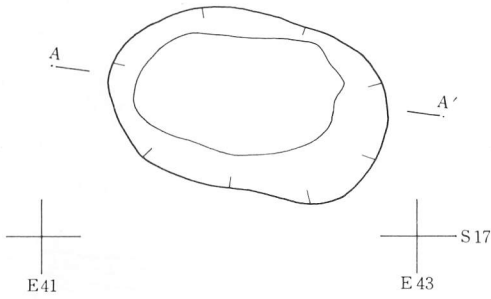
3. ピット全景



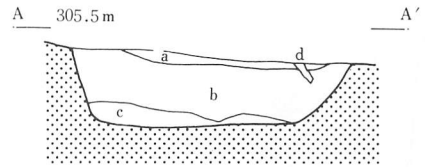
4. A-A'断面

第67図 AD07-1ピット

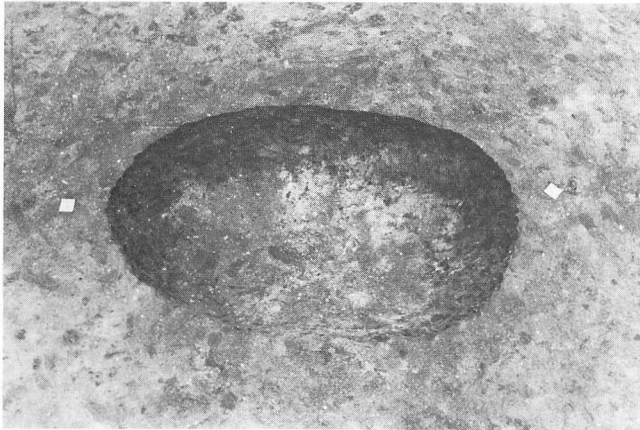
1. 平面図



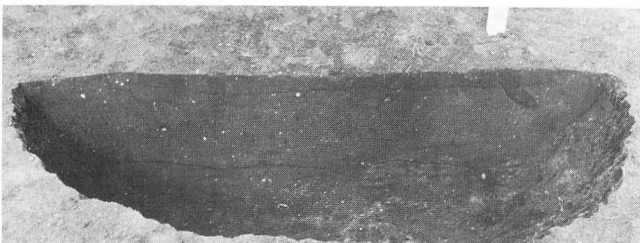
2. A-A'断面図



- a. 10 Y R  $\frac{3}{4}$  黒褐色土
- b. 10 Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- c. 10 Y R  $\frac{3}{2}$  黒褐色土
- d. (攪乱)

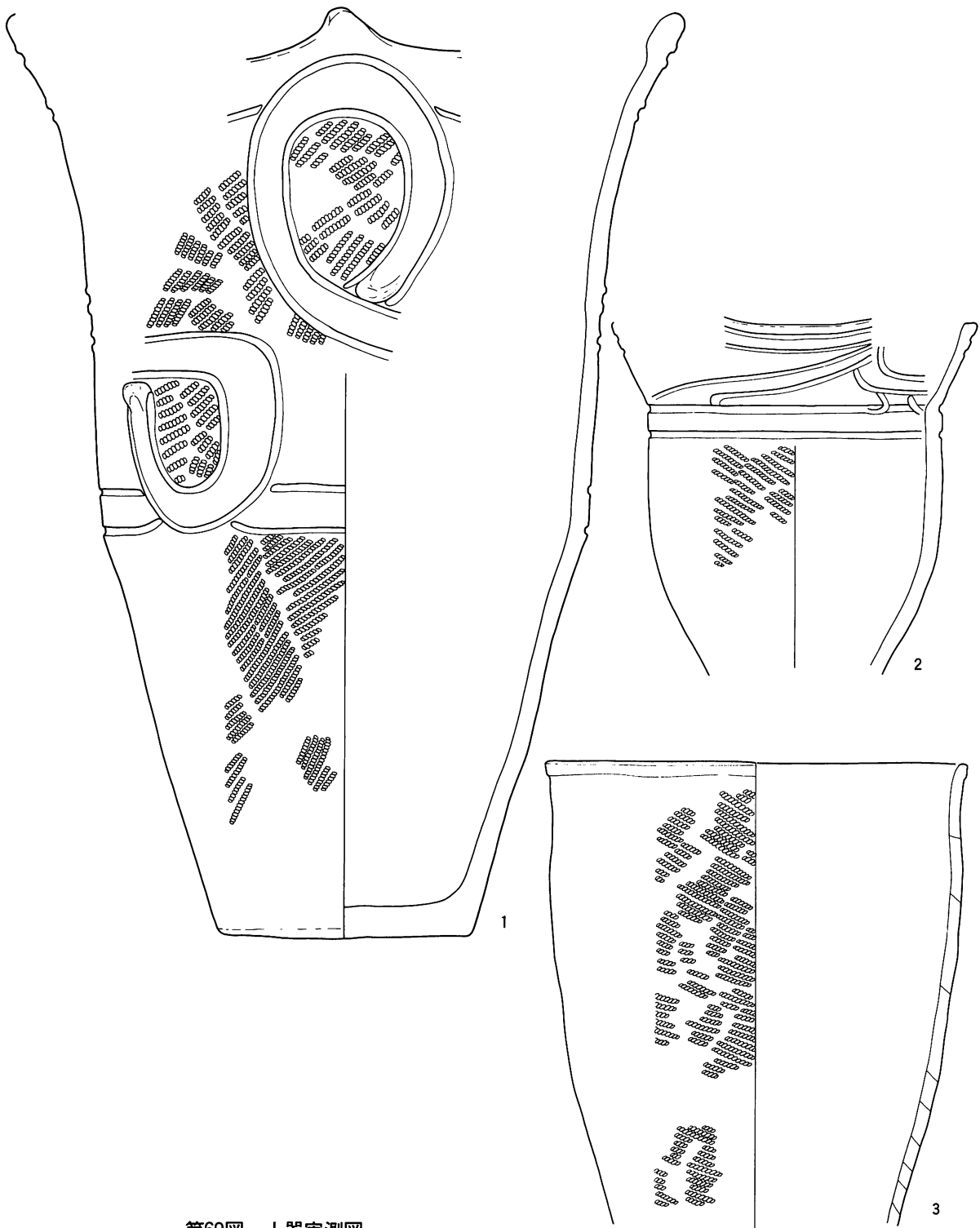


3. ピット全景



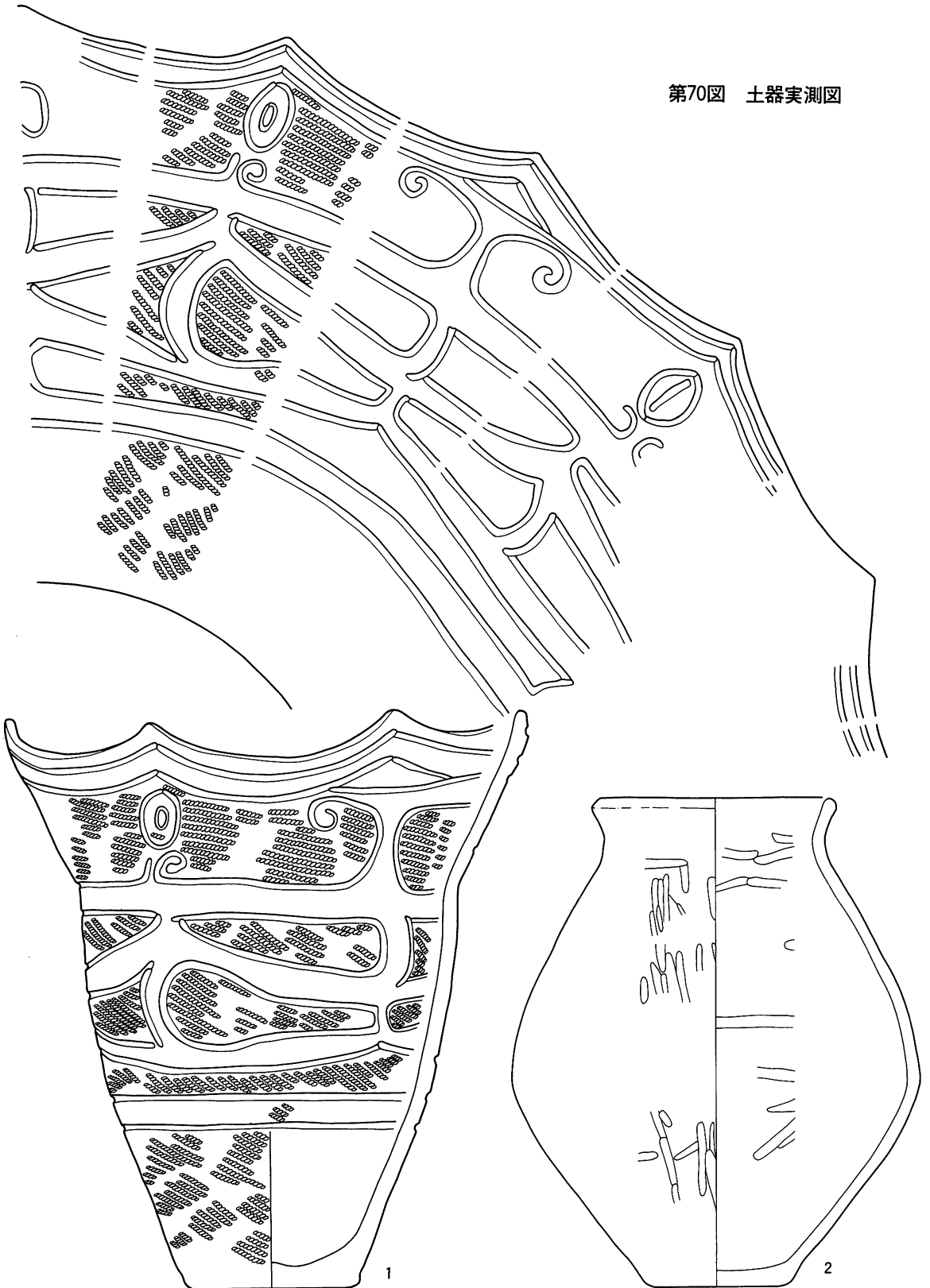
4. A-A'断面

第68図 AD08-1ピット

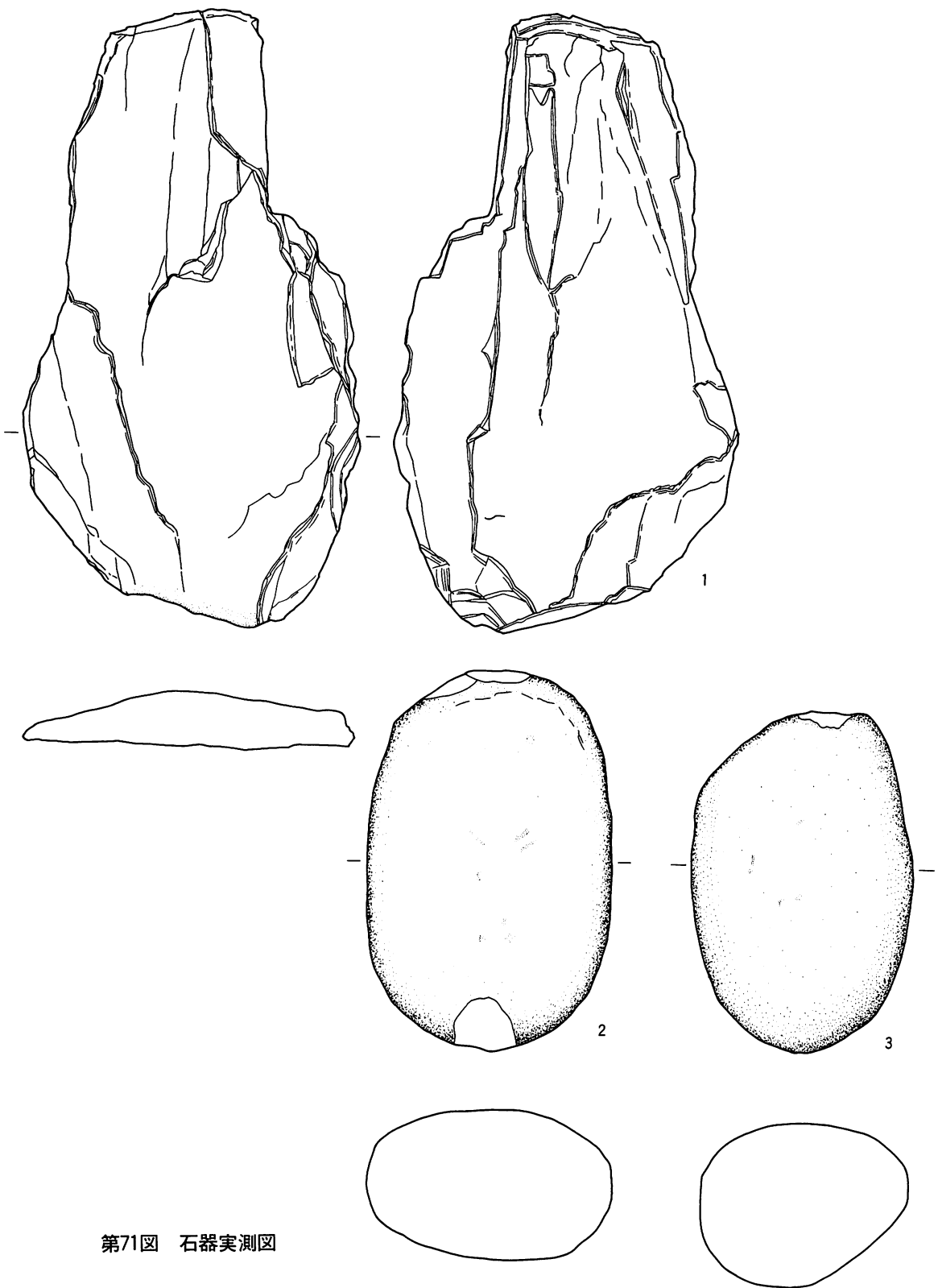


第69图 土器実测图

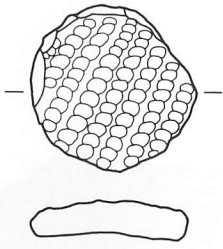
第70図 土器実測図



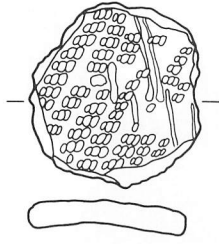




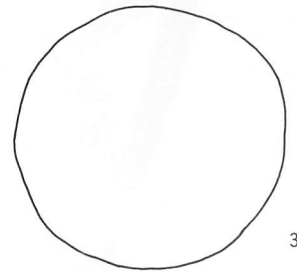
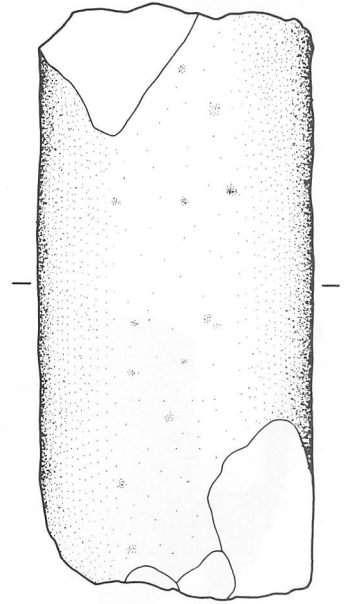
第71图 石器实测图



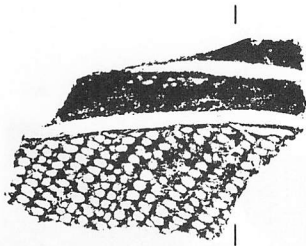
1



2



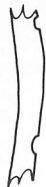
3



4



5



6



第72图 石器·他実测图



1



2



3

第73図 土器



1



2

第74図 土器

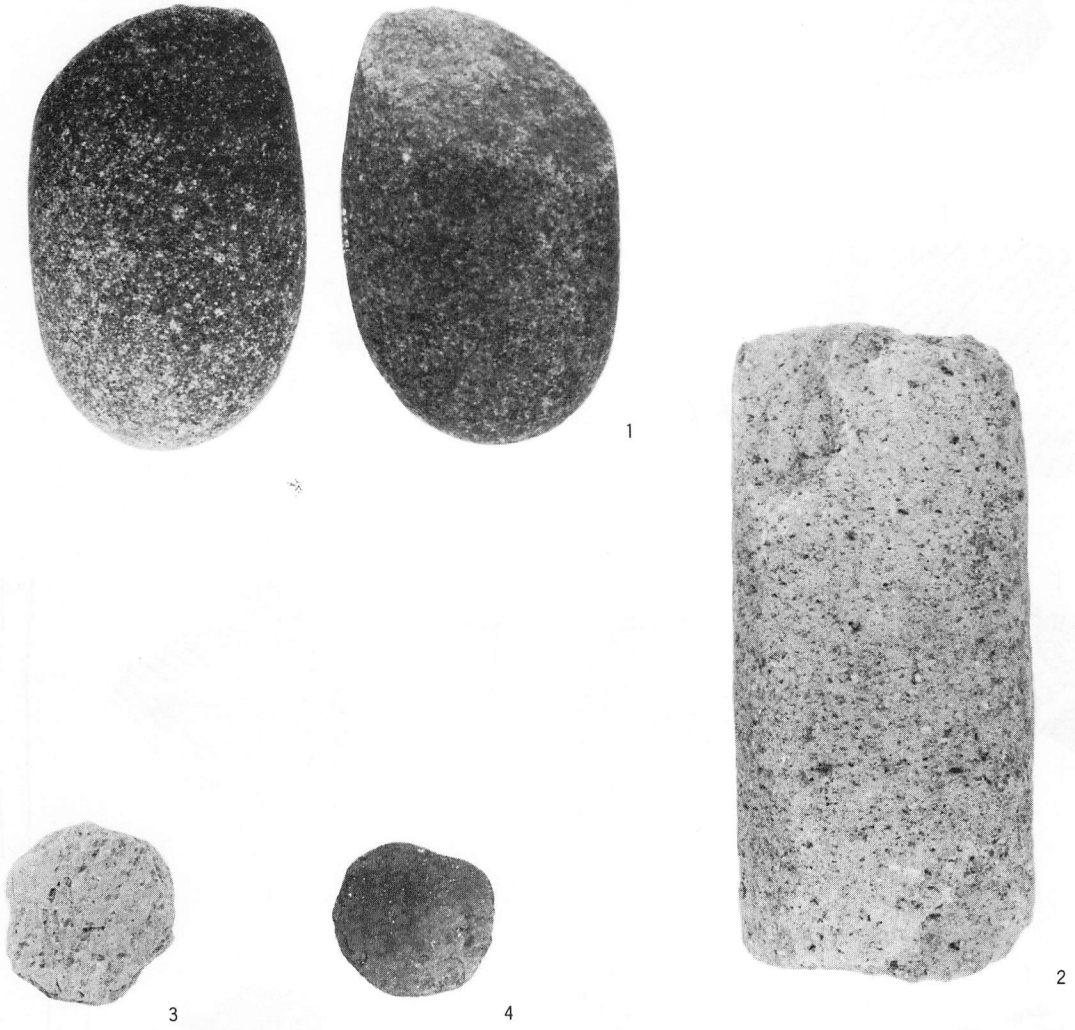


1

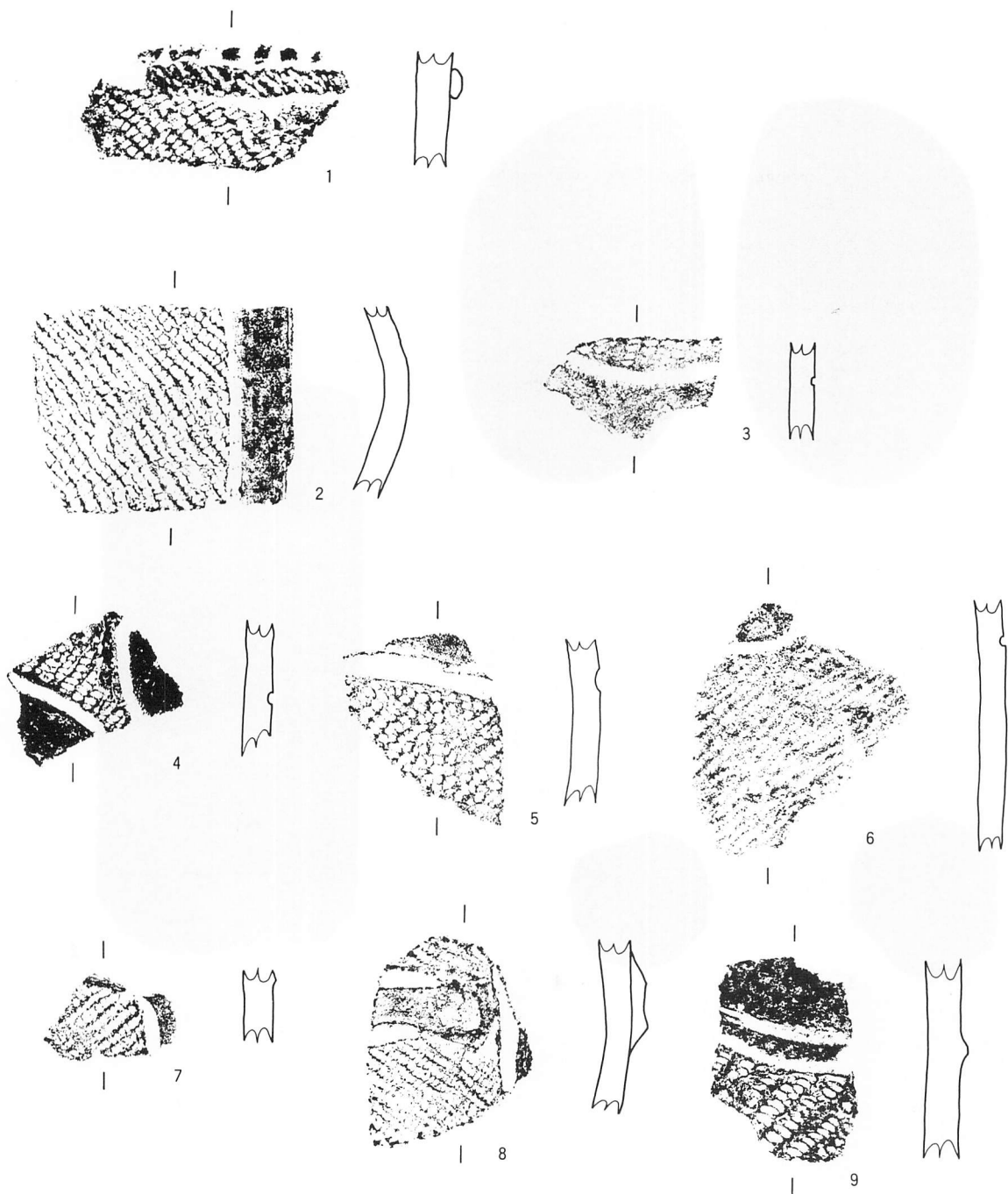


2

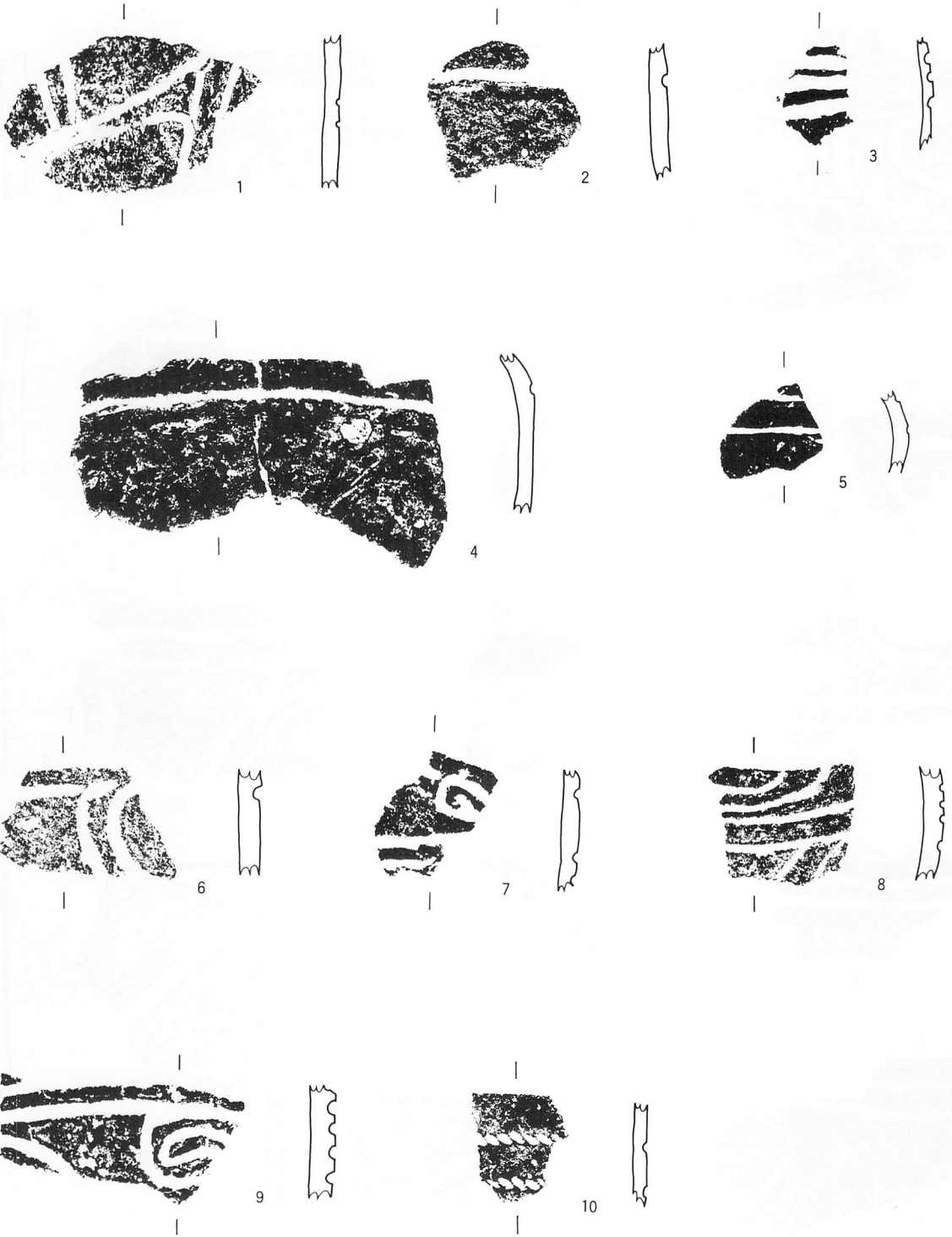
第75図 石器



第76図 石器

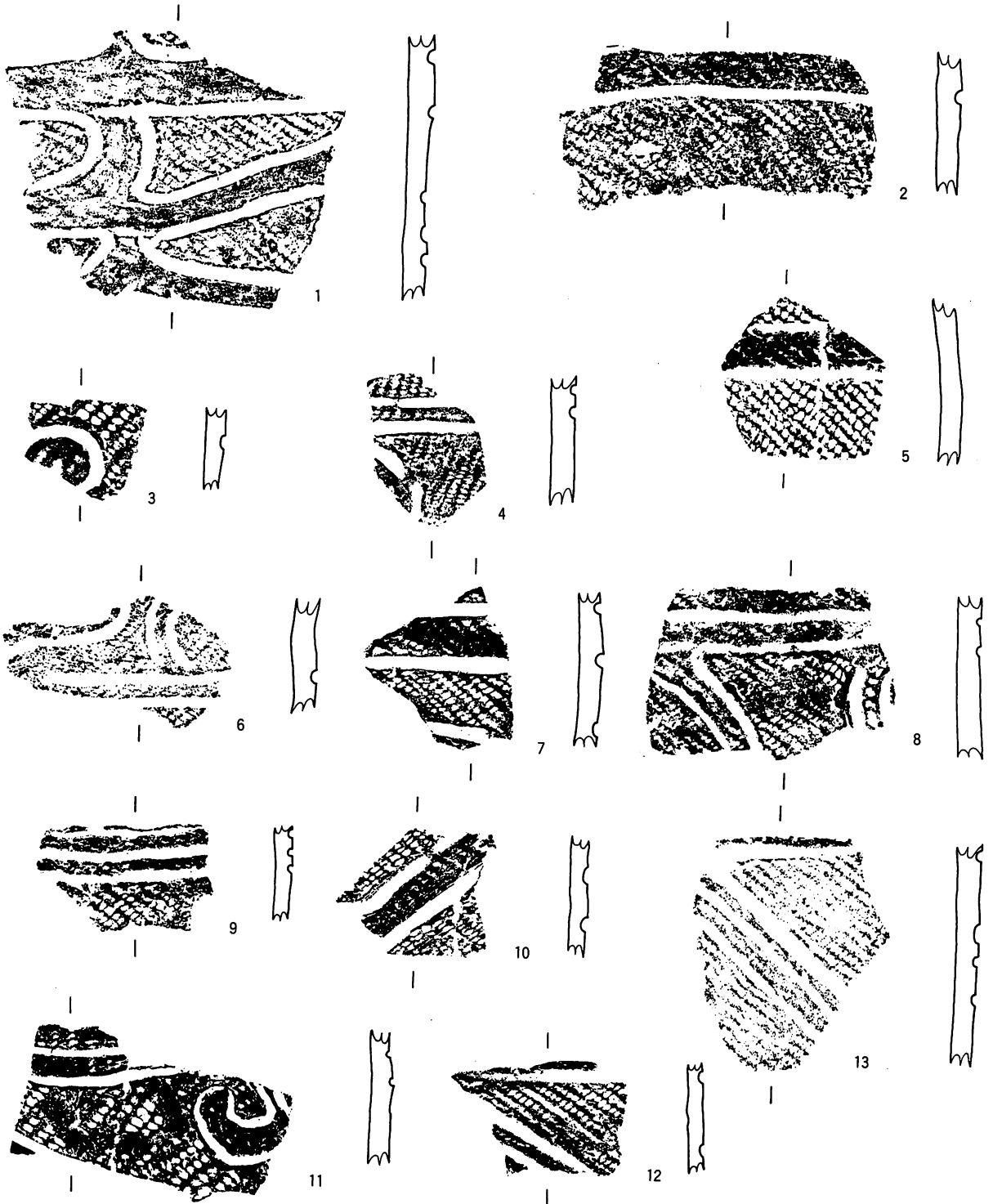


第77图 土器片

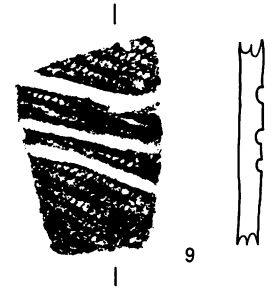
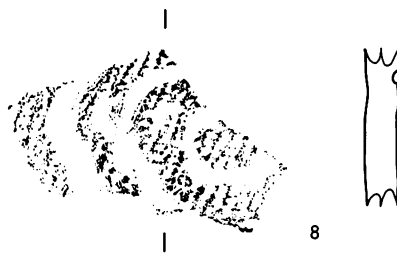
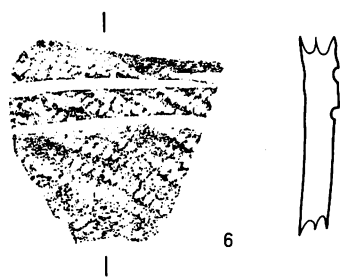
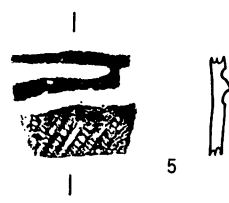
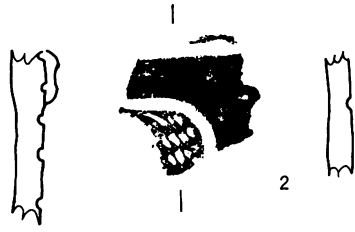
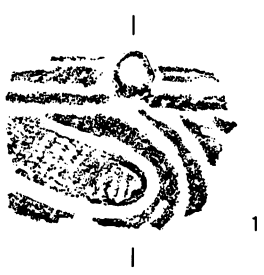


第78图 土器片

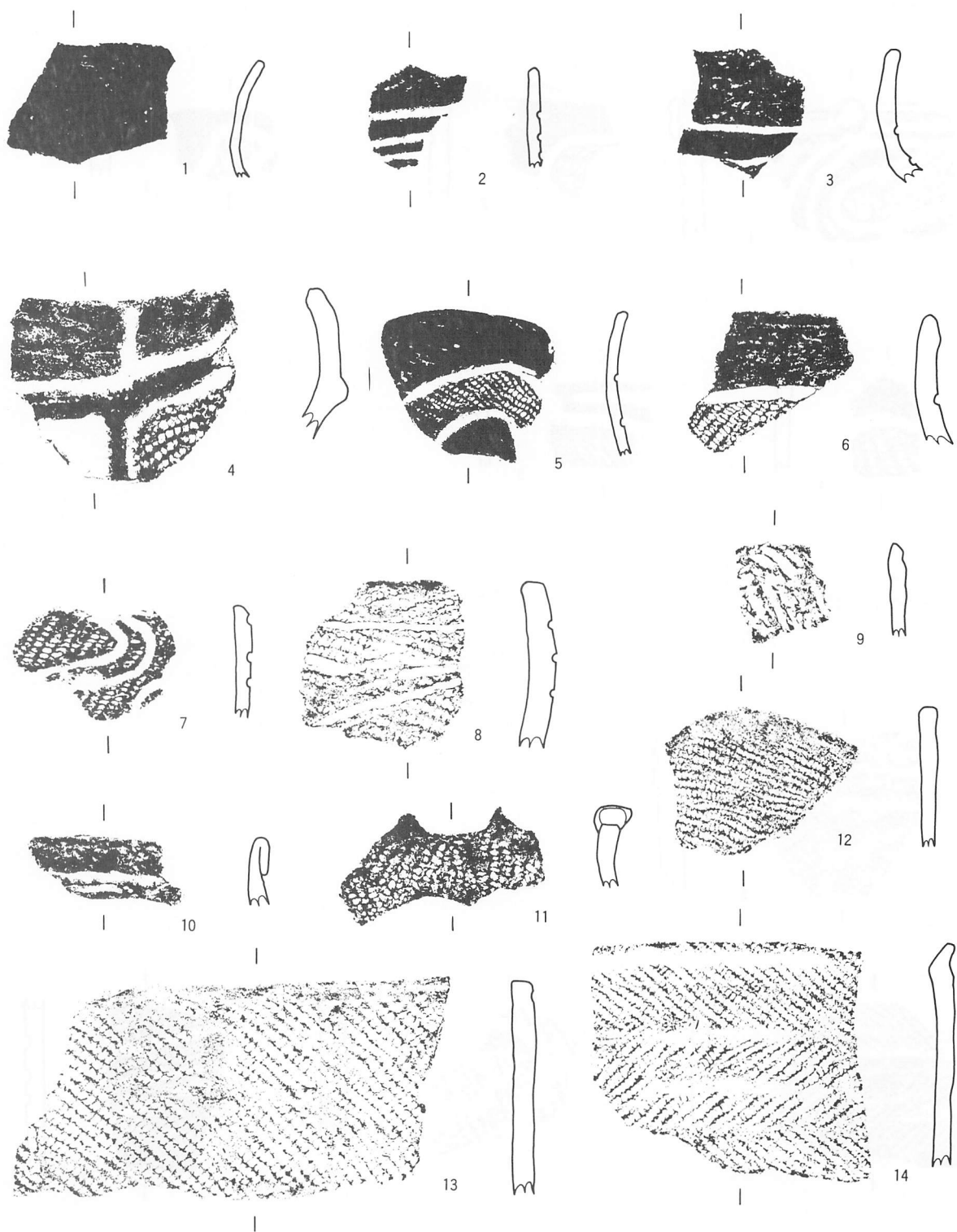




第79图 土器片



第80图 土器片



第81图 土器片

## VI. 放射性炭素による年代測定

昭和57年3月29日

協業第C-56-51号

(財)岩手県埋蔵文化財センター殿

(社)日本アイソトープ協会

### 測定結果報告書

昭和56年12月14日に受け取りましたC-14試料6個の測定結果ができましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代	
N-4373	IM No. 71	880±85yB.P. (855±85yB.P.)	DC13-1ピット
N-4374	IM No. 72	4100±85yB.P. (3980±80yB.P.)	DC16-1住居跡
N-4375	IM No. 73	3970±125yB.P. (3850±120yB.P.)	DA10-1住居跡
N-4376	IM No. 74		
N-4377	IM No. 75		
N-4378	IM No. 76		

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(years B.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に広げますと確率は約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

## Ⅶ. 赤外吸収スペクトルによる琥珀の分析

江刺家Ⅳ遺跡より出土した琥珀の赤外吸収スペクトルによる分析

岩手県立博物館

1. 資料 測定に用いた資料は次のとおりである。

- (1) 遺跡名 江刺家Ⅳ遺跡
- (2) 出土状況 DC16-1 住居跡の床面
- (3) 資料 ザクザクになっていて形状がわからない。加工の痕跡は認められない。色は茶褐色である。

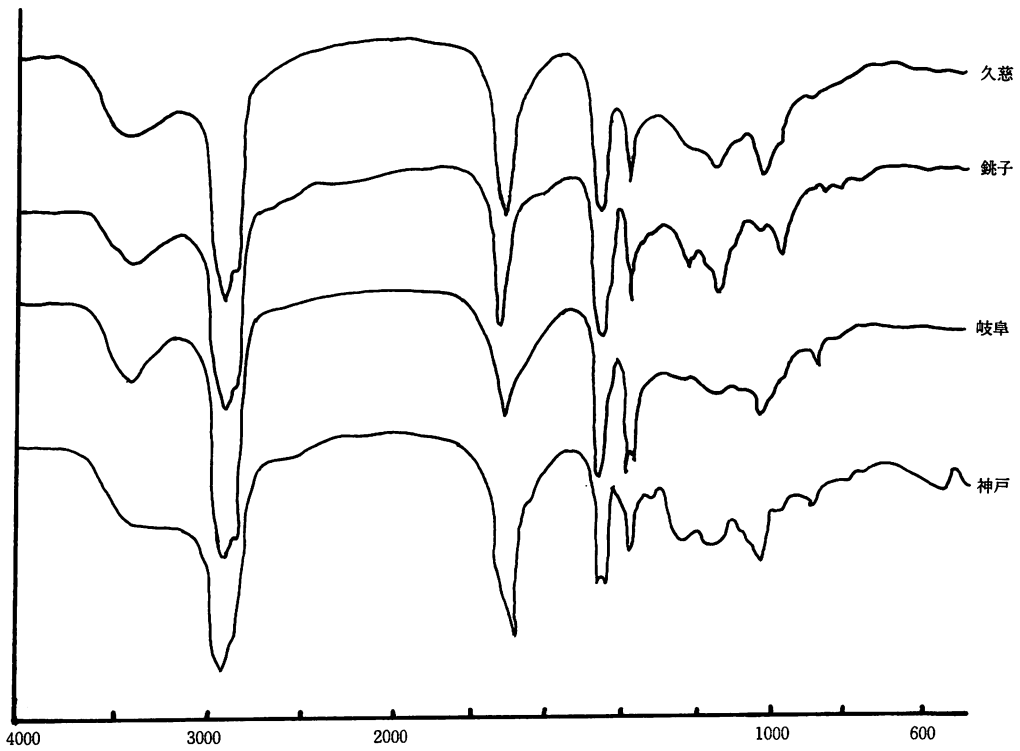
2. 赤外吸収スペクトルの測定

分析試料はKBr錠剤とし、○○製作所260-10型分光光度計を用いて測定を行った。次に測定結果を示す。

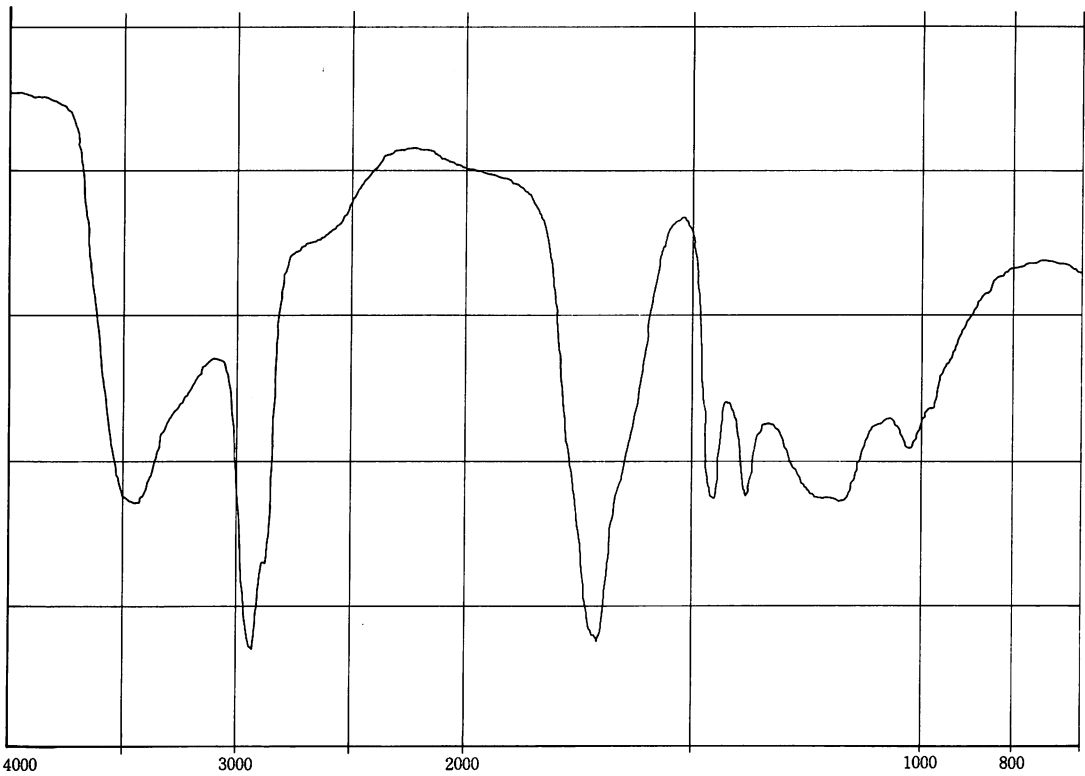
特徴的なピークとしては、C=O伸縮振動による $1720\text{cm}^{-1}$ 付近の比較的鋭い吸収、メチル基の逆対称、対称変角振動による $1460\text{cm}^{-1}$ 、 $1370\text{cm}^{-1}$ 付近の同程度の吸収及び、 $1250\text{cm}^{-1}$ から $1150\text{cm}^{-1}$ にかけての飽和エステルのC-O伸縮振動等があげられ、これらの吸収パターンは、室賀らが測定した久慈産琥珀や東大寺古墳出土琥珀のものとよい一致を示している。

参考文献

- (1) 藤永太郎、竹中亨、室賀照子 1974 本邦出土琥珀の産地分析—赤外吸収スペクトルによる研究—日本化学会誌1974—9
- (2) 室賀照子 1976 赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析 考古学と自然科学第9号



1. 原産地別資料(参考文献(2) 引用)



第82図 スペクトル、グラフ

2. 江刺家IV出土資料

## Ⅷ. 竪穴住居の推定復元

はじめに 竪穴住居跡は多くの発掘調査例がある。これは竪穴住居が人々の住居として長い時代にわたって利用されて来たことによるものであるが、なぜ、原始や古代の人々はこのような住居形式を選んだのであろうか。具体的な各時代の構造や、構造の変遷はどうであったのだろうか。古くて新しい問題である。

竪穴住居を現存遺構で見ることができないので、直接の解決方法はない。多くは発掘調査された住居跡の下部構造から上部構造等を復元しようとする方法を試みる。これは下部構造は上部構造と無関係ではありえないという前提があるからである。しかし、個々の遺構から個々の住居を復元できるほど多くの資料が得られないのが現実である。

少数の事例ではあるが、焼失住居が発見されることがある。これによって炭化した状況で使用された部材の一部を断片的に見ることができるのである。残存状況にもよるが、部材の材質や、材料の使用部位などを知ることができるので、非常に貴重な復元資料となる。しかし、焼失住居といえども個々の住居を復元できるほどの資料が得られるのは、きわめて稀なことといわねばならない。

このように住居の復元は個々の復元の場合大変困難をとまなう。これまでに試みられた住居の復元は断片的に得られる発掘調査資料を集成して、推定によって復元する平均的な復元であるのはこうした事情によるものである。

一口に、竪穴住居といっても、材料、道具、加工技術、構造技術、住居に求める条件など、住居の形状や機能を決定する条件は時代や年代とともに変化したであろうから、住居の作られかたも又、変化して来たと思われる。

より単純な構造から徐々に改良が加えられ、多くの要求に答えられる住居となって来たにちがいない。このような変化が遺構からどれだけ読みとれるものであろうか。通常は、「ここに痕跡があるから、このように復元できる。」のであるが、反対に、「このような復元も可能であるから、ここに痕跡があるかも知れない。」というのが、今後の研究課題となってもよいのではないだろうか。

このためには、推定復元の作業がいくつか必要であるように思われる。まず、発掘調査資料にもとづく推定がなされなければならない。推定は図上および想像の作業である。次は推定にもとづいて実際にその物を作りあげる復元が必要である。

ところで、推定と復元は一体のもののように思われがちであるが、はたしてそうであろうか。推定はあれこれと可能性の中をもっているが、実際の復元では可能なことと不可能なことがある。推定のように出来ないことがある。

そこで、何はともあれ、さまざまな可能性を推定し、実際の復元作業の体験を通じて、この問題を実感としてとらえることから始めてみたい。というのが今回の目的であった。

**復元の条件** 推定や復元の作業を始めるにあたり、時間や労力の制限があるので、すべての作業を復元的におこなえないので、とりあえず、どのていどのことを予定し、実施するかを検討するうちに、次のような条件をおくことが必要となって来た。

1. 推定の根拠、およびその復元は実物の遺構によっておこなう。
2. 材料は、すぐ、簡単に入手できるものであれば何んでも利用する。
3. 道具は、現代の道具を用いる。
4. 部材の結合にはビニール紐を用いる。
5. 構造および加工、施工技術は極力単純かつ原始的であること。

これは、住居の形状や機能は主として、(1)材料、(2)道具、(3)加工・工法上の技術、(4)構造上の技術、(5)住居に要求される条件、などによって決定されると思われるが、今回の推定復元にあたっては、(4)と(5)を主として、(1)(2)(3)は従として考えようとするものである。

**住居跡の選定** 実物の遺構を利用して復元をすることにしているので調査終了の住居跡の中から選定しなければならない。出来るだけ簡単に作る都合もあるので大形でない方がよい。かといってあまり小形で作りがいがなくなる。炉は地床炉よりは石囲炉であった方がよい。など、いろいろ検討の結果、D A10—1住居跡が選定された。

D A10—1住居跡は北西から南東方向に傾斜する斜面に作られており、規模は、床面で径3.3～2.9 mのほぼ円形で、壁の高さは、0.45～0.12mがあった。床面はほぼ水平である。住居内には3本の柱跡と1基の石囲炉が検出されている。復元の手がかりは住居の内にも外にもこれだけである。3本の柱のうち炉に近い2本の柱はほぼ垂直に穴が掘られているが、奥の1本は根元が内側に傾斜する穴が掘られてある。このために、この柱の上部先端は住居の外側に傾くことになる。

**構造の推定** (第88図) D A10—1住居跡は床面で直径3 m前後の円形住居であるから少し小さめの住居跡といえる。この住居にできるだけ広い内部空間を作りたいのだが、床面積ではこれ以上にできないので、後は高さでより広い空間を作る以外に方法はないことになる。しかし、これもいたずらに高くすれば屋根の高さが高くなり、床面に対するバランスを失うことになる。高さもある程度のところでおさえなければいけないと思う。

数少ない復元の手がかりの一つに柱位置があって、これを無視することはできないし、炉の位置も生活行動の結果として位置が定まっていると考えられるので、住居の構造とは無縁ではないことになる。

D A10—1住居跡の炉は、住居の中央にはなく、床面中央と壁との中間ぐらいの位置にある。



この位置は3本の柱を結ぶ三角形の重心位置にあたるので、炉の位置は三本の柱位置とは無関係ではないと思われる。

これから主として、柱と炉の位置関係から基本的な構造を推定してみようと思う。

内部空間の確保は屋根の形によってきまるものようである。屋根の形としては、まず屋根の頂点を1点に集める円堆形が考えられ、頂点の位置を住居の中央にもって来る場合と炉の真上にもって来る場合が考えられる。しかし、円堆形は屋根の頂点が高いわりに室内の高さが平均して高くならないし、本住居跡のように柱が三本で、柱位置が壁よりにある場合は柱の高さを極端に低くして屋根の高さを調整するか、柱の高さに合わせて高い屋根を作るか、のいずれかになる。前者の場合は柱そのものが不用になるだろうし、後者の場合は柱の高さにもよるけれども屋根の傾斜が一点に集まらなくなる可能性がある。

この住居の場合基本的に円堆形は都合が悪いので、もっとも壁ぎわに位置する2本の柱によって、柱の高さと屋根の頂点の高さのバランスをとり、屋根の頂点から残り1本の柱との間で、柱の高さと屋根全体の傾斜を調整することによって屋根の形をきめた。屋根の頂点位置を住居の中央真上によるか、炉の真上にするかについては、炉をはさむ2本の柱と屋根の頂点の高さを調整する過程で、炉の真上に頂点を位置させることが檜木が接地する位置との関係などからもっとも都合がよいことがわかった。3本の柱を結ぶ3本の桁を床面より1.4～1.5mの高さにとると、屋根の最高点の高さは2.7～2.8mとなり、床面の規模とほぼバランスがとれたように思われる。

柱や炉の位置、屋根の形がほぼ定まったところで、内部空間を見ると、住居内は、炉と対称的な位置にある奥の柱とを結ぶ線によって左・右の空間に2分されることに気づく。仮に、この左・右の空間のいずれかに出入口が設けられたとすると、出入口のついた側の空間は住居空間の機能を失うことになり、内部空間は半減したことになる。

出入口同様、炉も又、住居空間を減少させることになる。3本の柱位置と炉の位置関係から炉の真上に室内の最も高い空間を作り、なおかつ、室内の中央ではなく、より外側に炉の位置をおくことが必要となったと思われる。

結果的には、炉の位置する側に、出入口を設ければ室内空間の減少を最小限度にしたことになる。このことから、住居空間を可能なかぎり有効に確保するためには、空間機能を減少させる施設の位置を空間を区分する線上の壁側に配置することも一つの方法であると思われる。この住居の場合、炉と奥の柱を結ぶ線によって空間を2分できるのは、このような結果からであろう。

DA10-1住居跡には、出入口と思われる施設の痕跡は確認されていないので、遺構の上で出入口の位置を復元できないが、以上のような推測にもとづいて出入口の位置を定めると、出入

口は南東向きで、斜面の下側を向くことになる。

最後に、煙出の問題であるが、住居内に炉がある以上内部空間は広くもなく、いくら炉が出入口の近くにあるとはいえ、排煙は気になることの一つである。

当時の人々はまったく、このことを気にしなかったのであろうか。

煙出を何か簡単な構造で作れないだろうか検討してみたが、構造的には特別困難とは思えないが、納得のゆく試案が出ないまま復元作業を始めることとなった。

**準備** 施工にあたり準備した用具と材料は次のとおりである。

用具はノコギリ、ナタ、カマである。

材料は 柱、桁、棟木、主要樅木材として、丸木材の太くて長いもの。

樅木材として、丸木材の細くて長いもの。

小舞材として、丸木材の細くて短いもの。

小舞、おさえの材料として、生柴

屋根材として、牧草と芦

結束材として、ビニール紐

丸木材、生柴は用地内の立木伐採後の残材の中から選択した。屋根材は用地内の牧草畑から刈払った牧草と、沢の芦を刈とって使用した。

**復元施工** 住居跡は調査終了となったそのままの状態を利用して利用することになっているので、特別に手は加えなかった。

柱と桁、住居跡の柱穴3ヶ所に、準備した柱3本をそのまま立て、柱と柱穴との間に土をつめた。次に、住居の床面より1.45mの高さに、3本の桁を固定した。

主要樅木と樅木、地面と前2本の柱と桁の交点とを結び、屋根の頂点で合掌するように、2本の主要樅木をおいた。この合掌点の真下は炉の中央であるように調整した。床面から合掌点までの高さは2.7 mである。住居の大きさに対しては一応バランスがとれたと思われるので、2本の樅木を固定した。なお、樅木の接地位置は竪穴の壁より外側に約0.5 m離れた位置となった。

次に、合掌点と残り1本の柱と桁との交点に棟木を固定した。

最後に、奥の1本の柱と桁の交点から、棟木を延長するような方向で、竪穴の壁から外側に約0.2 m離れた地面に主要樅木を1本固定した。

これで、この住居の骨格は出来上がったことになる。

**樅木** 正面は、中央に巾0.8 mで、高さは桁の位置と同じ高さにした入口を設けた。樅木配りは正面の桁に結びつけることになったので扇樅木になった。接地点は主要樅木の2本を結ぶ直線上にならんだ。

左・右の側面は樺木の接地点を豎穴の壁にそわせる関係から、樺木を側面2本の桁にのせな  
いで、直接棟木にのせてつなぐことにした。結果的にこの方法が内部空間を少し広くすること  
になった。樺木は1点に集中させていないので、樺木配りは配付樺木となった。

背面は、奥の1本の柱と桁の交点を中心に、接地点は豎穴の壁にそわせて配置したので、樺  
木配りは扇樺木となった。

左・右側面、背面共、樺木の接地点は豎穴の壁から外側に約0.2 m離れた位置である。

小舞、正面には細い丸木材を用いて6段に。側面と背面は生柴を用いて8段とした。いずれ  
も樺木材に結びつけて固定した。

屋根葺 屋根材は1段目だけ芦(草丈1.2~1.3m)を用い、2段~6段目は牧草(草丈0.8~  
0.9m)を用いた。屋根材があまり多く準備できなかったので、厚く葺くことはもちろんのこと  
葺き方も逆葺と順葺を重ねることもできなかった。1段~5段目が逆葺(草が生育していたと  
きと同じ向きに葺く)で、6段目だけ順葺(逆葺の反対)とした。

1段目の芦は束ねないでバラバラのまま草を配り、外側から生柴でおさえ、生柴をビニール  
紐で樺木や小舞に固定した。

2段目~5段目は牧草であるため、一度束ねてから屋根に配り、1段目同様に、外側から生  
柴でおさえ、生柴をビニール紐で樺木や小舞に固定した。

5段目で一応屋根の頂点まで葺くことができたが、このままでは雨じまいにならないので、  
最後に、6段目として、牧草を6束ほど根元でさらにまとめて結束し、これを傘のように広げ  
て屋根の頂点にかぶせた。5段目と6段目はちょうど重複し、6段目は5段目と反対に順葺と  
なった。6段目の固定はこれまでと同様である。

出入口の開閉 出入口は巾0.8m、高さ1.1mほどであるが、ここに開閉装置をつけることを  
検討してみたが、今回は簾の利用方法のうち、上からたらす方法ではなく、立てかけて、横に  
まるめる方法で復元してみることにした。

簾(すだれ) まず、牧草で紐を編むことから始め、4本の紐を準備した。次に、地上に1.3  
mほどの間隔をおいて2本の杭を打ち、1.6~1.7mの細い丸木に0.25mほどの間隔をおいて4  
ヶ所の刻みを入れ、これを2本の杭に、刻みが上面になるように横に固定する。この刻みは簾  
を編む紐をはさみ、止めておくためのものである。

簾は最初に細い丸木を編み、以下芦を順・逆交互に編む、最後に細い丸木を編み終了である。  
片方の細い丸木を住居入口の片側の樺木に固定すれば完成である。

感想 思っていたより簡単に出来たというのが第1の感想であるが、これには理由がある。  
まず、使用した道具であるが、現代の文明の利器を使用している。次には材料である。ありあ  
わせの物を利用しているので準備が簡単であった。第三には、労力である。実働労力は牧草刈

私が男女10人、材料準備に男2.5人、骨格組立に男2.5人、屋根葺に男2.5人、合計17.5人であった。

今回は多数の労力を集中的に配分しているが、実際には少人数で作業をするものとするれば、全体として少ない労力で作業ができたことにはならないように思える。

私達はとりあえず作ることに重点をおいていたので、住居に対する細かな点については何も検討を加えていない。実際には細かなことでも多くの工夫があったと思われる。住む者の立場になって考えれば私達はもっと多くの発見をすることが出来るかも知れないと思った。第1の感想をもつに至った事情を考えると、縄文人は材料や道具など準備のために、どれだけ多くの時間と労力を必要としたかがわかるような気がした。

以下いくつかの項目について気のついたことを記してみよう。

内部空間等、屋根の外観であるが、一応床面積に対する高さのバランスはとれているように思えた。

次に、内部での屋根の高さであるが、設計当初に思っていたほど低い印象はなく、室内での移動も不自由ではなかった。

炉の位置と出入口の位置は室内空間を最大限に確保することに、効果的な位置にあると思われた。

屋根等 屋根の厚みは、今回は材料不足から一応覆うだけになっているので、室内からチラチラ光が見えるほどであった。本来はもっと厚く葺くべきものであろう。しかし、6月中旬に出来てから10月下旬の解体まで、風雨に対しては予想以上に強く、室内の雨もりはほとんど見られなかった。

又、斜面に住居が作られているため、地表面を雨水が流れ込むことを心配したが、これも、予想に反して、心配したようなことは見られなかった。

屋根の強度は予想以上で、屋根葺に大人3人が上で作業していても損傷や変形は見られなかった。

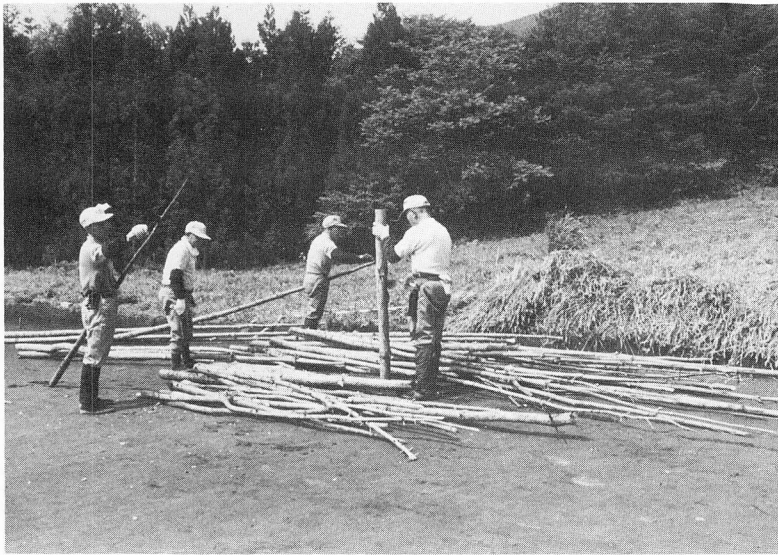
排煙等、実際に火も使用して見た。心配していた排煙は尾根が薄いこともあって、屋根材の隙間から煙が外に出ていた。出入口の上の屋根を切りとって排煙口を設けて見たが効果はあまり明確ではなかった。屋根が厚くなれば効果があるであろうか。

主要骨格等 構造上、今回の復元案の他に次のことが考えられる。第1は、奥の柱のところであつなっている棟木と主要樫木とを1本で通す方法である。奥の柱の所で少し屋根が低くなるが支障とはならないであろう。第2は、正面2本の柱から、奥の柱につながっている2本の桁を省略する方法である。これによって室内空間は見かけの上で広がったようになる。しかし、一方では、この2本の桁は炉をはさむようにあるので、保存食の貯蔵や、その他の利用方

法が考えられるので、そのまま残した方がよいという考え方もあった。



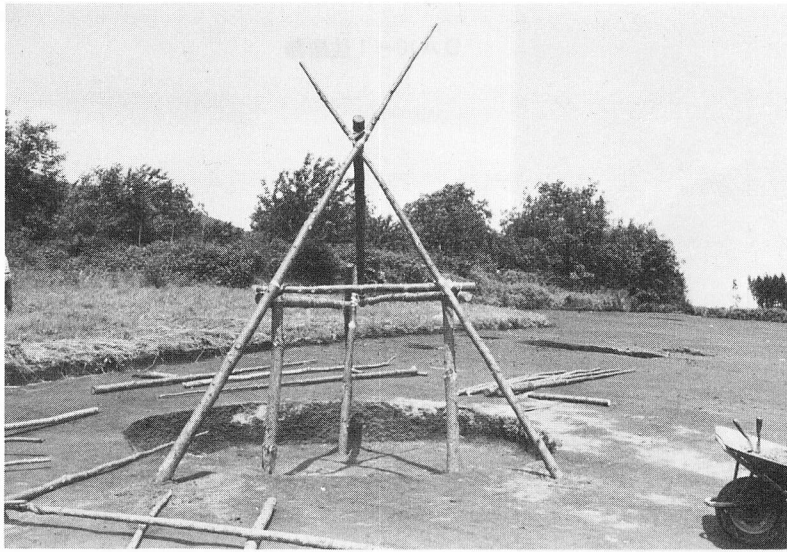
D A10-1 住居跡



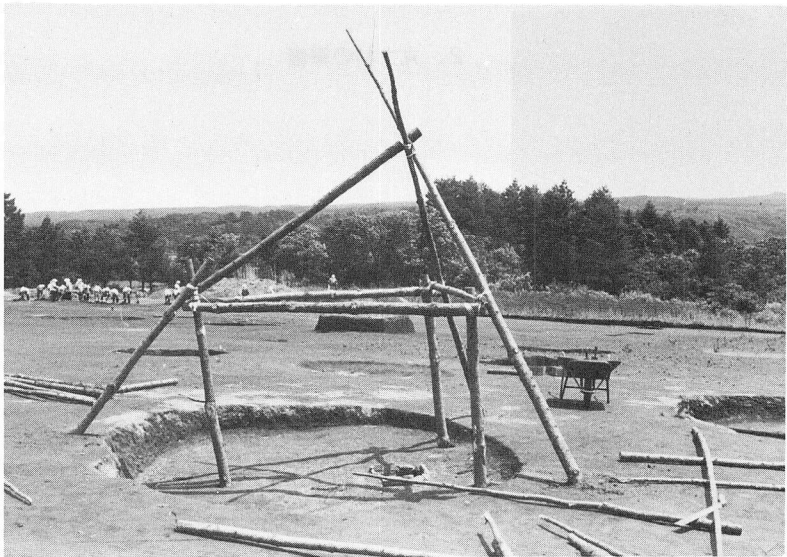
2. 丸太材の準備



3. 芦のかりとり



1. 主要部材組立(正面)



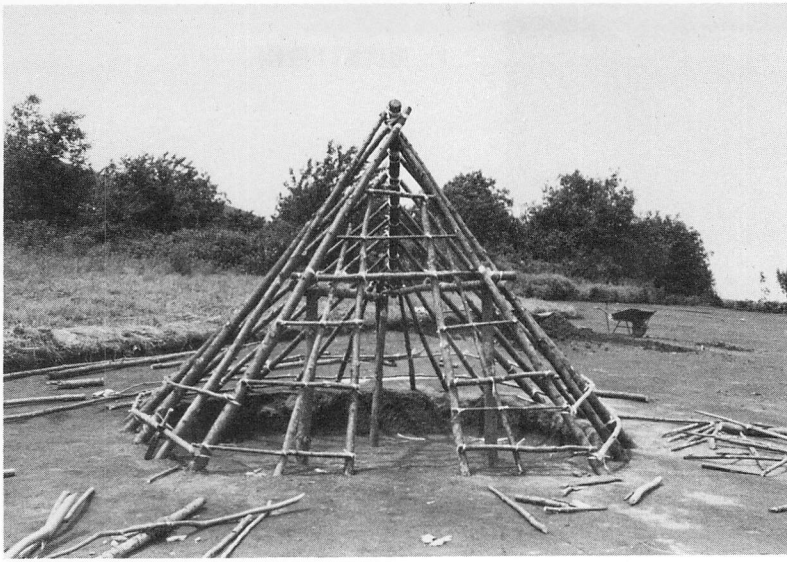
2. 主要部材組立(側面)



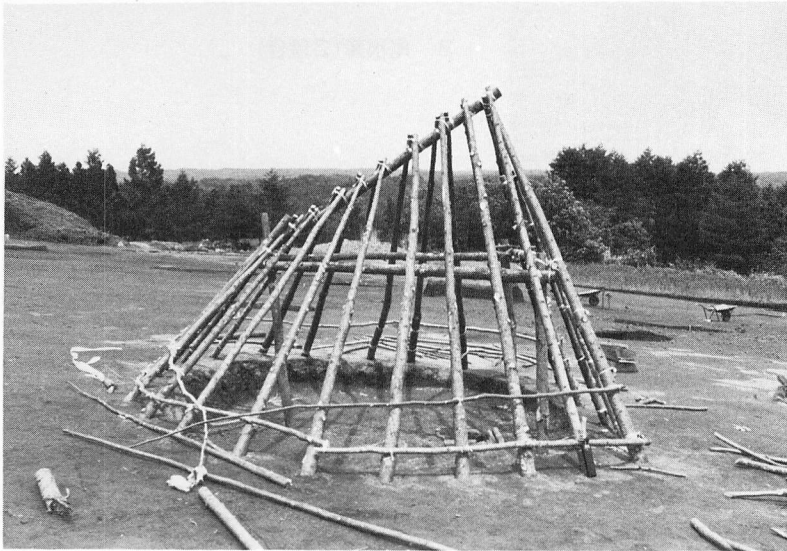
3. 作業風景

第84図 竪穴住居の復元

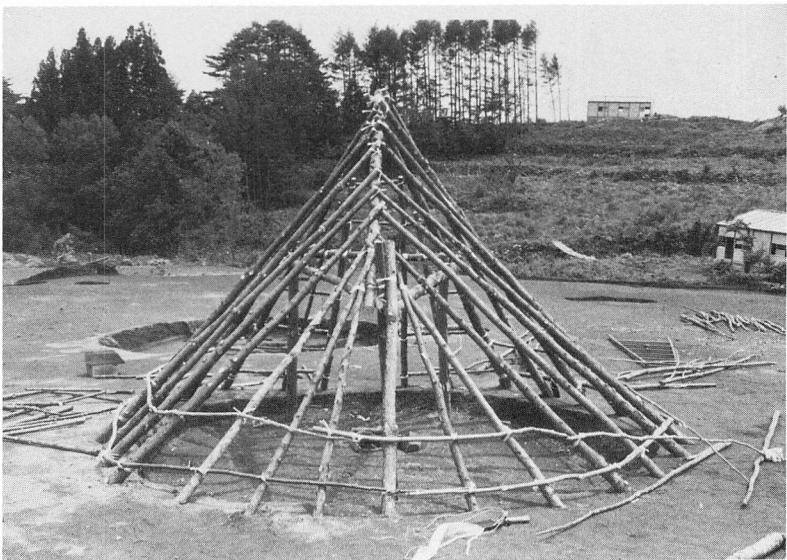




1. 極木組立完了(正面)



2. 極木組立完了(側面)



3. 極木組立完了(背面)

第85図 竪穴住居の復元





1. 尾根葺(1段目)



2. 尾根葺(2段目)



3. 尾根葺(4段目)

第86図 竪穴住居の復元



1. 完成(正面)



2. 完成(側面)



3. 簾編み

第87図 竪穴住居の復元



---

---

岩手県埋蔵文化財センター調査報告第59集

江刺家Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書

—東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査—

印刷 昭和58年 3月19日

発行 昭和58年 3月25日

発行 財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村

大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-5820, 9001, 9002

印刷 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1983

---

---